光文社時代小説文庫

武蔵を斬る

長編剣豪小説

早乙女 貢（みつぐ）



光文社

KOBUNSHA

カバーイラスト 東 啓三郎

光文社時代小説文庫

武蔵を斬る

長編剣豪小説 **早乙女 貢**



光文社

さ 6 1 480

早乙女 貢

武蔵を斬る

光文社時代小説文庫

光文社時代小説文庫

武蔵を斬る 早乙女 貢

代々、足利家に仕える「剣法指南所」として天下に名声を馳せた吉岡憲法が、作州牢人宮本武蔵に仆された。

一門の名誉を回復すべく、武蔵を追う京流継承者・吉岡清次郎…名手が渾身の筆致で描く長編剣豪小説!

【著者略歴】1926年旧満州ハルビン市生まれ。『僑人の檻』で第60回直木賞を受賞。以後、歴史・時代小説の第一線で活躍中!

光文社

ISBN4-334-70268-6 C0193 ¥480E 定価480円

光文社文庫

長編剣豪小説

武蔵を斬る

早乙女（さおとめ） 貢（みつぐ）

光文社

武蔵を斬る
長編剣豪小説
早乙女 貢（みつぐ）
光文社文庫

光文社文庫

長編剣豪小説

武蔵を斬る

早乙女（さおとめ）貢（みつぐ）

光文社

目次

鞍馬の血祭 7
よしきり剣法 33
決闘死人橋 60
武蔵塚を曝け 89
慶長御前試合 117
剣の舞 144
秘剣闇夜星 172
火術深秘録 203
狂い官女 232
湖賊来る 259
血闘清水寺 288
剣鬼仆る 317
解説 石井富士弥 345

鞍馬の血祭

一

作州牢人宮本武蔵なる男が、室町御所兵法所の名門吉岡憲法を仆して姿を晦ましたのは慶長九年六月の半ばである。

それまで、そのような名前を聞いた者はなかった。かれは、突然、洛中にあらわれた。当時、徳川家康が将軍宣下して、江戸に開府したばかりで、漸く乱世に終止符が打たれた感はあったが、大坂城には秀吉の遺孤秀頼がいるし、未だ豊家を慕う大名は多い。

いずれ、関東ともう一戦あるにちがいないという噂は、ひそかに囁かれていたが、表向きは両者とも、そういう気配は見せず、泰平を愉しもうとする世間も、その危機感は意識の外に置いていたようである。

吉岡家では当主は代々憲法と称し、室町御所兵法所として剣名は洛中洛外に聞えていたが、その足利家が十五代義昭を最後に滅亡しても、京流吉岡の名声は遍かった。

世間というものは、一度信じこんだことはなかなか改めようとしないものである。

宮本武蔵と名乗る男が、その吉岡一門に試合を挑んだのも、その名声のゆえであろう。

吉岡の名前が大きければ大きいほど、それを仆した者の名は高く評価される。

乱世の余燼消えやらぬ時代、試合は真剣か木刀である。危険はいうまでもない。意趣の有無には関係なかった。

試合を避ければ、逃げた、ことになる。兵法者としての名誉は地にまみれる。ただし、吉岡ほどの名門になれば、名もない牢人と対等に試合する必要はなかった。口実をもうけて相手にしないことも可能だった。門弟であしらうこともできる。

当主の憲法直賢の嫡男源左衛門直綱が敢て立ち合ったのは、先に異母弟伝七郎が宮本に一撃で仆されたからである。路傍の喧嘩にもひとしい、些細なことからであった。

直綱は所司代立合いのもとで、宮本に片腕を打ち折られた。利腕であった。命はとりとめたが、兵法者としては、もはや使いものにならぬ。憲法はすでに老いて実力は伜よりも劣っていた。直綱にはもう一人弟がいた。又市郎直重という。

その又市郎直重は昨夜、路上で死んでいた。一刀のもとに斬られていたのである。

「宮本の仕業だ、宮本にちがいない」

一門の者はいきりたった。ただちに八方に手をまわした。宮本らしい男を洛北の柊野で見かけたという情報が入った。

「鞍馬に逃げこんだのだ」

かん高い声で叫んだのは従弟の清次郎重賢だった。

「鞍馬街道なら私がよく知っている」

刀をつかんで立ち上った。

二

吉岡清次郎重賢は数え年で十六歳であったが、もともと大柄で、肩幅も広く立派な成人だった。ただ幼な顔が紅唇や涼しげな眼もとに残っている。事情があって、清次郎はいまの貴船口のてまえ、夜泣峠の麓の二ノ瀬の村里で育った。

このあたりの地勢に詳しいのは、そのためである。

「鞍馬寺に逃げこまれてしまえば、うかつに手が出せぬ」

その心配が、かれらの足を速めた。

鞍馬寺は密教の道場として知られている。京の市街からは近郊にすぎないが、一歩、山の中に踏み入れば、天を衝く巨杉が山を蔽い、俗塵の侵入を嫌う険しさで、道らしいものは、由岐神社と鞍馬寺の山門へ通じるものだけだった。

あとは杣道、もしくは、けもの道だけである。陽のささぬ林間には、蟬の声が姦しく、真昼から野猿が飛び交い、鹿が走った。鹿は神の使いとして、保護されている。杣人も、山中二百を号する山坊でも獣肉の範疇には入れていない。

開山の由来はいずれも非科学的なところが神仏の霊験の尊さであろうが、この鞍馬寺もその例に洩れない。

大和に唐招提寺があるが、ここを開いた鑑真和上の高弟として知られる恩託律師鑑禎上人が開祖といわれている。

その縁起も、正月四日の初寅の日、霊夢を見て山中に初めて足を踏み入れたという。宝鞍を乗せた白馬に導かれて、山へのぼった上人は毘沙門天を感得して、草庵を結んだのが鞍馬寺の開基であり、この馬に鞍が、鞍馬の名の起りでもあるという。

謡曲にも、〝使いは来たり馬に鞍、鞍馬の山の〟うんぬんとある。「獅子頭山金剛寺命院白馬蓋寺」という山号はそれを表現している。

この毘沙門天だけが礼仏ではない。三十年近く経って、藤原伊勢人が観世音を祀って、大伽藍を建立して勅願寺とした。東寺、西寺の建立と同時期である。

延暦十三年の平安京遷都の直後で、王城鎮護の道場としての権威を持つに至ったのだ。京の北辺を護る寺である。寺が信仰の存在だけでなく、一種の砦や出城を意味しているのは、いうまでもない。

鞍馬寺の奇妙な縁起は、まだつづく。鑑禎上人の入山から百年後、峯延上人が山坊で護摩の秘法を修するところに巨大な雌雄の大蛇があらわれて、上人を呑まんとした。上人は毘沙門の神呪を誦して雄の大蛇を段々に斬って捨て、雌の大蛇を調伏せしめたというのである。

こうした説話が、牛若丸の義経伝説をさらに敷衍させることになるのだが、これとは別に奥の院には魔王堂が今日なお残されている。

開祖の入山よりも以前に、棲んでいた魔王を祀るという。鞍馬山の守護神はしたがって大魔王であり、前述の調伏された雌雄の大蛇が水源を守っている。閼伽井護法善神社は、この大蛇を祀る。

密教の持つ奇怪さには、奥深く凡人の理解できぬところがあるが、それが真言秘密の尊さであろう。

はじめは法相宗に属していたが、峯延が真言宗に改め、のち、延暦寺の忠寿によって、天台宗に改められ今日に至っている。

「宮本なにがしは、この深山に隠れたのだ」

吉岡一門の人々がそう思ったのは、この山の神秘さを識っているからだった。

名門吉岡には係累が多い。弟子すじも多岐にわたっている。吉岡といえば京流ということになるが、吉岡一門が〝京流〟と号した記録はない。世間で京の吉岡の剣の流れを、そう呼んだだけである。

〝流名〟が売物になるのは後年のことである。塚原卜伝の卜伝流というのも、〝卜伝の流れ〟を意味しているだけで、当人が号したことはない。

ともあれ、吉岡の名声は、宮本武蔵という一介の牢人者を、京にとどまらせなかった。宮本が姿を消したのは、多人数による報復を恐れてのことだ。鞍馬寺ではこの男を匿うにちがいない、というのが一門の人々の見方であった。

「どこに隠れたか？」

夜になれば、道もわからなくなる。清次郎は焦って山中ふかくわけ入った。宵闇が迫るころ

かれは、一人になっていた。

「これは……困ったな」

宮本武蔵を捜すよりも、自分が迷ってしまう。山中では一歩踏みはずすと崖から転落するおそれがある。標高は五、六百メートルであるが、山容は険しい。

清次郎は、一門の誰よりも、この山に詳しいつもりだった。

四年前まで、喝食として、山坊に在った。期間は僅か半歳くらいのものだが、山内の地理は忘れていないつもりだった。

その自信が、裏目にでたのだ。山の夜は、日が落ちたと思うと、急速に昏くなる。清次郎は全く、道を見失ってしまった。羊歯や熊笹が生い茂った小径を焦って走った。焦るほど、踏み迷ってゆく。

（僧正ヶ谷へ入ったか？）

幸い星が出ている。星明りだけでも有難い。

それから一刻ほど後、清次郎重賢は、漸く鞍馬寺の道へ出ることができた。りょうりょうたる法螺の音と、山内の火が、かれを導いてくれたのである。

夜の火は遠くでも近くに見え、小さくても大きく見える。この火は、火祭りのそれではなかった。鞍馬の火祭りは秋に行われるが、鞍馬寺とは無関係である。中腹にある由岐神社の祭りなのだ。

祭殿のまわりに篝火が燃えていた。

清次郎は足音をころして近づいた。疲れきっていたし、空腹だった。人の姿を見たら、食物を需めたい気持が先にたったが、その闇を焦す火は、秘密めいて、俗人の近寄り難い雰囲気だった。

清次郎は近寄ると杉の幹に身を隠して、そこをのぞいた。

（あっ……禊だ!?）

清次郎は思わず叫びを洩らしそうになった。痛切な記憶が甦った。

祭殿の横に小さな泉がある。篝火がうつって血を流したようにぎらぎら光っていた。そのまわりに、山法師たちが二、三十人群がっていた。

いまさっき、清次郎が杉林の中から望遠した松明の行列が何であるかが、はっきりした。

それは、一人の浄衣を着た少年だった。

少年は十一、二に見えた。恐怖で眼を大きく瞠き、真夏の夜というのに、ふるえているのが、はっきりわかる。

角前髪の愛くるしい顔だちである。おそらく常には、紅唇黒瞳、無邪気な少年であろう。その花びらの唇は色を失っていたし、さながら屠所に曳かれる羊のような足どりだった。

この少年を、屈強の山伏二人が、左右から抱きかかえるようにして、泉にやってきたのだ。

山法師たちは、法衣の腰に太刀を佩き薙刀を横たえ、あるいは杖ついていた。法螺貝の音が変った。それが合図であったかのように、かれらは一せいに、叫びはじめ、

「護法善神よ照覧あれかし」

「おん前に候」

「ただいま禊はじめ候」

山法師たちの唱和は、さながら山巓から巨杉の傾斜を吹き颪す鞍馬颪の風の声のように、夜空を流れた。

山麓の村人たちが、「天狗颪」「天狗の唸り」と恐れて手を合わせるのは、この声であろうか。清次郎も小さいときは、時ならぬ法螺の音や夜風の唸りに、怯えたものだった。

「ただいま禊はじめ候」

「禊はじめられ候え」

一段と声は高くなった。

それとともに、泉の畔りで控えていた男が、少年の浄衣の帯を解き、手荒に引き剝がした。

山法師たちはどよめいた。そのどよめきは、護法善神への呼びかけでもあったろう。

浄衣の下に少年は何もつけてはいなかった。一糸まとわぬ裸身が、篝火に照らし出された。

この年ごろの、特に人身御供に選ばれた美少年だけに、少女のような美しさにさえ思えた。山法師たちは、唱和をつづけているが、その声にある種の感情がこめられていた。

この人身御供の稚児は、

「祈られ坊」

と、呼ばれている。

前述したように峯延上人によって調伏された雌の大蛇は、前非を悔いて守護神になっている。

つまりその護法善神へ美少年を捧げるという儀式である。

今日では人形を捧げることで代行しているが、当時は神仏の通力を心から信じ恐れていたから、その儀式には手抜きは許されなかった。

全裸にされた美少年は、すでにもう四日間夜毎、この責め苦を受けている。その疲労と恐怖が、最後の難行を目前にして、全身にあらわれていた。

（哀れな……）

清次郎の手は思わず、刀の柄にかかっていた。

かれは、その美少年のむざんな姿の上に、四年前のおのれを重ね合わせた。

清次郎は、憲法の弟清十郎直元が、市原の女に産ませた子である。

市原の女は、大原女や、梅ヶ畑の女と同じように、洛中に物を売りにくる。頭に薪や梯子を乗せて触れ売りして歩く。

市原女は青物を売りに来た。水菓子と呼ばれていた柿や梨や杏など果実も持ってくることがある。

清十郎直元は、その女を殆ど手籠め同様にして思いを遂げた。市原女は美貌の女が多いと称われている。殊に、その女お珠は評判だった。

先代の憲法、つまり直賢と清十郎直元の父は激怒した。

直元は勘当された。かれが諸国に修業に出たのは、天下に名をあげて来なければ、父の勘気が解けぬからであった。

お珠が産んだのが男子であると聞いても憲法は、すぐに許さなかった。名門の意識というものは、常に尊大で驕慢である。お珠の出自を蔑んだのだ。お珠はしかたなく清次郎を女手で育てた。市原の家では世間の白い眼に耐えられない。二ノ瀬の叔母の家に世話になったのである。

母親似だったことが、清次郎の不幸といえるかもしれない。女性に見まほしい美貌に生れたのが、山法師たちの眼にとまった。このあたりは、鞍馬の魔王の神通力の範疇にある。代々、「お山」を信仰し、その権威には反抗を許されない。まつり（祭）は恐れから出発した行事である。山法師たちが、稚児を大蛇に供するのも、恐れからだ。その山法師たちを恐れる村人たちには、指名を拒む力はなかった。

乱世であればあるほど、地域社会の権力者は絶対権力を保持できるわけである。

清次郎は、そのときの恐怖と不安と、そして屈辱を忘れない。

いま——

その新たないけにえが、責め苦をうけようとしていた。

「禊はじめられ候え」

かれらの声は、あたかも、歓喜に酔っているようであった。

それは、これから起る、加虐の快感に早くも陶然となっている。美酒の匂いで舌なめずるに似ていた。

美少年の少女に見まほしい、なよやかな裸身は、荒々しい山法師の手で泉の畔りに坐らされた。

もはや、言いなりであった。巨大な力の前で畏怖して、動けないのだ。蛇に睨まれた蛙というか、虎の吐く息に金縛りになった兎であった。

法衣の袖をたくしあげて、松の根瘤のような腕を剝きだした山法師が、手桶で泉から汲みあげた水を、ざぶっと、頭から浴びせた。

その凄まじい水の勢いに、少年のからだはよろりと、前へよろめく。息つぐ間も与えず、二杯目が、飛沫をあげて、おちる。三杯目までが、一人で、四杯目から二人になる。左右から交互に水を浴びせるのだ。

速度が早くなる。冷水は、絶え間のない滝のように、次々と、少年の頭上から降り注ぎ、前髪を乱し、肩で飛散し、全身を凍らせるように流れた。

真夏の夜とはいえ、五百メートルの高さである。洛中が灼けつくような暑さのときでも鞍馬山中は涼しい風が吹いている。況や、夜半ともなれば、晩秋の寒さになる。

特にこの小さな泉は、冷泉で聞えていた。山法師たちには霊泉とされている。山中の荒行で、時に病に倒れたときは、この霊泉を呑むと治るとされている。それも大蛇の化身である護法善神の通力なのだ。

冷水は、次から次と、涸渇を知らぬ滝のように、少年を浸し、骨の髄まで凍らせた。

（くそ！　あいつら！）

怒りで、清次郎は身をふるわした。あのときの冷たさが、いま、その水を浴びせられているように甦り、清次郎は気の遠くなるような思いだった。

同じ責め苦から解放されて、半死半生になって下山してきた清次郎を見て、お珠は泣き明した。その悲哀が、吉岡憲法の耳に入り、あらためて、孫として迎え入れられたのだ。

元服して重賢と名乗るようになった清次郎は、吉岡道場で剣の一門として鍛えられた。手ほどきをしてくれたのは従兄の伝七郎である。

諸国を経めぐっていた父の直元は去年、病を得て帰京したが、この成人した伜を見て、狂喜した。

「剣のすじがよい、このままゆけば、吉岡一門のよき支えとなるであろう」

と、源左衛門も評していた。

その矢先に、今度の宮本武蔵による痛撃を受けたのだ。清次郎は数えて十六歳という若さが、正当な試合の当事者に選ばれなかったのを不満に思うくらい、自信を抱いていたのである。

いま、かれの脳裡には、宮本武蔵のことはなかった。

冷水を浴びせられている少年が、おのれの分身に見え、怒りが、いまにも抜刀させんばかりになっている。

少年は、はじめのうち、きれぎれに悲鳴をあげていたが、それも、もはや絶え入るばかりになって、声も、聞きとれない。

「十、十一、十二……」

冷酷に水桶の数をかぞえあげる声も、少年の耳には、水勢に閉ざされて聞えないにちがいなかった。

山法師たちの眼はぎらぎらと嗜虐的な光を放ち、いまにも少年につかみかかりかねない気配だった。女人禁制の修業場である。かれらの生臭い呼吸までが伝わってくるようであった。

清次郎が、その場に飛びださなかったのは、この山法師たちを相手に斬りまくるには、あまりにも、相手が多すぎることだった。

いかに剣のすじがよく、天才的に急速に上達したといっても、経験が浅すぎる。数え歳十六では、この時代、まだ背伸びして大人に手が届いたというところだ。

三十人ちかい荒くれ山法師では荷が勝ちすぎた。

また悲鳴が奔った。漸く三石八斗の冷水によって不浄を洗い流された稚児の裸身が、数人の山法師たちによって、手とり足とり、山籠に乗せられている。あけびの蔓と麻縄で作られた四ツ手の吊台である。

（いよいよ、人身御供にされるのか）

清次郎は唇を噛んで、何やら決意すると、刀の鍔元を握るようにして、木立の中を走りだした。

三

この稚児の禊は四夜にわたって行われるが、すべての俗塵を払い、垢を落し、けがれを浄めるという大義名分がある。美少年へのこの加虐は、多分に、女体から遠去かった山僧の性慾に対応するものがある。

誰がはじめたものか詳らかではないが、前述した縁起の説話が基になっているのはいうまでもない。そこに結びつけて一山の大衆の荒い血を鎮静する作用も、当然、計算に入っていたのであろう。たとえば、暗闇祭が、因習に縛られた男女の性の解放を意味するように、すべて祭りには、近代社会で公けにできないような淫靡な理由から発している。

美貌の稚児が洗礼を受けて運ばれるのは、大蛇の化身である護法善神の社である。

社殿の中では、一穂の灯かげのもとにすでに、先ほどから、一人の山法師が、襟をはだけて、どっかと大胡座をかき、般若湯をかたむけていた。

かれらに言わせれば、この般若湯も、神へ捧げるお神酒であり、そのおサガリを頂戴しているにすぎないということになろう。密教には、神がかり的なところと仏教との混淆による不可解なものがある。神仏混淆が明治になって取締りをうけ、分離させられたことで、いくらかわかり易くなったが、それまでは、理解に苦しむことが多かった。乱世には殊にはなはだしい。仏僧は慈悲を説きながら殺戮をくりかえし、神人は剣を祭神とし、事実、卜伝やその他の関東の兵法者たちは多く神人から出、その流れをくみ、あるいは、神の啓示によって、新しい技を編み出したと伝える。多くは、誇張であり、誇大に宣伝するための、こじつけであるにしても、神社が〝剣〟を祭神視し、主体にしていることは、ざらに見ることができる。

ともあれ、この神仏の伝統的な威大な力に打ち克つ者は少ない。嘗て清次郎がそれであり、いままた、哀れな少年がいけにえにされようとしている。

祭神の座にあるのは、大蛇ではない。化身ではない。が、山法師たちは、序列や腕力で、その座を決めるのであろうか。

大蛇に供えられるべく、裸身の稚児はそこへ担ぎこまれた。

もしも、ここで儀式が終るならば、たとえ三石八斗の冷水が酷であろうとも、それはまつりとしての多少の犠牲といえるかもしれない。

だが、それからが生臭い山法師たちの狂宴になる。むしろ、眼目はそこにあったろう。

清次郎が祖父憲法に助けられたのは、このときだった。それから、何が起るかは、事前に聞いていた。思うだけに、忌わしいことだった。山法師たちの獣欲のいけにえにされるのである。一人がまず、少年の裸身に異様な器具を用いるなどして、少年の肉体を弄ぶ。それを皮切りにして、夜明けまで、数人の山法師が、次々と、肉欲を満足させるのだ。

洋の東西を問わず、同性の交りは古くから行われている。特に、東洋では仏教の女人を忌む教えが、男だけの世界の異常な情交に拍車をかけた。

公家の世界でも、武家の世界でも、その他の一般社会でも、男色の風潮はあったが、宗教の禁忌に名をかりてのことだけに仏僧のそれがはげしかったことは、天文時代に来たキリスト教の宣教師のイエズス会通信を見てもわかる。仏僧が悪魔に魅入られてソドミの悪習が蔓延していると書かれている。

（あのときの……）

清次郎は、社殿の裏から忍び入って、燈油の炎のゆらめきのかげに、肥大漢を見た。

竜王坊良仙とかいう、山法師の中でも、聞えた男だった。その男の顔を知っていたのは清次

郎自身が、その見るからに臭いからだに蹂躙されそうになったからにほかならない。
(彼奴!)
手が、またもや、刀の柄に走った。
良仙は、もうかなり酔っていた。期待でにたにたと笑い、その肉の切り身のような分厚い唇から、たらたらと、涎か、酒かを、したたらせていた。燭の火は、唇から、顎を伝わって、したたるそのものをぎらぎら光らせていた。胸毛がその厚い胸にとぐろを巻いているのも、清次郎には吐き気を催すほど、むさい感じに思われるのだ。
「これ……可愛がってくれる」
良仙は、稚児を抱き竦めると、頸すじへ分厚な唇を這わせた。
ほかの山法師たちは社殿の前へ円陣を作って坐りこみ、神酒をまわしのみはじめている。
「護法善神、愛でさせ給え、今年の稚児は無垢に候」
「今年の稚児は無垢に候……」
げらげら笑いながら唱和する。かれらはやがて、クジ引きをはじめるのだ。良仙に次いで美少年を凌辱する資格を得るために、血眼になる。儀式だから、夜明けまでに済まさなくてはならない。七、八人が限度であった。三十人ちかい人数では、順番を決めるのになかなか同志、険悪になることが多い。
だが、それを待つことは出来なかった。良仙の獣性は、稚児を出血させても思いを遂げようとするだろう。

社殿の戸が閉じられたとき、清次郎は、埃くさい床から身を起して、二人に近づいた。かれは、そのときになって、ふっと疑問を感じた。
(おれは、何をしに来たのか?)
稚児は見知らぬ少年である。助けてやる義理は何もない。あるいは、少年のほうで、それを望んでいるかもしれないのだ。冷水の呵責には悲鳴をあげていたが、怪僧に抱き竦められて、もう逃げようとはしなかった。それは、声が出なくなったのか、諦めか。あるいは、被虐の喜びを期待してのことか。赤の他人には、わからない。
本人の気持もたしかめずに、飛びこんで来たのは、卒爾だった。だが、もはや、後へはひきかえせなかった。
炎のゆらぎに、つと良仙は顔をあげたのである。
「う……なんじゃ、うぬは」
その憎体な顔が、清次郎に、四年前の怨みを沸騰させた。一瞬、清次郎は、裸身をちぢめて顫えている稚児のことを忘れた。
「忘れたか」
と、かれは言った。
「四年前、おれは、もう少しで、きさまの」
怒りが渦巻き、唇をふるわせた。かれは叩きつけるような大喝を浴びせようと思いながら、声は、少年のそれを出なかった。

荒法師の耳には、やさしいものに聞えた。大人になったばかりの清次郎の、怒りにひき攣った顔に、幼な顔を重ね合わせたらしい。
「そうじゃ、そうじゃ、思いだしたぞ、邪魔が入って、かっ攫われたがな、あのときの稚児か。そうじゃ、あのときの。うむ、ここへ来たは、わしを忘れかねてか、ははは、よかろう、やり直しじゃ、うぬから、可愛がってくれようぞ」
猿臂を伸ばした。清次郎の左の腕をつかもうとした瞬間、清次郎は飛び退っている。その飛び退った距離だけ、荒法師良仙は迫った。巨軀であった。清次郎の口から、軋るような声が奔った。灯かげを白光が裂いた。伸ばした良仙の腕が、肩のすぐ下から、落雷に打たれて太枝のはね飛ぶように切り離されるのが見えた。噴血が、一瞬、灯かげを昏くした。
野獣の絶叫とともに、巨軀は、平衡を失って、もんどりうっている。
「見たか！」
はじめてだった。はじめて、生身のものを斬ったのだ。清次郎は、ほとんど、手ごたえがないほど、楽に切れたのを感じた。
（やった……斬った……人を、斬った！……）
血の臭いが、そのとき、かれを時代の子にした。かれはおのれが、兵法者と呼ばれる存在に脱皮したことを実感したのである。
「うぬ！」
常の体力なら、片腕を失えば、悶絶するなり、虫の息になる。が良仙の体軀は人並はずれて

いた。かれは、身を起し、残りの腕で燭台に手を伸ばした。武器にするつもりだったのか。燭台の脚をつかんだ。
刹那、清次郎の衄れた刀は、青い頭の真向額に叩きつけられていた。
丈余の噴血が重く落ちてくる前に、清次郎は身を翻している。物音を聞きつけた山法師たちが、戸の前で騒ぎだしたのである。

四

少年が何か叫んだようであったが、清次郎の耳には何と言ったか聞えなかった。助けをもとめたのか。助けてやらねばならぬ義理はないのだ。清次郎としては、竜王坊良仙に怨みをはらしただけで充分であった。
清次郎はやみくもに走った。
血刀をひっさげ、杉木立の間に走りこんで方角を案じるひまはなかった。
たしかに、少年を助けようとして侵入した以上、逃げる方向も考えた上で、行動に出るべきだったろう。だが、それだけ思いをめぐらすには、やはり若すぎたのだ。
「逃すな、竜王坊が殺られたぞ」「若衆だ、山内から一歩も出すな」「打ち殺せ」「いや、殺すのは勿体ない」「捕まえて、慰さんでくれようわさ」「あっちだ、汝ら先廻りしろ」
酒を飲み出したばかりで、酔いはまだまわっていなかった。山法師たちは、あるいは、槍をかいこみ、あるいは腰に佩いた戒刀を抜き放って、追ってきた。

数人が松明をかざしてくる。星の光はあったが、林の中は暗い。

知っているといっても、山法師に比べたら精通ぶりが違う。山法師たちは、尾根や沢を平地のように走る。清次郎は僧正ヶ谷をやみくもに走った。

「待てい、どうせ逃げられぬぞ」

「諦めろ、観念せい」「お山を荒して、魔王の手から逃げられると思うてか」

口々に叫びながらの追跡だった。

鞍馬山の大魔王はいわゆる天狗の形相をしている。その通力は三千世界に及ぶとされ、鞍馬の天狗といえば、あらゆる力を持つと恐れられている。その恐れを伝え拡めるのも寺の権威を増すことになるわけだが、義経伝説が、鞍馬流の秘奥を得たとされるのもこの天狗への恐怖から出たものであろう。義経が東光坊で修業したのは事実らしいが、鞍馬流あるいは鞍馬八流などと称される剣法の極意を得た話などは、真偽が定かではない。判官びいきなどが附会し誇張したものであろう。

ともあれ、鞍馬の山の神秘さには、その深山幽谷のたたずまいと、山法師の荒修業が切り放せない。山の空気と日光にめぐまれ、山谷を跋渉するだけでも人間のからだは鍛えられる。乱世の寺は、寺を守る必然から、僧侶が、武器を携え、兵法を研修し、「法燈を絶やすまじ」として、団結する。僧兵化してゆくのはやむを得なかったろう。そこでとどまれば、目的の範囲で宗教も尊崇されるのだが、力を持てばそれを行使するのが、人間の愚かさだ。後白河法皇をして、「朕のままにならぬは、賀茂の流れと、叡山の僧兵」といわしめたのも、その結果である。

鞍馬の山法師も、またその例に洩れない。

ことに鬼一法眼流とか鞍馬流などと剣法を自称している者もいた。不確かな伝説もまた、かれらにとって、金箔となるために、力説し、さらに敷衍するというわけだ。

「来たな」

急傾斜を駈けおり、林をぬけて、ほっとしたときふいに目の前に三人の山法師が立っていた。先廻りした連中だった。

「その若さで、死にたいか」

言下に薙刀が胴斬りに来た。清次郎は反射的に飛び退いた。

「とう！」

槍の穂先が、体の崩れに延びる。よろめきながらではあったが、必死に横へ払った血刀が千段巻のすぐ下を、すぱっと切った。

清次郎自身でも、思いがけない効果だった。山法師はたたらを踏んだ。戒刀の柄に手をかける前に、清次郎は刀をひるがえして、肩先に一撃を加え、一跳して、三人目の男の顔を薙いでいた。

試合ではない。たった一人に、三十人近い敵である。それも、敵地だ。この危地を逃れるためには、殺すよりも、攻撃力を削ぐことであった。

斬りあううちに、それを理屈ではなしに、清次郎は感得した。

二人を倒されて、薙刀の男は逆上したように、

「その素ッ首、刎ねてくれようぞ」

びゅんびゅんふりまわしてくる。凄まじい刃風だ。偃月なりの刃である。清次郎はたたっと後退った。閃々たる刃をよけながら、素早く計算がはたらいた。

うしろは疎林である。清次郎は、さっと、杉の幹のわきへ、身を転じた。

ガッと、その幹が哭いた。偃月刀は、鋭く幹に切りこんでいた。山法師は、そのとき、何を見たろう。清次郎の首が、宙に飛ぶのを、一瞬まぼろしに見た。

そのまぼろしは、夜気に散った霧のような血にかき消された。その血が、おのれの肩からしぶいたものであることを、かれは知ったかどうか。

清次郎の一刀は、的確に、肩から胸まで袈裟がけに、斬り下していたのである。

しかし、三人を倒しても、息つくひまはなかった。背後から追ってくる松明は、数が増えた。喚声は全山をゆるがすように聞え、手に持った刀や薙刀が、松明の火を反射してぎらぎら光り、清次郎一人に殺到してくるのだ。

かれは絶望を感じた。

（ここから脱けられない）

棒立ちになったかれの顔をめがけて、何かとんできた。礫であった。反射的に顔を振る。耳を掠めるようにして、背後へ飛び去った。二打、三打、と礫は、別の方向から飛んできた。清次郎は、身を翻している。礫に追われるようにして、また斜面を駈けおりた。

が、暫くゆくと、崖っぷちに出た。下は真暗だった。どれくらいの深さかわからない。数十丈の切りたった断崖か、身の丈ほどのところか。月は山の陰に入っている。星あかりだけでは、崖下は見えない。

しかし、もう道を引きかえすことはできなかった。

（飛びおりるか）

運を天にまかせるしかない。

刀を口に咥えて、身をかがめたとき、松明の火の粉の、はぜる音が、間近に聞えた。

かれは、あわてて、灌木の茂みの中に身を潜めた。

「――そこは崖だぞ」「いたか？」「いないようだ」「崖から飛んだか？」「まさか、まっ暗だ。下も見えぬのに、飛びおりるなぞ、出来ぬことじゃ」「そうだの、では道を違えたか。戻ろう」

七、八人いたようだ。口々に喚いて、踵をかえした。

殿の二人は、しかし、未練たらしく、あたりを見まわしていた。

「わしは、こちらに来たと見たがの」

「その茂みのあたりに潜んでいるかもしれぬぞ」

ぎくりとして、清次郎は、刀をとりなおした。

松明が近づいた。刹那、かれは兎のように跳ねている。相手に驚愕の叫びもあげさせせぬ速さだった。

一人の鼻柱を割るように一直線に斬り下げるや、その刀を、小手返しに掬(すく)い斬りに、腹から胸へと走らしていた。

瞬時の二人斬りであった。その速さは、かれらが、まだ遠くへはいっていないなかまを呼ぶ声を洩らすこともできなかったのでもわかる。

倒れた二人がもがいているのを見おろして息をととのえた清次郎は、遠く近く闇を焦(こが)して燃え動く松明が夥(おびただ)しい数になっているのに気がついた。

その数は三十や四十ではない。

全山二百を号する僧坊から、動員されたにちがいなかった。その指令の早さと動員数を思うと、尋常の手段では、とても、山を脱けきれない。

これだけの殺戮をやったのだ。捕まって生き延びられるはずもない。

（腹を切るか……）

だが、まだ死にたくなかった。

（吉岡一門のためにも……）

いまや、名門を継ぐ者は自分しかいない。その重責がひしひしと感じられた。かれは、崖下をのぞいた。

（運だ……一か八かだ）

刀を咥えるのは危ない。血のりを山法師の衣で拭うと、鞘におさめて、両手に持ち、ぱっと、暗闇の空間に飛んでいる。

草が触れたのは、すぐである。日蔭の柔らかい土が、かれをうけとめてくれた。

（助かった……幸運だ）

天はまだ、自分を見放していない。その思いが、かれに気をとりなおさせた。およそ二丈くらいのものだったろうか。そこは山腹の棚になっていて、傾斜を少しおりると、流れの音が聞えた。川が近い。

川だとすれば、辿ってゆけば、山里へ出る。この山の川なら、いやでも洛中へ流れてゆく。

（鞍馬川か、貴船川か？）

鞍馬山は二つの川にはさまれている。北から南へ、山をはさんで流れる二川は、梶取の聚落(しゅうらく)のあたりで合流する。

月の位置から見て、貴船川に併される渓流のようであった。鞍馬寺の裏側へ出ることになる。清次郎は川へおりると、手足を洗い、顔を洗った。全身、返り血にまみれていたのだ。

それから一刻ほどのち、清次郎は、貴船神社で疲れたからだを横たえていた。夜の色がうすれかけている。夜明けまでに、里へ出なければ、危険であった。執拗な山法師は容易に断念するとも思われなかった。

「吉岡か」

ふいに声をかけられて、かれは刀に手をかけて振りかえった。一瞬、〃宮本武蔵か〃と思った。

違った。松明をかかげた小者数人を従えた侍だった。その顔に見おぼえがあった。源左衛門と武蔵の試合をとりしきった所司代役人の太田忠兵衛であった。

「作州牢人の宮本が山内へ逃げこんだと聞いて、寺へ来てみたのだが……妙なことになったのう。おぬしの相手とするは宮本ではなかったか」

「そうです。だが、冗々と言い訳はしませぬ、こうするしかなかった。それだけです」

「らしいな」忠兵衛は笑いを含んで頷いた。

「わしも、逢わなかったことにしよう。舟がある。乗ってゆけ」

「え!?」

「宮本は山中にはいない。大坂へ下ったという。追うて、試合を挑むがよかろう」

忠兵衛は、吉岡一門の惨落に同情を寄せていた。だが、清次郎の山法師斬りは、難しい問題になる。京から姿を消させるに如かず、と見たにちがいない。

「旅に出れば、名を変えたほうがよかろう。これはわしの餞別じゃ」

その言葉と謎めいた微笑の意味を悟ったのは、かなり経ってからである。速い流れに乗って、小舟は下ってゆく。濃い紺色に変った暁闇の空に、まだ名残惜しげな星が光っている。この川の果てに、どのような事態が待ち構えているのか。吉岡清次郎重賢の運命を乗せて、小舟は貴船川を下っていった。

よしきり剣法

一

伏見と大坂の間を上下する三十石舟の定期便は、江戸時代も後期に入って、人々の往来が頻繁になってから運行するようになったもので、中期まではなかった。

淀川の流れは急ではない。舟人にとっては楽な川だ。だがそれは下る場合で、遡るには、やはり櫓を用いねばならない。多数の旅客を乗せての遡行は難しい。

定期便となれば、時間の制限もある。幕末には朝夕二回で、遡行には、多勢の曳子が岸辺を引っ張った。すべて原始的な人力でやろうとするのだから、大変だ。

こうした人力労力を投資するには旅客の往来の見込みが立たねばできない。

慶長九年夏――

まだ徳川家康が幕府を江戸に開いたばかりで、世相は不安を残していた。表面上は乱世が治まったように見えるが、天下は、晴れた空の彼方に一抹の暗雲をにじませている。

豊臣秀吉が朝鮮国に無謀な戦をしかけて、その責任をとらないうちに老衰で死んでから六年

目。天下分け目の関ヶ原の戦いで石田三成が敗れてからまだ四年目である。

誰もこれで、修羅の世が終ったとは思っていない。

梅雨の半ばに、ふと晴天を迎えることがある。早い梅雨明けかと瞞されるのだが、そうした一時的な霽れ間にすぎないことを誰もが知っている。

ことに京大坂を中心にした畿内では、豊臣家に対する親しみの感情が残っている。

徳川家康は三河出身で、関西には馴染がうすい。大坂城には、まだ豊臣秀頼がいる。その母である淀君の隠然たる勢力と、恩顧に報いようとする大名たち。

いずれ、ふたたび東西の大合戦があるにちがいなかった。

こうした時代だけに、淀川を上下する舟はあっても、定期便などは出来ない。

第一、伏見や大坂の城下のような都市では町役人もいて、一応秩序が保たれているが、町から離れると、野盗が横行している。

関ヶ原の残党も、諸方に潜んでいる。

関ヶ原の戦は家康と石田三成の欲望の争いではあったが、三成の大義名分は故太閤との約定を裏切ったということにある。

その豊家が存在しているかぎりは、残党たちも望みを失わない。かれらが、野盗化するのも、その目的のために生きねばならないという自分勝手な理由からであった。

吉岡清次郎重賢が伏見から乗った舟は、三十石積みではない。せいぜい五人も乗れば満杯の

小舟である。

すでに客がいた。女人である。十七、八の娘と見えた。長い髪と大柄の派手な模様が、夏の日のもとで、あざやかだった。御所車に、秋の草花を配した模様である。

「大坂までお出ででしょうか」

女の方から声をかけられたのである。

清次郎は、まだ舟で下るかどうか、決めていたわけではなかった。路銀のこともあったし、宮本武蔵の行方を問い合わせる方が先だった。

舟のもやい綱を解こうとしている船頭に近寄ったのである。

船頭は二人いたが、年齢の様子から見て親子らしい。

かれが、しかし、口をひらかないうちに、娘がふり仰いで、声をかけたのだ。

「もし大坂へお出ででしたら、お乗りになりませぬか」

「うむ……」清次郎は一寸、思案したが、

「そうだな、そう願うか……」

文字通りの渡りに舟だった。

「しかし、舟賃は幾らだ」

娘は扇子を口にあてて、思わずこみあげた笑いを隠した。

「要りませぬ。わたくしが、借りましたゆえ」

二人か三人の乗合いで舟賃を折半するのが常識である。よほど金があるのであろう、と、思

った。
「運のええお方や」
と、老爺のほうが言った。
「一人で乗るのは勿体ないさかい、お客を待ったがよろしと奨めましたんや、ほたら一人のほうが気楽や言うて……」
「そうではありませぬ。変な人と乗り合わせたくなかったのです」
若いに似ず、はっきりとものを言う。
「こちらさまなら、余計な心配をしなくても……」
「そうかな」
清次郎は笑った。
「安心していいかな。わからぬぞ」
若いだけに、清次郎は、娘の言葉にひっかかるものを感じた。心配ないとは、男の獣性がないということか。これは甘く見られたことではないか。
「そうでしょうか」
娘は、こう言ったが冗談のように受けとったらしい。
「そうさ……私のからだから、血の臭いがしないか」
「——いいえ」
はじめて、娘の眼に不安の翳りが見えた。

「よく嗅いでみることだ」
舟はもう伏見をあとにして、淀川に出ようとしていた。
当時の川の流れは、後世とは大分違う。明治になって開鑿工事などで、人工的に流れを変えているので、現在からは、想像もつかないが、宇治川は、ずっと北方で淀川に合流していたのである。
「船頭、毎日、大坂へ下る客を乗せるのか？」
「へえ、毎日やなんて。下るのは早うてよろしが上るのが大変ですさかい」
「昨日か一昨日、変った男を乗せなかったか」
「変った？　どないふうに変ってまんね？」
「そうだな、まず、汚ない」
「……」
「蓬髪だ。小袖も垢じみているし、丈が高く、逞しい。腕など、大きな松の根瘤でも見るようだ……」
「名前は」
「宮本武蔵」
「——宮本武蔵？」
船頭はその名を復唱するようにして首をかしげた。
「聞きまへんな」

「そのような男、見なかったか」
「見まへんな」
すると、道を違（たが）えたのか。
舟に乗らず、街道を行ったのかもしれない。
しかし、大坂へ下（くだ）ったという確証はないのである。
いや、西へ向ったか、東へ向ったか、それすらわからないのだ。
ただ、京で名をあげた宮本武蔵は、その名声度をはかるためにも、大坂へ向ったのではないかと考えられた。
その次は江戸——と、考えるのが、常識的であろう。
天下に名をあげる。
といっても、情報の伝達が遅い当時である。上方のそういう事件が江戸へ伝わるのは遅い。
京の〝吉岡敗る〟の報さえ、大坂へどの程度、伝わっているか。未知数であった。
むろん、ただそれだけの可能性で、南下したのではない。
鞍馬山から逃してくれた所司代役人の太田忠兵衛が、「大坂へ下ったらしい」と教えてくれたのだ。
所司代役人だけにその情報網は、信用できるのではなかろうか。
（まあ、よい、大坂へ下れば、わかる……）
そう思った。

「——宮本武蔵を捜（さが）しているのですか」
娘が、ふいに言った。

二

九条の知己（しるべ）の家に一晩休み、髪も洗い、衣服もひそかに自宅から取寄せた。下帯からすっかり取り換えているので、血の臭（にお）いがするはずもないが、感覚の上では清次郎はまだ夥（おびただ）しい返り血を払拭（ふっしょく）していない気持だった。
清次郎は娘の顔をまじまじと見た。
「知っているのか、そなた」
「いいえ」と、涼しく微笑して、「わたくしは知りませぬ」
「すると……」
「父が」
そう言いさして、ふっと語尾を口の中で消した。
言ってはならないことに気がついたというふうであった。
「——そなたの父御（ててご）というと？」
「いいえ、由（よし）ないことを申してしまいました。名前など、無いにひとしい者でございます。お忘れ下さいまし」
「待ってくれ、忘れろといっても、忘れることはできぬ。私は、宮本を捜している。是非とも、

その行方を突き止めねばならぬのだ」
「……」
「行方を知っているならば」
「いいえ、存じませぬ」
「嘘、ではあるまいな」
「わたくし、何も存じませぬ。ただ、噂を聞いたものですから」
「噂？　吉岡一門の敗北の話か」
「……」
「そうであろう。京では、女童まで面白そうに話しているからな」
清次郎は下唇を嚙んだ。無念の思いがこみあげた。
「その吉岡の清次郎重賢と申す者だ」
「あなたさまが!?」
娘は、眼をあげた。その驚きの表情が、清次郎には妖しい美しさに見えた。
娘の驚きは、清次郎の若さにあったろう。意外の感に打たれたらしい。なぜなら、敗北した三人は、いずれも壮年で、吉岡を背負って立っていた者たちである。
前髪の清次郎は、女に見まほしい美貌であるし、若すぎる。
とても、兵法者とは見えない。況や、三人の従兄たちの仇を討つにしては——誰の目にも、ふさわしくなかった。

宮本武蔵の風貌は、清次郎の説明からくる存在感の数倍の逞しさ、怪異さで喧伝されていた。ものごとはすべてそうだが、噂は誇張され、尾鰭がついて、まるで伝説にある天狗か何かのように噂されている。
その〝宮本某〟を討つというには、清次郎重賢の優さ男ぶりは、あまりにもふさわしくなかったのである。
その娘の眼の色を、清次郎はすばやく読んだ。
「おかしいか」
「え？……」
「宮本を追うのがおかしいか」
「い、いいえ」
「宮本は、おれが斬る」
清次郎は言いきった。
かれはいつまでも少年に見られるのがいやだった。十六歳といえば、すでに大人の域に足を踏み入れている。同じ十六歳でも、長兄と末弟では世間の見る眼が違ってくるのだ。清次郎には、それが残念だった。
（やはり前髪は落さねば……）
昨夜、そう思ったのだ。思っただけで、落すのをためらった。その悔いが胸に苦くこみあげてきた。

淀をすぎ、三島江のあたりまで来たときである。

「あの、船頭さん、ちょっと……」

娘が言った。

「へ？」

「あの……舟を岸へつけて下さいな」

それだけで、船頭は、察しがついたようである。客の、殊に若い女の場合はそのことを口に出せないから、察してやらねばならない。舟は冷えるし、伏見を出てからの時間で、大体、察しがつく。

「あれでっか」

「……」

「わかってま、わかってま、いま着けますよってに」

舳(へさき)の船頭は伜に顎をしゃくって、棹(さお)をとった。伜のほうが櫓を握っていた。

葦の生えている岸の方に、ぐーっと舳がまがった。

ばたばたと水鳥が飛び立った。葦をさいて舟が岸へ寄ると、船頭は注意深く、棹で水底をさぐっている。あまり深く砂地に食いこんでは、用が済んで離れるときに時間がかかる。

舟底が砂地に食いこんだ。

船頭は六尺の舟板をくり出すようにして、ふなばたから、土手下へ渡した。

土手といっても、僅かな土盛りである。大規模な築堤ではない。界隈の者が、山土を削って

きて築(つ)き立てたのであろう。

「さあ、上っとくなはれ」

踏み板である。娘は荷物は置いたまま、身一つで渡っていった。

そのうしろ姿を見送ると、清次郎は欲望がきざすのをおぼえた。

応急の踏み板を、危なげに渡ってゆく娘の細腰の揺れが、若者を刺戟せずにはいなかったのだ。

（白昼から……何ということだ）

清次郎はそんなおのれを、忌(いま)わしく感じた。若いからだは、欲望がはげしい。娘が葦の中にしゃがんで裾をまくることを考えただけで、口中に何かがあふれるような、衝撃を感じるのだ。

かれは上気した顔を対岸の方にそらした。

娘の悲鳴が聞えたのは、船頭が瓢(ひさご)の酒を二盃(はい)と呑み終えないうちである。

悲鳴は、二度、三度と、つんざくように奔った。

「なんだ!?」

清次郎はぱっと膝を起した。大刀をつかむや踏み板を一足飛びに葦の中に駈けこんでいる。

娘が立ち上った。その周囲に、男の顔が浮び上った。一目で野伏(のぶせ)りたちとわかった。

「助けて！」

娘は、悲鳴をあげて逃げてくる。少しでも遠くへと思って、舟から離れすぎたのだ。

「うぬ！　草賊が」

清次郎は走りながら抜刀した。

まるっきり、そんな連中がいることに気がつかなかった。白昼なのである。見通しもいい。どこから湧いたのか。葦の中に土竜(もぐら)のように潜んでいたのか。

だが、娘がここで上陸したのは、単なる生理現象にすぎない。

それとも、淀川下りの舟客は、時間的にもこのあたりで、小用を催すという確率をアテにしてのことであろうか。

ともかくその出現は、突然であった。無精髭と蓬髪の野盗たち。娘をとらえて、どうしようというのか。

清次郎の姿を見るや、野盗たちも抜刀した。

五人。

「ちえっ、女を逃してしもうたぞ」

「その代りに若衆か」

「ははは、あんな青いやつが、われらにかなうつもりか」

「ひねってやれ」

「若衆をひねったあとで、あの女だ」

野盗たちの白刃は、清次郎に反射的に闘志を湧きたたせた。

相手は野盗である。危険を払うのに、理屈はいらない。

清次郎は突進した。その顔面に何か飛んできた。キラッキラッと陽光を反射(かえ)して、手裡剣が

襲ってきたのだ。清次郎は無意識にそれをはねかえし、打ちかえした。キーンとするどい音で手裡剣ははね飛び、宙に踊った。

「来い！」

先頭の男を一颯に斬り下げるや、血の尾を飛ばして左側の髭面を裂いた。

相手は若者と舐めてかかっただけ、隙だらけだったのだ。三人目の胸を貫いたとき、あとの二人は、蒼くなって浮足だっていた。

「逃げろ」

一人が刀を引いた。

ぱっと背をむけて走りだした。

「やらぬ」

背後から斬り下げた。もう一人の男は、横っ飛びに走りだそうとして、躓(つまず)いて転んでいる。

身を起そうとしたところを据物斬りに血刀が落ちた。頭頂から噴血三尺——肩で息をついて立ち上った清次郎の顔から胸にかけて、真っ赤だった。

三

大坂までと言ったが、娘が舟をおりたのは守口の少してまえの下島というところだった。

当時、このあたりは、葦原で、水田が多く、農家がちらほら見えるだけの鄙(ひな)びたところだった。

娘は、梢と名乗った。

「その御姿では、大坂へまいるのも憚りがございましょう、ぜひ……」

血を落すだけでも、と、下島の家へ誘ったのだった。

返り血がすさまじい。返り血を浴びるということは、あまり名誉なことではない。達人ならば、斬ると同時に身を翻す。血で汚れることはない。

たしかに、その意味では清次郎は幼かった。

梢が案内した家は、葦の生い茂る中洲にぽつんと立っている。家というより、小屋といった方がいい、粗末なものだった。

老人が一人、囲炉裡の傍につくねんと坐っていた。

胡麻塩の長髯を蓄えた五十代半ばと見える。

当時、この歳ごろは老人と呼ばれている。肩幅の広い、がっしりしたからだつきであったが、立ち上ると、片足を曳いて、かなり不自由に見えた。

清次郎が名乗ったとき、老人はびくりと長い眉をあげて、

「吉岡？……」

と、聞きかえすように、呟いた。

「京の吉岡……京八流」

その呟きは、いささか清次郎の誇りを満足させるものだった。

「御存知でしょうか」

「——聞き及んでいる」

老人は言葉少なくはあったが、かえってそれだけに、武辺の篤実なところが見えた。

梢の危難を救ってくれたことに、一言、

「忝ない」

と、礼を言っただけである。

くどくどと言わないところも好ましかった。清次郎の若さは、おのれの行為に過大な評価を与えていない。

もしも、梢でなかったら、あのように闘ったかどうかわからない。梢の若さと美しさが、かれを駈りたてたのは否めないのである。

貧しい家である。着替えとてあるようにも見えない。草葺きの屋根と荒壁が雨露をわずかに凌ぐばかりで、入口の戸も、葦の茎を編んだものだ。破れ壁の一隅に夜具がたたみ重ねられ、家具らしいものはつづらが一つあるだけだ。衣桁もない。老人は武士らしく見えるが、差料だけで、槍も鎧櫃も見えない。

この小屋の貧しさから思うと、梢の身なりは、上等すぎる。しかるべき家の娘に見えるのが不思議だった。伏見からの舟賃も余分に払っているのだ。

「貧しい乞食小屋で」と、老人も自嘲して言った。「何のおもてなしも出来ぬ。申し訳ない」

そう言ったが、それほど申し訳なさそうな表情ではない。たしかに乞食小屋にひとしいたたずまいにちがいないのだが、老人には、卑屈さがなかった。

むしろ、昂然としている。武辺の誇りが、粗衣に包まれたからだにも、動作にも見えた。

一心斎、とだけ名乗った。

苗字は口にしない。口にしないものを聞くわけにはいかない。武辺の礼儀とは、対する者の意志を尊重することである。

貧しいながら、酒だけはあった。もっとも濁酒である。老人は清次郎の碗へ充たしてくれた。

一心斎という名から、清次郎は、一つの名を思いだした。この下島の場所にも関連がある。

「父から、かねがね聞いていたのですが、近くの守口の里に、むかし一角と名乗る兵法者がいた由、御記憶でございますか」

「……」

「守口一角、と名乗って……絶妙の剣を使うとか聞きました。父の話では、塚原卜伝の流れを汲む某の剛の剣に対し柔の剣を用いて勝ち、世上、称して、よしきりの剣、とか」

「存じておる」

一心斎は頷いた。

「よしきりの剣……ふふふ」

はじめて、笑い声を洩らしている。

「一角は死んだ」

「はい、そのように聞きました。関ヶ原の戦で石田どのの手にて討死したとか」

清次郎は兵法の話になると、頬が紅潮し眼がきらきら光ってくる。梢の女体に恋情はするが、

少年の純粋さもまだ残している。

よしきりの秘剣。

優しげなその名は、本人が称したのではない。世間で、勝手にそう名づけた。

京流を世間では、舞いの剣とも称う。卜伝が足利十三代将軍義輝に〝一ノ太刀〟〝一つ太刀〟の秘剣を伝授したのは有名な話であるが、以来、卜伝の剣法が、ことごとに京流と対立された。

卜伝を剛の剣とするなら、たしかに京流は柔の剣である。

当時、上り剣法下り音曲と称われたように、剣法は関東に発生し、京を目ざす。多くの兵法者が、京に上ってきた。

京は数百年の王城の地であり、この国の中心である。京で名をあげることは、六十余州に知れわたることだ。

その兵法にくらべて、音曲は上方に発生するものが多かった。やはり京の公卿の生活と習慣が、管弦の技を高め、それにつれて音曲を生み出すもとになったのだろう。

柔の剣とは抽象的な表現だが、関東の荒い風土が生んだ剛の剣に対比するに適切であった。

父がよしきりの秘剣と守口一角の名を親しみをこめて話したのは、上り兵法に対しての地域的連帯感のようなものがあったのかもしれない。

守口一角の名は関ケ原の豪雨と宵闇の中に消え去っている。以来四年の歳月が経っていた。

清次郎にその名を思いださせたのは前記の理由のほかに、小屋の周辺を埋めた葦の群れであ

った。
　梢が清次郎のもとへ忍んで来たのは、その夜のことである。
　狭い小屋の中だった。健康なからだは、横になると、すぐに眠りに就いた。奨められるままに飲んだ濁酒(どぶろく)もよく利いた。
「——起きて」
　耳もとで囁かれて眼が醒めたのである。梢の顔が仄(ほの)暗いなかにあった。
　外は月明だった。明りとりの小窓から洩れた月の光が蓬屋(ほうおく)にさしこんでいた。梢は父の方を気づかっている。さし迫った女の顔は異様な美しさであった。
　まだ半ば夢を見ているような気持で、清次郎は身を起している。
　梢は身軽く、戸口へ行く。外へ出るのだ。
　どこへ行くのか？　声を出せば、一心斎が眼を醒ます。清次郎は夢心地のまま、足音を忍ばせて外へ出た。
　皓々(こうこう)たる月は十八夜月か。山の稜線を夢のように浮かせている。一面、夏草の生い茂った原であった。梢は走ってゆく。ときどき、清次郎を振りかえり、招き、それからまた走るのだ。
　黒髪が風になびき、女の裾が大きくまくれあがる。うすものを夜着(よぎ)にまとった梢の姿は、充足した若者に、けものめいた欲情をそそらずにはいなかった。
　清次郎は裸である、返り血を浴びた着衣は、梢が洗ってくれたのだ。下帯一すじで寝ていたのだ。

　茫々の草むらを走る梢に、清次郎は追いついた。
「梢、そなた」
　二人のからだが絡んで倒れた。
「梢……」
　何も言わせず、女の唇が男の唇をふさいだ。草が二人のからだの下で音を立てた。清次郎の下腹部を熱くしていきり立ったおとこのいのちは、焦って女の肌を突きたてた。
　舌をからめたまま、梢は声を洩らし下肢をひろげた。すでに帯は弛み夜着の裾前はひらいていたのだ。二つのからだが一つになったとき、梢は圧(おさ)えようもない、悲鳴に似た叫びをあげた。
　清次郎の容貌やその若さから想像していたものが、意外な逞しさだったのだ。熱く怒張したいのちの塊は、梢の中芯を貫いた。
　清次郎が放つのは早かった。若さは、我武者羅である。梢の柔肌(やわはだ)は思いもうけぬ快楽を与えてくれた。しかし、もしも、こうしたことがなかったら、あるいは、夢寐(むび)にかれは洩らしていたかもしれない。夢を見ることは、五臓六腑の疲れというが、彼女に呼び醒まされたとき、清次郎は梢のことを夢に見ていた。
　梢がはじめて声をかけたとき、そして、葦の中に身を埋めたとき、その裾をまくる姿を想像して生唾を嚥(の)みこんだことだ。熟睡の中で、彼女のことを夢に見たというのは、それだけ想っていたのであろう。明るい水面に反射した陽(ひ)のかげが、彼女の顔に揺れていた。白い面(おもて)を彩る水のゆらめきに、胸が詰るほど若者は惹かれたのだ。兵法の意地に生きようとする清次郎には

あまりにも眩(まぶ)しい光景だった。

おちてのち――

なおも、梢は、清次郎の頸すじに手をまわしたままだった。

「清次郎さま……もっと」

と、あえいだ。

「ねえ……」

月明は彼女の顔をありありと照らしだしている。

蒼白く光るような顔は、清次郎に観音菩薩を思わせた。かれは女の腕をほどき、顔を離す。すっかりはだかった襟のかげに、双(ふた)つの隆起がみごとだった。清次郎は乳房の谷間に顔をこすりつけ、そして乳首を含んだ。

汗ばんだ肌の匂いとまるで甘味を洩らすような乳首の感触が、かれにさらなる欲情を喚起した。

ふたたび、その怒張したものは、柔襞(やわひだ)の奥へ侵入していた。清次郎の荒いあえぎにあわせて、梢も誰憚るところない草の中で歓(かん)を貪(むさぼ)った。

二人の上には夏の空が大きくひろがっているだけの淀川の畔りであった。

四

梢は一体、どういう女なのか。娘といっても、彼女は一心斎の生活とはあまりにかけ離れて

いるようであった。

「伏見に住んでいるの……ときどき、父を見にくるのです」

余炎をもてあまして、何度も口を吸いあいながら、梢は、気のむくままに、話した。

伏見の城に出入りの絵師某の屋敷に住んでいるという。その絵師は単に一心斎の昔の知人だというだけでそれ以上、詳しいことは話そうとしなかった。

翌朝、清次郎が眼ざめたのは、かなり陽が高くなってからであった。

草の中にかれはひとりで寝ていた。梢はいつの間にか小屋に戻ったらしい。

清次郎は出立しようと思った。だが、梢は洗ったはずの着物を出そうとせず、

「もう一日泊っていって」と、囁いた。

その眼は、前夜の歓喜を甦らせようとしている。清次郎は迷った。もう一度、彼女を抱けば、そのまま、発(た)てなくなるような気がした。

「おねがい、もう一度だけ」

必死のその眼には、清次郎も克(か)てなかった。

だが、その夜が、次の夜につづくことは明らかだった。清次郎はおのれを制馭(せいぎょ)できなくなることを恐れた。恐れながら、しかし、梢のからだの魅力に惹きずられた。

その次の日、梢は着物のほころびも縫い、きちんとたたんで差し出した。

「出発は、明日ね……」

かれがもはやそれを振り切ることは出来ないと多寡(たか)をくくっているようだった。

その夜、清次郎は支度をすると、小屋を出た。幸い、何か用事があるとかで、一心斎は夕方出たまま帰って来ていない。
　梢はあの場所で待っているはずだった。
　清次郎は守口に向った。が、さすがに、そのまま、姿を消すのは、ためらわれた。
「やはり、このまま去るのは、卑怯だ。一言、別れを告げていこう」
　思い直して、あの場所へ向った。
　二夜にわたって、歓を尽くした場所である。今夜も月は出ている。川の畔りの原は月の光を浴びて丈なす草を静かに揺らめかしている。それはゆるやかに波を打って、かれは、まるで波の中で弄(もてあそ)ばれているような気がした。
　途中で、かれの歩調はにぶくなった。
　また彼女に抱きつかれたら、どうしよう、と思った。あの柔らかい甘肌には抗し難い。女の肌が、あれほど柔らかく、甘やかで、蠱惑(こわく)的だとは知らなかった。一度毎に、女体の神秘さに目ざめさせられるようだった。そのまま、踵(きびす)をかえせばいい。それは、逃げることになる。が、このまま、梢との交情をつづけていれば、ずるずると堕落するばかりだった。
（おれには……吉岡一門の名誉がかかっているのだ、京流のために、京流の名誉のために……）
　宮本武蔵なる牢人者を仆さねばならない。その大いなる目的を控えて、こんなところで女の肌に溺れているわけにはいかないのだ。

　清次郎は、足をとめた。引き返そうと思った。そのとき、どこかで、女の声がしたように思った。それは、風の音のようでもあり、口笛のようでもあった。
（梢だ……）
　清次郎はその声のほうへ踏みだした。草原の中に人影が見えた。梢でないことは、数間の近くにいったときわかった。
「………」清次郎はその人影が、誰であるかに気がつくと、棒立ちになった。
「――やはり、来たか」
　嗄(しゃが)れた声であった。一心斎であった。
「懸念した通りであったな、吉岡」
　一心斎は両刀を帯していた。両手をだらりと下げてはいるが、すでにその虚とも見える構えは、一瞬に、攻撃に転じることを物語っていた。
「そちは、梢を……慰めものにしたな」
「いや、違う、それは」清次郎は狼狽した。弁解しようとして、すぐに、その愚に気がついた。いまさら、一心斎に何を言っても、無駄であろう。
「おてまえの知らぬことだ、梢どのと、私の間のことではないか」
「黙れ！　落ちぶれたりと雖(いえど)も、この一……一心斎は娘のふしだらを許しておけぬのじゃ」
「梢どのは、どこだ」
「そこにおる」

一心斎のさす指先を辿るように、二、三歩進んだ清次郎は、草むらに突っ伏した女を見た。
梢にちがいなかった。
「し、死んだか……」
「この手で」
一心斎の両手が、そのとき、鬼の指のように見えた。
「しめ殺した……」
「うぬ！」
怒りが胸をつきあげた。清次郎が抜刀するのと同時に、一心斎の腰間から滑り出た白刃は草を薙いで、かれの腰車を割るように流れていた。
殆ど、反射的に清次郎は跳んでいる。白刃は足下一寸のところを流れた。
が、清次郎の足が草を踏むと同時に、ふたたび、白刃は逆手斬りに来た。しゅっしゅっと、草が切れ、白刃はさながら、水のように、流れ、丈なす草がはらりと薙ぎ払われる。
剛の剣には立ち向う術はあれ、この白刃の流れは、それが白刃と見えぬあざやかさだけに、清次郎は退ってゆくばかりであった。
草原から、葦の中へ——
葦が哭いた。
「よしきり」

清次郎は愕然として叫んだ。
「見た、よしきりの秘剣」
水を撒くような白刃の流れが、一瞬止った。
同時に、清次郎の剣は真っ向額に落ちていた。さすがにこれは逃れている。一心斎に立ち直りも与えず、清次郎は斬りこんだ。
意外だったのは、一心斎の剣は、かれの剣を受けず、呼気の間隙に手元におどりこもうとしてくるのだった。
卜伝流一ノ太刀、一つ太刀は、敵の剣あらば剣とともに、骨まで断つ凄絶の太刀である。一ノ太刀とは初太刀に於て勝つことを示唆している。二ノ太刀あるを知らず、一ノ太刀を以てするとき、勝負は決る。それは勝か敗か、のどちらかである。この一撃にすべてを賭け、充実した精気とともに、肉を斬り骨を断つ。これに勝つ剣は当時、関東以北にはなかった。剛を以て来るに剛で応えれば、卓抜した卜伝の秘剣に勝るものはない。柔は剛の虚を誘い、虚に入る。一つ太刀に空を打たせたとき、柔の剣は、肉を裂いている。
清次郎をして舌を巻かせたのは、その軽やかさである。
「一角か」
疑惑をかれは口にした。
「守口一角！」
殆ど、かれは確信を持った。

一心斎と名乗って、この下島の蓬屋に隠棲しているのは、関ヶ原から逃れて来て、人目を避けていたのであろう。

あまりにも鮮やかなよしきりの秘剣は、はしなくも一心斎が偽名であることを自ら暴露することになったのである。

その水の如き白刃の動きの間に、清次郎は正確に読んでいた。いかなる剣法にも、隙はある。かれは読んだ。〃葦切り〃は根元から二尺のところを走る。

清次郎の剣は二尺二寸五分である。かれは虚の敗に転じた。ふたたび、かれをして追わせた。一歩一歩、葦を薙ぎ、かれの膝上を薙いでくる刃の早さ、軽やかさ。それは、もはや水とも電光ともつかぬ、文字通りの殺風であった。

がっと、その刃が哭いた。風の笛のような葦の悲鳴ではなかった。飛び退りながら投げた清次郎の刀は、葦の代りに、すっくと前面に突き刺さって立った。葦切りの剣は、あまりにも早い流れのゆえに、葦の間に突っ立った刃を避けあえず、がっと噛み合ったのだ。

刹那、清次郎のからだは、宙に跳ねていた。宙で鞘走った脇差は、前額部から鼻筋を割り、唇を四つに割り、さながら紅絹の糸を一筋、垂らしたごとくに、斬り下げていたのである。

一角の双眸は、まだ信じられないもののごとくに見開かれたまま——葦の中に崩れた。けなげに右手は、刀を握ったまま、ぴくぴくっと、四肢を顫わせていた。

「——関ヶ原……ふたたび……」

四つに割られた唇は、どくどくと血を噴きながら、かすかに、そう呟いていた。

「関ヶ原？　ふたたび……ふたたびの出陣を望んでいたのか」

その時期を待っての隠棲だったのであろうか。呆然と清次郎は血刀を下げたまま佇んでいた。

冷たく光る月は今夜も頭上にあった。満々と水を湛えた淀川の畔りである。まるで夢の中の情景のように蒼い光に濡れた葦の中の争闘が終り、奇妙な静寂にかえった中に、するどく、よしきりが鳴いた。

決闘死人橋

一

吉岡清次郎がその奇妙な男を見たのは、大坂の阿波座に近い浮世小路だった。

小さな飯屋である。男は酒を食べていた。清酒ではない。濁酒は食べるのである。大きな碗に並々と湛えられている濁酒を一口すっては、口の中で美味そうに味わってごくりと嚥み下す。

それがいかにも天下の珍味かのような表情だった。空腹なら何でも美味いにちがいないが、その男、別段身なりは悪くはない。

無精髭はしかたがないとしても、小肥りのからだに近ごろ流行の派手小袖を着、うるみ朱の長い刀を抱くようにして、酒樽に腰をかけている。

濁酒を食べているだけではない。肴がある。浅蜊の剝身だった。小皿に剝身の煮つけが盛ってある。

それを爪楊子で突き刺しては口に入れる。口の中で剝身と酒が混るのを楽しんでいる。

爪楊子を口の端に咥えたまま、もぐもぐやっているのは、品がよくない。清次郎は名門吉岡家に育って箸の上げ下しに、しつけを厳しくされた。京育ちの教育がある。放浪の月日は、牢人姿を埃にまぶしては来ていたが、十七という若さがまだ品の良さを残している。

その育ちの良さが、下品な男の些事に気づかせたのかもしれない。

男は時々、咥えた楊子をつまんでぱっと捨てる。

それはきわめて自然で、何でもない動作のようだった。

清次郎がぎくりとしたのは、かれの傍に、その楊子が飛んできたときだった。

楊子は後世いうところの黒もじで、黄楊の片皮を残して削ったもので二寸ほどある。現今のように楊子が短くなったのは、近世になってからである。当時は〝歯せせり〟とも称った。

その二寸ほどの楊子が、ぱっと飛んできた。

楊子は、驚いたことに、蠅を刺していた。

初夏のことで、蠅がうるさい。ぶんぶん店内を飛びまわっている。縄のれんの外の通りには馬糞牛糞が湯気を立てているし、蠅には内も外も変りがない。

その蠅が、ぽとりと落ちた。蠅の羽を楊子が貫いていたのだ。

（——なんと！　あざやかな……）

清次郎は、おのれの眼を疑った。

京流の名門に生れて、兵法修業の者は多く見ている。槍術、弓馬の術、それぞれに達人の話も見聞している。信じられないほど、巧妙な者もいる。たとえば、額に米粒をつけさせて、皮

膺に鵜ノ毛で引いたほどの傷も与えずに、抜打ちにこれを両断する。

だが、飛びまわっている蝿を、二寸の楊子で、それも羽を縫いつけるとは聞いたことがない。

清次郎のその驚愕を、しかし、男は気がつかぬもののように、平気で、酒を食べている。

また新しい楊子を卓上の竹の楊子さしから、つまみあげて、浅蜊の剝身をひょいと刺して口へ運ぶ。

その手つきには、変ったところは何もない。が一瞬の気は兵法の奥儀を極めたものでなければ、出来ないものだ。

「卒爾ながら……」

清次郎は、感動を圧えきれずに立ち上って言った。

「みごとなお腕前、感服いたしました」

「ん？……」

何が？　という顔で、男はふりむいた。

「ただいまの蝿の一打ちでござる。てまえも兵法修業の者、並々ならぬ腕前と拝見しました。御尊名を伺いたい」

「名かね」

もの憂(う)げに男は、冷たい笑いに唇を歪めた。

「名など、ない」

「………」

「強(し)いて申せば、他人が、わしを呼ぶ名があるが」

「その名でも」

「ホトケ」

「え？」

「ホトケや。仏(ほとけ)の弥五郎と呼ばれている」

そのことに、弥五郎自身、自嘲しているようだった。

「なぜにホトケと呼ばれているか、わかるかね」

弥五郎は手をのばすと、蝿を刺した楊子をひょいと引き抜いた。蝿は死んだように凝(じ)っとしていたが、急に、ぱたぱたと羽を動かし、ぱっと飛び立った。

「生き還った……」

「ははは、生き還ったのやない、もともと羽だけ縫うたのや」

ホトケと称われるのは、蝿も殺さずに羽だけを刺すかららしい。

しかし、仏心があるのではなかった。清次郎は、その直後に、弥五郎の残忍なまでの行為を目撃している。

浮世小路は、遊女屋が軒を並べている。遊廓というほど整ったものではない。現代にあてはめれば青線地帯か白線地帯に相当しよう。

いつとはなしに、男の袖を引く女たちが集まり、その女たちに寄生する男や、それを支配す

る者があらわれて、組織化される。

女と酒との快楽が、自制心を失わせるのか、毎夜のように、喧嘩がある。当時——慶長十年初夏。二年前に征夷大将軍になった家康はこの四月に伜の秀忠に将軍職を譲って、大御所として、徳川権力の基礎固めに腐心している。

その目的が豊家の滅亡にあることは、識者の見るところだ。むろん表面は糊塗しているが、真意は具眼の士にはわかる。また世間の腕におぼえのある武士には、風雲の来るのを待つ風潮があるのも事実だった。戦は出世栄達の好機なのだ。

そうした重苦しい風が、大坂の街にも流れている。殊に天下分け目といわれた、関ヶ原の戦の残党たちが、髀肉(ひにく)の嘆をかこって眼をぎらつかせながら、彷徨しているのも否めない。

いかがわしい女と酒の浮世小路で殺傷沙汰があるのはしかたがない。

お城の足軽たちが隊を組んで治安に当たっているが、それくらいでは、静寂は齎(もたら)されない。その足軽そのものが、質の悪い連中が多いのだ。

遊女屋に悪の組織がはびこるのは、為政者の治安の手があてにならないからだった。

その愚かな犠牲者は、牢人風であった。

片肌脱ぎになり、抜刀をふりまわして暴れていた。顔もからだも、真っ赧(か)に上気して、乱酔の様子がわかった。

「どいつもこいつも、ぶった斬ってやる。ぶった斬ってやる」

顔中、口にしながら、そこら中に——家の軒や柱に切りつけたり、堀端の柳の木の枝を切ったり、狂ったように暴れまわっているのだ。

何が気にくわないのか。女に振られたのか、無銭がばれて突き出されたか。どちらにしても大したことではないのだろう。

こういう男は、刀を取り上げて水でもぶっかけてやれば、翌朝は、しゃんとなってしまうものだが、暴れているときは、たしかに手がつけられない。

「弥五郎はん、弥五郎はん」

若い男が飛びこんできて、暴れ者を取圧(とりおさ)えとくなはれ、酔いどれの狂気犬が牙むいて、だれかれなしに咬みつきよるねん、と、訴えた。

あとから考えると、仏の弥五郎が腰をあげるのが早かった。

まるで待っていたように、酒樽から立ち上った。縄のれんを肩で分けて外へ出た。

その手に楊子が握られていたのを、清次郎は知らない。

弥五郎の姿を見ると酔いどれ武士は眼を攣りあげて、風車のように刀をふりまわして斬りかかった。

その風車をどう避けたのか、二本の楊子は次の瞬間、血走った眼を潰していた。

弥五郎のうしろから、つづいて出た清次郎ははっきりと見た。二本の爪楊子は、殆ど同時に血走った眼に突っ立っていた。瞬間につむったのであろう。閉じた瞼の上にぐさりと二本の楊子が突き刺さっていた。

一瞬にして、真っ暗闇となったのに驚愕しながらも、その男は片手で刀をふりあげた。

弥五郎はにやりと笑った。眼をつぶしただけでも、すでに相手の戦力を奪ったはずなのに、あの長い刀を抜き打ったのだ。

真っ向額――文字通り唐竹割りだった。

宵闇の中に頭頂から噴きあげた血は、遠巻きの群集の眼にも、赤いしぶきのようにすら見えた。

二

（恐るべき手裡剣打ちだ）

飛んでいる蠅の羽を縫い刺すなど、尋常のワザとも思えない。かれは片手に持った楊子をつづけて打ち、両眼を殆ど同時につぶしている。

（あの楊子が、おれに飛んできたら……）

とても躱しきれまい。

世の中には恐ろしい奴がいる、と思った。

その夜、清次郎が泊ったのは、浮世小路の〈亀八〉という家だった。

漫然とそこへ登楼ったのではない。遊女のおきたというのに、わざと袖を引かれたのだった。

〝おきた〟

その名前を清次郎が聞いたのは、大坂へ宮本武蔵の足跡を追って来てからだった。

この一年、清次郎は山城、大和路を捜し歩いた。いつも一歩違いで、宮本を逸している。もはや宮本武蔵を打ち負かすことによってしか、京流の名声を盛り返せない。その悲命は清次郎の双肩にかかっていた。

宮本武蔵なる兵法者が、亀八のおきたのところに泊った、という話を聞いて、清次郎はやってきたのだ。

おきたは色の白い、ぽってりしたからだでうけ唇の痴呆的な顔をしていた。

（武蔵はこんな女を好きなのか）

清次郎は軽蔑した。

かれも一年前の少年ではない。すでに女も何人か知っている。女色にのめりこまなかったのは、目的があったからである。

「ねえ、お前さま、大坂ははじめてかえ」

「いや、二度目だ」

「この小路で遊ぶのは、はじめてだろ」

「うむ」

「あたしも、大坂の生れじゃない。流れてきたのさ、お前さまも？」

「うむ」

「土地の人は嫌いだよ。ねえ、旅の御方が好き、若い人は特に好きなのさ、今夜は楽しませてあげるよ」

おきたは、するすると帯を解いた。肥り肉のからだは、たしかに抱き心地がいいにちがいな

い。が、清次郎には、大きすぎる気がした。
巨漢の宮本武蔵には丁度よかったのだろう。
「さあ、抱いておくれな」
うすものになって、おきたは誘った。
灯を消すと、漸く、清次郎は、そんなおきたのからだに入ってゆけた。
「好きだよ、若い人が、あ、もっと、強く、もっとしっかり、あ、あ……お前さま、好き、好き」
「……」
「お前……名前は、名前は、名前を教えておくれな」
女は昴ぶりに、うつつの声になっている。はげしく動くたびに、豊かな乳房がぶるぶる動いた。
「おれか、宮本」
「え？」
「宮本武蔵（たけぞう）……」
「あ……嘘！」
「なぜだ」
「だって、宮本武蔵さまは、先日、お出でになったもの」
「ははは、おれは、弟だ」

「まあ」
「宮本……清次郎だ」
その間も、からだはつながっているのである。清次郎の若さは、おきたの肌を抱きしめ、快楽の坂をのぼりながら、質問の矢を放つほど冷静だった。
「まあ、ほんとうに弟御」
「そうだ、兄の行方を捜している」
「……」
「どこへ向ったか、知らぬか？」
「ええ……またくるって」
「ここへ、か？」
「ええ……あ、いや、離れちゃ、いや」
おきたは、髪をふりみだして清次郎にしがみついてきた。
その日から、清次郎は、この〈亀八〉に流連（いつづけ）することになった。
遊治郎（ゆうやろう）になって、女郎屋に流連するのは、宮本武蔵がふたたび来るのを待つためだった。
「あんな女好きはいないよ。何しろ、一ト晩に三度も四度もだからねえ、たいてい二度だろう、そりゃア、あたしのからだは、誰でも好きになるけどさあ」
どうせ人は好き好き（すきずき）だろうし、たしかに餅肌といっていいかもしれない。が、清次郎には、

どうにものめりこめる相手ではなかった。
だがこういう家の習わしで、まさかほかの女に乗り換えるわけにはいかない。ここで武蔵の来るのを待つなら、いやでもおきたを抱かねばならない。
だが、その武蔵が来ないうちに、事件が起ったのである。
三日目だった。
清次郎たちの寝ているところに、突然、踏みこんで来た男たちがいた。
清次郎は、おきたと同じく全裸だった。おきたが執こくしがみついて、呻き声をあげているときに、かれらは入ってきた。
(誰か、来た!)
気配を感じて、清次郎は身を起そうとした。
「あ、離れないで」
おきたは、汗を浮べた顔で、狂ったように、清次郎の唇をもとめてくる。
「叱ッ、誰か……」
「え?」
「静かに」
囁いて、女の手をもぎ離そうとした。そこへ影は入ってきた。
焔は消えている。暗闇だったが、かれらが入ってきた明り障子の隙間から洩れる月の蒼い光が、僅かに三人の影を浮き上らせていた。

「起きてもらおう」
圧しころした声が、二人の上に落ちた。
「何者だ、卑怯な」
清次郎ははね起きた。
全裸である。
三人は顔を見あわした。
「下帯をしめろ」
「む……何者だ、きさま」
宮本武蔵は一人である。加勢を連れてくることはない。
「下帯をしめるのだ。それから、われらと立ち合ってもらおう」
「立ち合う?」
果し合いか。乱世の兵法者の果し合いは事情の如何に関りなく、挑まれれば、立ち合うしかない。是非にかかわらず、だ。
清次郎は立ち上り、下帯をしめた。六尺である。きつくしめながら、
(こやつらは……)と、考えていた。
(どこから来たのか?)
鞍馬の火祭りで、荒法師たちを斬りまくって以来、何度かの試合を経てきている。怨まれる筋も、ないとはいえないのだ。

清次郎は大小をとった。
「出よう」
「お、おまえさま……」
おきたがぶるぶる顫えながら言った。
これを一瞥もせず、清次郎は濡れ縁に出た。
三人の男たちはすでに、庭に出ていた。庭というよりは、ただの空地だった。裏の堀との間に二十坪ほどの空地がある。そこは先ごろ小火(ぼや)で焼けた跡を片付けたばかりだった。
「聞こう。誰だ」
盈月(えいげつ)が空にあった。まるでかれらのために光っているようであった。
「大和郡山の徳田左伝次」
「同じく渡部藤右衛門」
「同苗四郎五郎」
はじめて聞く名であった。清次郎は月光に透かすようにして、三人の顔を見まわした。
名前もはじめてなら、顔にも憶えはない。
「人違いらしいな」
こう言ったとき、漸く余裕が出た。
「こちらには憶えがない、人違いしているのではないか」
「黙れ！」

左伝次が大喝した。
「卑怯な、この期(ご)に及んで卑怯であろう」
「尋常に立ち合え」
「父の仇、まず、うぬを斬ってのちに、宮本武蔵を斬る」
渡部四郎五郎のその言葉が、清次郎にはっと思い当らせた。
(そうか、こいつら、おれを……)
宮本武蔵の弟と間違っている。
武蔵を狙っているといえば、おきたがどう出るかわからないので、舎弟清次郎と名乗った。どうせ、武蔵が現われればわかることだし、たかが遊女屋のことである。誰も、めったに本名など名乗らない。宮本武蔵は、へんに素朴で正直なところがあって本名を洩らしたのだろう。半ば戯れのような気持だった清次郎である。
それが三日のうちに、こうした思いがけない結果を生もうとは。
かれらもまた、武蔵へ報復の気持で捜しまわっていたのだ。女郎たちは口さがないし、出入りの者たちも、いい加減な連中が多い。それらの口から洩れたのであろう。
清次郎は笑いだした。
「よせ、やはり人違いだ。おれは、宮本ではない」
「なに!?」
「やはり、おぬしらと同じよ」

「……」
「宮本武蔵を一門の仇としてつけ狙って来た者だ。本名は……」
名乗りかけたのにも、かれらは耳を藉そうとはしなかった。勁烈なかけ声とともに、藤右衛門が斬りこんできた。
「死ね！　宮本」
「違う、おれは……」
吉岡清次郎、と名乗った。が、その声は三人の殺気に打ち消されたようである。
清次郎は反射的に抜刀している。ガッと刃が咬みあう。藤右衛門の刀と交わって白い火花が散った。
こういう時代では、正も邪もない。勝つか負けるかしかない。強いことが正義といっていい。殺刃をはねかえし、殺気を避けるためには相手を仆すしかない。
清次郎は身を転じた。左伝次が右側から斬りこんできた。これに空を切らせて、四郎五郎の脛を薙ぐや、翻転して、小手返しに藤右衛門を揮い斬った。的確に刃は横面に食いこんだ。
骨が哭いた。頭蓋骨の半ばまで斬りこんでいたのである。手ごたえでわかった。
四郎五郎が地上に這いつくばり、その上に凄まじい血を噴いて、藤右衛門が崩れ落ちる。
清次郎は返り血を浴びた顔をあげ、青眼にかまえて、はじめて肩で息をついた。
二人のなかまを目前に斬り伏せられて、左伝次は怒りと不安でわなないていた。刀をかまえてはいたが、明らかに、闘心は挫けていた。

「聞きたい」と、清次郎は言った。「宮本武蔵とは何があった？　武蔵を狙う理由を聞こう」
「うぬ、うぬは、舎弟であろう、なれば、わかるはずじゃ、彼奴は……」昂ぶりは声を詰まらせて、
「われらの兄を果し合いで斬ったのはよい。勝負は時の運じゃ、じゃが、ことのついでに兄嫁を犯しおった」
「まさか、宮本が……」
「犯した。手籠めにした。彼奴は非情な男じゃ、許せぬ。果し合いの段ではない。許せぬ。されば、舎弟のうぬも、仇の片割れじゃ」
左伝次は三十前後であろう、その言葉に嘘はないようであった。その言葉通りとすればたしかに、かれらが憤激するのは当然だ。
「無謀だったな……」と、清次郎は言った。
「おれは宮本ではない。武蔵をおびき寄せるための、術だ」
「なんじゃと！」
「本姓吉岡、京流の吉岡憲法が伜だ」
「たばかりを……」
「過る年、武蔵のために、同胞を斬られ、以来訪ね歩いている。吉岡清次郎重賢だ」
まだ左伝次は半信半疑だった。
それが事実とすれば、藤右衛門と四郎五郎は無為に斬られたことになる。すでに四郎五郎は

動かなかったし、地上でうごめく藤右衛門の呻きも、冬の虫のように、しだいに息が細くなってゆくようであった。

それを見ると、左伝次は、もはやこのまま引き退れないのを感じた。間違いかどうかはもはや問題ではなかった。武辺(ぶへん)として惨澹たる敗北を喫したことである。試合をはじめる前だったら、そのまま、手をひくこともできた。

ひとたび、剣を交えた以上、さらに敗北して、いまさら、人違いでは済まない。人違いであったかどうかは、剣を合わさない以前のことである。

当時の武辺者の意地は、剣を合わせた以上、もはや、すべての理屈は抜きになる。

「宮本清次郎、と聞いた。ゆくぞ」

頑迷なまでに左伝次は、大喝して、たっと地を蹴った。二合。刃は刃を嚙み、火花が目を灼いた。軽捷な上に、京流の刀さばきは、左伝次には目まぐるしく、とらえようがなかった。

「そこだ」

どちらが叫んだか。

その声を、清次郎も、左伝次も、両者ともに聞いた。それは〝味方〟の声援にちがいなかった。お互いに、もはや一人である。お互いにその声を、相手の助太刀と見た。

すでに争闘で目を醒ました客や、女たちがそこら中に顔を出していたし、中二階から高見の見物をきめこんでいる者や、柱のかげからこわごわのぞいている者などがいた。

その誰かかもしれないし、助太刀があらわれたのかもしれない。

その思いが、左伝次を焦(じ)らした。

「死ね、宮本!」

叫んだ。大上段にふりかぶって巨岩を砕くばかりの勢いで斬りこんできた。その一瞬、かれは、眼前が突然、昏くなったのをおぼえた。

赤い闇がはじけた。清次郎はその僅かの隙を見逃さぬ。血刀は水月を貫いて走った。

刀をひきぬいて左伝次を蹴倒した清次郎はほっとしたように、息をついて、左伝次の姿を見守っていた。

「みごとだな」

のっそりと、近よってきた男がある。

あの仏の弥五郎だった。

「あざやかだ、京流やな」

「……」

「京流の胡蝶剣、たしかに見た」

「……」

「あざやかだ、が、いささか弱い……ははは、怒るな、その弱さがおぬしには、丁度合っているかもしれぬ」

清次郎はまだ前髪をつけたままだった。前髪は、

(武蔵を斬ったあとで落す)

その悲願で生きていた。十七歳といえば、すでに前髪をつけているのは、おかしいようなものだが、かれには、武蔵を仆すだけが、人生のすべてになっている。武蔵を仆さねば、京流も、吉岡一門もないのだ。

かれはそのまま、立ち去ろうとしたが、武辺としての果し合いでは、とどめを刺さねば、卑怯とされる。後始末はきちんとやらねばならなかった。

四郎五郎と藤右衛門の鼻に掌をあてすでに呼吸の止っているのを確かめてから、とどめを刺した。

さらに、左伝次にも近づいた。かれはまだ息があった。が、気息えんえんとして四肢に断末魔のふるえがある。苦しませるだけ不愍であった。もともと遺恨も何もないのだ。

かれは、咽喉元に鋩子をあてようとして、はっとした。

左伝次の両眼は閉じられていた。その瞼の上に、二寸の爪楊子が突っ立っているのがはっきりと見えた。

「や!?……」

愕然としてふりかえった。視界の中に、仏の弥五郎が、広い肩幅を見せて、去ってゆくのが見えた。

三

(彼奴が……)

邪魔をした。

いや、邪魔をしたとは、清次郎の口から言えなかった。かれとしては、好意でやってくれたのではないか。おそらく、誰も気がつかなかったろう。

(余分なことを!)

かっと、胸に突き上げるものがあった。清次郎は、二本の爪楊子をひきぬいて捨てた。

(彼奴が、こんなことをしなくても、勝てたのだ、おれは、勝てた……)

その目の前を、蛍がすっと横切った。

もしも、左伝次が双眸をつぶされなかったら、かれの刃は、清次郎を両断にしていたかもしれない。

仮定である。あくまでも仮定ではあっても、現象的に、楊子の手裡剣で助かった、いな、得をしたのはまぎれもない事実だった。

むろん、かれが素早くとり捨てたし、弥五郎は口にしなかったので、世間の噂には、清次郎の不利なことは何もなかった。

人格高潔とも見えぬ弥五郎だが、武辺ということでは、節度があるのであろう。低劣な男は、おのれのワザを誇り、行為を吹聴したがる。

だが、弥五郎は黙っていても、清次郎の心は平静ではいなかった。

若さもあろう。清次郎の心が汚れていなかったせいもあろう。

「大したもんや、三人も殺りはったのやな」

「一ぺんに三人も！　ふえッ、人間ワザとは思えへんわな」

「一ぺんに三人も殺ったのや、天狗さまのような御方や。ほたら、天狗のように恐ろしい顔をしてやろ」

「それが大違いだんね、若衆や、前髪の艶やかな、美い男やで」

「阿呆んだら、そないことあるはずがない、色若衆は、へろ腕やんか」

「疑うんなら、見にいってんか、京の吉岡憲法の伜や言いよるがな。京者やさかい、そら優しい顔してるわ」

「どこにいさらす」

「浮世小路の亀八いう家や、おきたがぞっこん惚れて、べたべた、いちゃつきよってに、そらもう、見てられへんわ」

たしかに、おきたの惚れこみようは、尋常ではないものだった。

人目もかまわず、朝から晩まで、まつわりついて、離れない。

おきたのような女にしてみれば、一躍、評判になった若い兵法者に選ばれた女、として、誇らしげだったのだろう。

三日たち、五日たち、十日たった。

清次郎は、そうした人気者としての名声のなかで安逸を貪っていたのではない。

宮本清次郎と名乗ったことが、妙な結果になったが、かえって、そのことで、吉岡清次郎の名が大坂中に知れわたったことを、

（かえって幸いだった）

と、思った。

京流、〝吉岡〟の名は武蔵も忘れていないはずである。

かれとしては、おそらく、京流を完膚なきまでに打ちのめしたつもりになっていよう。

何ヶ所かで、武蔵がそのことを誇らしげに話していったということを聞いた。京流はこれで根だやしになった、とまで拡言している。

そこに、吉岡清次郎あり、と噂がひろまれば、武蔵は拡言のてまえ、聞き捨てにはしておれないだろう。

必ず、戻って来よう。おきたにも、またくると言っていたという。その言葉は信用できないが、吉岡清次郎の成長を知り、さらに兵法者としての名声を聞いたら、あの性質では、無視できないはずであった。

（くる、必ず、くる！）

その日を待つのだ。

だが、運命はしかし、清次郎に安穏な日を送らせなかった。

清次郎は浮世小路を離れて、近くの四人橋の袂の木賃宿に泊ることにした。四人橋という名称は、元和以後、大坂城が徳川氏の手に移って、冬夏両度の陣の戦火で焼かれた町の整備がなされたとき、名を変えられたが、もともと四人の女が人柱になって出来たと伝えられる。

よにん橋が、四人と書いてしびとと読む者があったのか、死人橋などと書く者がある。辻斬りや、落武者狩りなどがあって、この橋上で死人が出たりしたせいもある。

清次郎が、宿を変えたのは、浮世小路の名物になってしまったことと、おきたの恋情がわずらわしくなったせいだった。

いくら十七歳の若さでも、日がな夜がな、女にまつわりつかれていてはたまらない。精も根も尽きてしまう。それに、清次郎は宮本武蔵という剛の者と対決しなければならぬのだ。

その大望を控えた身で、おきたに精を吸い尽くされては、いざというときに、むざんな結果になる。

木賃宿は、炊事のための薪代を意味している。もともと、戦国時代は、一夜の宿を与えるところはあっても、食事は、おおむね自炊だった。食事の支度を宿の者に頼むというところから炊事代、つまり薪代を払うという習慣が出てきたのである。

ほかに牢人者や行商人や大坂見物の遠国の者など、入れ混(こ)みで泊っている。夫婦者や病人などの場合は、衝立や腰屏風などで仕切りをしてくれるのである。むろん、そんな場合には、決った木賃のほかに、なにがしかの銭を包まなければならない。

(やれやれ、これでおきたの手から逃げられる)

夜はゆっくりと寝ることが出来る。

宮本武蔵があらわれたら、この木賃宿「大和屋」に知らせるように、念を押してある。

日に一度は、浮世小路に姿を見せておくことにした。

その武蔵があらわれないうちに、問題が起ったのである。

おきたのところに泊っていないとなると、遠慮することはないとばかり、女たちは媚を見せた。

あのあざやかな三人斬りは、増幅されて喧伝されている。その上、猛々(たけだけ)しい荒武者ではない。優しさを残した青年である。汚れた女たちでも、たまには商売ぬきで、楽しみたい。

むろん、清次郎はそんな媚には負けないが木賃宿まで押しかけてくる女がいるのには弱った。

小つる、と称(い)う女だった。若くて、遊女にしては肌が綺麗すぎるほどだった。どちらかというと、清次郎の好みにあっていた。瓜実顔に小さな朱唇と細く透った鼻梁や、けむるような月なりの眉毛や、伏目にしているときには目立たないが、眼をあげたときには、くっきりと二重瞼が、挑むように女の情炎を感じさせる。

小つるが、浮世小路でも売れっ妓(こ)の女だと知ったのは、後のことである。

その夜、宿のおやじが黙って腰屏風を持ってきて、かれの場所を衝立と腰屏風で囲うようにした。

清次郎が頼んだのではない。だから、黙っていた。向うの都合だろうと思った。

ところが、それは、小つるが手をまわして宿の者に頼んだことだった。

小つるはその夜、大和屋に来ている。他の泊り客たちが寝鎮まったころを見はからって来た。

「――あたし、小つる」

耳もとで囁かれて、清次郎は、身を起そうとした。
「――ねえ、いいでしょう、あたしを……」
「よせ、出ていってくれ」
その唇を唇が蓋をした。女の匂いが、清次郎を包みこんだ。
「いいじゃないか、あたしのほうが美い女なのに、おきたなんかに……ねえ、もう、おきたのことは忘れさせてあげる」
いかにも、色里の女らしい、ものの考えかただった。おきたがそう吹聴していたのか。そうでなくても、他人目に見れば、清次郎の日常は、非生産的な遊冶郎に見えたろう。
この小つるなら、二、三度、口を利いたことがある。目立つ美貌が、清次郎を無視させなかったのだ。
綺麗だと思っていたことが、女の積極的な行動に対して強く拒否できなかった。女は唇をあわせると、ぬるりと舌を滑りこませてき、素早く、手がかれの股間をまさぐっていた。

腰屏風や衝立で遮られたくらいで、男女が肌を合わせるなど、通常の感覚では耐え難い。
この時代には、しかし、まだ乱世の荒々しくて解放的な空気が残っていた。庶民の間では、女でも道端で小用をたすのが普通だったのである。
清次郎は、女の中に溺れた。巧みな女の誘いで、かれは、柔肌の中におのれを沈めている。
その快楽の刻は、しかし、悪い余波を残した。

おきたとは違い、たしかに小つるは、清次郎を陶酔の淵に引きこんだ。その陶酔がさめたとき、しかしかれは、妙な立場になっていることに気がついたのである。
数人の男たちがあらわれて、小つるを強引に連れ去った。
「この女、足脱きする気ィでも、勝手な真似はさせへんで」
「そないなつもりやない、あては今晩だけ、吉岡さまと……」
「阿呆、そない身勝手を許していて女郎屋が束ねられるかいな」
一人が髪をつかみ、曳きずってゆく。ほかの男たちは、清次郎を牽制するように睨みつけているのだ。
かれらは清次郎の腕を知っている。見た者もいようし、話だけ聞いた者もいよう。
なまじ、かさにかかって来たら立ち合うこともできるが、小つる一人に責めを負わせて、連れ去ってゆくのである。遊女たちと楼主との間がどういう約束がなされているか清次郎はよく知らない。およその察しがつくだけである。
「むごいことをするな」
と、叫ぶくらいだった。
が、かれらは冷笑でこれに応え、あとに残った一人が、左封じの書状を差し出した。
「もし旅の御方、吉岡清次郎とか言わはったな。これは仏の弥五郎はんより、おまはんに宛てたものや、見てんか」
一目で、それは果し状だとわかった。決闘状である。

「なんと、弥五郎が……」

武蔵ではない。意外だった。文面は簡単なものだった。

——明夜子ノ刻、死人橋々畔に出合い候。

清次郎は、二度読み下して、その男を見た。

「——わかった」

「来て下はりまっか」

「わかった。果し合い仕ろう。だが……」

「だが？」

「理由を聞きたい、ただ、おれと腕前を競わんがためか」

浮世小路の地廻りとしての意地かと思った。が、返事は意外なものだった。

「そない閑人は大坂には居らしまへんね。あの小つるは、弥五郎はんの女だんね」

ぎゅっと妙なかたちに拳をつくって突きだした。

そうか。小つるを奪われたと思っての果し状か。いまさら弁解してもはじまらない。清次郎は、かえって、闘志が湧くのを感じた。

清次郎は子ノ刻の鐘の音がひびく前に、橋畔に佇んだ。少しでも遅れると、逃げを打ったと思われる。宮本武蔵はいろんな術を用いたが、名門京流は、きたない真似はせぬ。

かれの鼻先を、蛍の小さな冷たい光が、つい、と横切った。気がついた。堀端の柳葉に戯れるように、蛍の光が、いくつも見えた。無心に飛んでいる。

「ほう、逃げなんだな」

仏の弥五郎があらわれたのは、やはり鐘の音が鳴りはじめぬうちだった。

「弥五郎か」

「おぬしとは、こうなるやろと予感がしたで、宿縁やな。死んでも悪う思わんといてや」

「あいにくだ。死ぬのは、おぬしだ」

「はははは、笑わせたらあかん。あの蠅のごとは手加減してやらぬばい」

まことに、生国はどこか、どういう経歴があるのか。感情一つで、方言もくるくる変る。この仏の弥五郎の顔が一瞬、鬼のように変貌したのを見た。

そのとき、夜空をふるわして、鐘の音が聞えてきた。刹那、弥五郎のからだが跳躍した。清次郎も抜刀しながら、ぱっと後へ飛び退った。すっと二人の間に蛍が入ってきた。弥五郎の手から楊子が——二本、同時に飛んだ。清次郎がぱっと刀をあげたのは、殆ど反射的な動作である。蛍の光がぱっと消えた。確実に、楊子の箭は、蛍を刺したのだ。が、もう一本は、清次郎の刀の鍔にあたって、あるかなしの音を立てている。そのまま清次郎の刃は、弥五郎の肩先から、斬り下げていたのである。

どう、と倒れた弥五郎は右手に刀を握ったままだった。夥しく血が流れる中に、かれの左手が動いていた。左手は、地面に何かを摑むように、動いている。

「ほ、蛍……」

手は、あの蛍を探していた。

かれの目には何が見えたろう。橋袂の常夜燈の明りに、血の中にうごめいている蛍が、楊子に貫かれているのが見えたかどうか。

その手はやがて、力尽きたように、ばったり、血の中に落ちた。

武蔵塚を曝け（あば）

一

草が動いていた。

播磨から美作（みまさか）へ抜ける峠である。間道（かんどう）だった。九月の末まで、晩秋の風が峠を吹いていた。

樹々は紅葉しはじめている。

夕方になれば、かなり冷えるにちがいなかったが、まだ陽が高いせいか、坂をのぼってきて汗ばんだ額や頸すじには、風は爽（さわ）やかだった。

すすきの伸びきった穂が大きく動いていただけではない、色の腿せた雑草の動きが異様だった。

思わず、吉岡清次郎は足を止めた。

（待ち伏せか？……）

油断はできない。

刀の柄に手こそかけなかったが、緊張が四肢に漲（みなぎ）った。

その視線に燻し出されるように、草むらから、顔が出た。

女の顔だった。

「あ……人が!!」

ぎょっとしたように、女は叫んだ。

つづいて男の顔が出た。これも驚愕の表情だった。それは作ったものではない。二人とも、全く、清次郎の出現を知らなかったらしい。

人気のない峠の草原で男女がまぐわっていたのだ。この時代さして珍しいことではない。

男のほうは首をちぢめると、さっと身を翻した。草の中を逃げだしたのだ。こういう場合、最初に逃げるのは、たいてい女性の方であろう。

むろん女も走りだしたが、その前に清次郎を睨みつけた視線は、異常なほど凄まじいものだった。

「せっかくのところを、恥をかかせたのね」

怨みをこめてこう言うや、長い黒髪が躍った。風のように走りだしている。黒髪が風の中に尾を曳いた。

「待て、私は何も……」

まさか、女に呪詛を浴びせられるとは思っていなかった。

行きずりに一瞥したにすぎない。それも、男女のまぐわいを〝見た〟わけではない。見るには距離があったし、深い草の中なのだ。

二人は、いかにも山里の者らしく、たちまち、姿を消した。

「何ということだ」

清次郎は呆然と佇んでいたが、やがて苦笑を洩らした。

「これは幸先がよくないぞ……」

あれから三年の歳月が流れている。武蔵は作州の宮本村へ帰っているらしいという噂を頼りに、国境を越えて来たのだった。

峠から見ると、豊かな山峡の盆地の中央を川が流れ、山裾に農家が点在している。この村を静かに照らしている陽ざしは、晩秋にしては明るく、むしろ眩しいくらいだった。

一見、静かで平和な村に、実は、殺気が満ち満ちていることを知るまでに、どれほどもかからなかった。

突然、清次郎の目の前に人が立った。

それは、全く、忽然、という感じだった。路傍に亭々たる巨杉があった。その梢上にふっと何やら動いたものがある。そこをふり仰いだ——その瞬間に、その男はあらわれている。

草むらから飛び出したのか、小路から湧き出たのか、意表を衝かれて清次郎は立ち止った。

「吉岡か」

のっけから、こう浴びせて来た。

むろん、見知らぬ男であった。山者らしいごつごつした筒袖に、熊皮の袖無しを着て、軽衫ようの脛のすぼまった袴を穿いている。いや、その脛には、脛当てをつけ、腕には筋金入りの

籠手をつけているのだ。

これは武装といってよかった。

「――む……吉岡清次郎重賢と申すが、おぬしは？」

用心しながら、清次郎は問い返した。

不遜な相手の質問に答えなければならない義務はないが、他国に入っているのだ。ある程度は、土地の者に合わせる。それがこの時代、法律の保護などまるきりない他国旅行の常識である。

「わしのことなど、どうでもよい。美作の人間じゃ」

「それはおよそ察しがつく。吉岡とどうして知っている？」

「問答無用」と、その男は無精髭に蔽われた口をかっとあけて怒鳴った。「とっとと、去ね！」

「なんと」

「去ね」

刀に手をかけんばかりである。役人ではない。いわゆる郷士の類いであろう。山賊とも思えないのだ。

「去ねといわれても、わざわざ参ったのだ。用が済むまでは、戻るわけにはまいらぬ」まだ穏やかに清次郎は言った。

「どういう理由か、聞きたい。理由しだいでは、ひきかえしてもよい」

「黙って去ね」

「これは理不尽な……」

「間誤間誤していると、ぶった斬ってくれるぞ」

それは威しではなかった。言下に抜刀したのである。厚重ねの長い刀であった。

「死ね、吉岡！」

人違いではない。そうと知るや清次郎に遠慮もひるみもなかった。清次郎はたたっと二、三歩退るや、ぱっと背をむけて走りかけた。

それは誘いだった。ただの威しなら、ここで相手は刀を引いたはずである。勢いこんで、背に打ち刀をふりおろしてきた。刃風が襟足を吹いた。身を低めてふりかえりざまに、かれは一颯した。したたかな手応えとともに、ふっと腥く血が臭った。刃はみごとに胴斬りにしている。

ほっと息をつくひまは、しかし与えられなかった。頭上から、凄まじい声が降ってきた。まるで、猛獣の落下してくるような勢いだった。殺意をあらわにしているという点では、猛獣にひとしかった。秋の日にぎらりと光ったのは、二本の白刃である。二人――と見た清次郎の手から、刀が飛んだ。最初の男が斬られたときに取り落したものである。それは落下する男に向って、下から水の噴き上るように走った。避けようはなかった。するどい鋩子は、その男の股間に突き刺さるとともに、柄頭を下にしたまま、落ちてきた。

ぎゃーっと絶叫が噴いたのは、柄頭が垂直に地上を打ち、その刃が股間から胸のあたりまで、内臓を裂いて貫いたからであろう。

その噴血と絶叫が、ともに降りてきた男をたじろがせたのは否めない。その驚愕の顔が、次の瞬間、血の垂直絹を引いた。

片膝着きざまに、拝み打ちの一刀である。頭頂から顎の下まで、一分の狂いもなく、真っ二つになって、ぽかりとひらいた。

「――これだけか」

三人でおしまいか。清次郎は血ぶるいして立ち上った。

血刀をゆっくりと死体の着物で拭いとる間も、清次郎は、あたりの様子を窺っていた。

この連中のことだ。他のなかまが、どこからあらわれるかもしれない。日がかげった。峠の風は急に冷たくなった。清次郎は刀を納め、からだの返り血を死体の片袖をひき千切って拭いとると、急な坂道を下りはじめた。

（おれの名を知っていた……）

その疑問が、かれの脳裡に黒い霧のたゆたうように、揺曳している。

知っていただけではない。あらためて名乗ったのだ。それを聞きながら、殺気を奔らせてきた。

（何の怨みがあるのか、まさか宮本武蔵が指嗾したのであるまいが……）

そこまで、卑怯だとは思いたくない。

かなり卑怯な術を使う宮本武蔵だが、村人をそそのかして不意打ちをしかけるほど、卑劣ではあるまい。あれだけの腕前を持った男なのだ。清次郎が来たと知れば、喜んで相手をするだ

ろう。

だが、そこまで信じてよいものかどうか。

勝ちさえすればいいのだ。どんな術を用いても勝つことが正義の時代だった。

京や大坂やそして江戸のような大きな町ならば、衆目も多い。噂が広がり、誇大に喧伝される。それは恐ろしいほどの速度で、口から口に伝わる。それだけに、一応、行動も制限されるが、こういう山里にくれば秘密は保たれるのだ。

現に、宮本武蔵が吉岡一門を悉く討ち果したという噂は、播州にも伝わっていた。

清次郎は昨日佐用郡の平福村で泊っている。

この平福村で武蔵は育ったということであった。

武蔵の氏素姓を清次郎はこれまでの間に、折にふれ調べたが、よくわからない。武蔵は美作生れと言っているが、育ったのは平福村だという。

武蔵の母なる人はこの播磨の士別所林治の娘で、作州の平田武仁に嫁し、武蔵を生んだ。が、故あって離別し、平福村へ来て田住政久なる士と再婚したという。幼少の武蔵は連れ子として平福村で育ったというのである。

その話が事実なら、武蔵にとっては第二の故郷になる。

生地よりも、育ったところのほうが、懐かしいものだ。

武蔵が故郷に帰ったと聞いてやってきた清次郎が平福村へ寄ったのは、必ずしも、そこに狙いをつけたわけではない。いうならば道すじだったからだ。平福村から美作の宮本村までは山

道であるが、三里弱しかない。
　吉岡一門に勝ったという噂が、すでに伝わっていたくらいだから、清次郎に集まる村人の視線も冷ややかなものだった。
　おそらく、かれが今日、国境いを越えて作州に入るということは、誰かが知らせたのであろう。
　知らせたのはいい。その清次郎を集団で抹殺しようという連中がいたことだ。
（やはり、宮本の差し金か）
　清次郎は盆地の村を見おろして、一歩一歩近づいていった。

二

　村の入口で最初に逢ったのも女性だった。その女は馬頭観音の前にぬかずいて拝んでいた。何か願いごとをしているように見えた。
　清次郎は油断なく傍を通った。女は気がつかないようであった。足音をころしたのではない。それだけ一所懸命だったのであろう。
　だが、そのとき銃声が起った。やはり狙われていたのである。灼けた鉛玉は頰を掠めた。
　清次郎は一跳して赤松の幹を小楯にとった。女が耳が不自由でなかったことは、この銃声に気がついて身を起したことでもわかる。
「あ……」

　恐怖に顔が歪んだ。若い娘だった。一瞬、何が起ったかわからないようであったが、つづいて、また銃声がし、清次郎が小楯にとった幹がぱーっと、白く弾けたのを見ると、顔を引き攣らして傍の小路へ駈けこんでいる。
　女が一言も洩らさないのは、異様だった。
　普通なら、金切り声をあげるだろう。彼女は、林の中から、清次郎を手招きした。地理不案内のところだ。好意に従うほうがいい。
　清次郎はその小路へ走りこんだ。その姿を見てまた発砲した。が、これは、あわてたらしく、路の小石に当って、弾き飛ばしただけである。
　走りこんできた清次郎を見ると、娘は手をのばした。
　ものもいわずに、かれの手くびを握ると、先へ立った。小走りである。
　若い娘なのだ。十六、七であろうか。愛くるしい顔をしているが、一言も口をきかない。
「どこへゆくのだ」
　これにも無言だった。
　好意的なのは、ふりかえって笑顔を見せたことである。林の中のだらだら坂を下ると竹藪がある。それにそって廻った。すぐに家が見えた。
　そこはかなり大きな家で、土塀がめぐらしてあり、小さな溝川が囲繞している。これは城の濠を意味しているのであろう。
　その家の裏口から、女は中へ導いた。

その間、一言も口をきかないのだ。異様であった。
その理由は、家人が出て来たのでわかった。口がきけないのだ。
納屋から出て来た下僕らしい老爺が、
「おたよさま、どうなされました、こちらの御仁（ごじん）は？」
「あ……」
手真似で、娘は、説明しはじめた。老爺はそれに一々頷いて、
「ほう、左様なことが、それは大変でしたな、何やら、物音がしたように思うたが、左様なことでしたか……」
どうやらわかったらしい。だが、清次郎へむけた眼は、うさんくさげなものだった。
「私は吉岡清次郎重賢、この村へは要用あってまいったが、ふいに鉄砲玉を喰ってな。危ないところを、助けられた」
清次郎は微笑して、おたよにあらためて礼を言った。
「かたじけない。そなたがいなかったら、いまごろは三途の川を渡っているところだ」
おたよは、いいえ、というように顔を振って、弱々しく微笑した。
気持にゆとりが出来たせいか、おたよの美貌に目を瞠（みは）らされた。鄙（ひな）には稀（まれ）な、という言葉があるが、清楚な美しさは、白百合か、こぶしの花にでもたとえたいほどだった。
（こういう美しい娘が……）
馬頭観音に祈っていた姿は、必死に、何やら思い詰めた様子だった。家人の病気平癒でも祈っていたのだろうか。美貌は浮世の労苦と相反するものと思うのは、清次郎の若さだった。

その美貌が、彼女の場合は禍いとなっているのを、清次郎はその夜はじめて知ったのである。
大きな家であった。古い。二百年は経ているであろうと思われる。がっしりした造作で柱も尺五や尺三の柱を多く使い、家の中心をなす大黒柱などは二尺はたっぷりある。こういう巨材になると檜ばかりではなく、杉や欅なども使ってある。棟木なども、二抱えもある。
この古くて広い屋敷に人数が少いのも意外だった。水仕の女や男衆など五、六人いるきりであった。
清次郎は一室に案内された。
「いずれ主人も戻りまするが、客人を喜ばれますで、ゆるりと手足を延ばされるがよろしかろう」
小作人たちを取りしきっているという、中年の男がこう挨拶した。
藤蔵と名乗った。四十歳前後とおぼしい、がっしりした骨格の男である。眉毛が太く眼が鋭い。
「播州よりまいられたとなれば、さぞ、御空腹であろう、ただいま支度をさせております。粗餐でござるが、召し上って下され、それから、風呂もいま焚きつけさせましたなれば、間もなく湯の支度も……」
至れり尽くせりの待遇である。清次郎は恐縮した。そこまでして貰う理由はない。この村に来たのは、むしろ憎まれる話なのだ。

おそらく、宮本武蔵の出現は、この村の誇りになっているのではないか。それを討ちに来たのだ。憎まれるのはしかたがない。が、清次郎の意地と吉岡一門の衆望を担っての行動である。憎まれることは覚悟の上の作州入りであった。

あの三人の狼藉（ろうぜき）も、不意打ちの鉄砲も、物騒な出迎えだと観じている。ただ、かれのことが伝わる速度に驚いたのだ。

「このような時勢ゆえ、村人どもは気が立っております……」

藤蔵は、凝（じ）っと視線を清次郎につけたまま、声音（こわね）は気味悪いほど静かであった。

「他国者に恐れを抱いている。痩せ犬ほどよく吠えると申す、ま、おいのちに別条なかったことは重畳（ちょうじょう）……」

こう出られると、清次郎は返事に困った。武蔵を討ちに来たとは言い難い。だが、襲撃者たちは、その目的を知っていたからこそ、不意打ちしてきたのだ。ここで糊塗しても、すぐにばれることだった。

「いや、死ぬのは日常、覚悟の上です」

「……」

「況や、このたびの旅は冥途へのそれと観じておりますれば、御斟酌（しんしゃく）無用に願いたい」

「――ほう、その若さで」

「武門の意地に、若きも老いもない」

「……」

「当地の出生と承る、宮本武蔵なる者、私の親や兄どもを討ち果して遁走いたした」

「……」

「京にては知られたる室町御所兵法指南所たりし吉岡憲法が一門でござる。宮本武蔵どの帰郷しあれば果し合いいたしたく罷りこした」

暫しの沈黙があった。

清次郎はそれを藤蔵の驚きと受けとった。かれは、ややあって、重々しく首を左右に振った。

「せっかくの御来訪ながら、その儀、残念至極でございますな」

「残念とは？」

「宮本武蔵どの、いかにも先般、帰郷なされた。が……」

「――また出奔か」

と勢いこんだ清次郎に、藤蔵は目をしばたくようにした。

「歿（みまか）られた」

「え！　何と」

「旅に病（や）んだ身での帰郷であった。つい、昨日な……一日ちがいであった」

「……」

まさか、と疑いの言葉が、口をついて出かけた。

一日ちがいで病死したとは。信じられなかった。三年目である。この歳月が徒労に帰したというのか。

「病死じゃ……あれほどの腕を持ちながらも病いには克てぬ……人間とは、弱いものでござるのう」

「死んだ……武蔵が、死んだ」

呆然として、清次郎は呟いていた。

がっくりと気落ちしたように、かれは、肩をおとした。

そこへ茶菓が運ばれて来たが、手をつけるどころではなかった。その落胆ぶりは、急に十歳も老けたように感じられた。

憐れむように藤蔵は見やって、

「さだめし、お力落しであろう、まあ、これもやむを得ぬわざ、人の運命は予測し難い、世のならいじゃ。今日はゆるりと骨休みなされ、明日でも、墓所に案内仕ろう」

旅の疲れがたしかに、一度に出た感じだった。

湯に入り、食事を摂り、僅かの酒にも酔った。捜しもとめる仇敵が死んだのだ。清次郎は胸に空虚があいたような気がした。

がっかりしたので、酔いがまわり、清次郎は眠りに落ちるのも早かった。

どれくらい眠ったろう。ふと、眼が醒めた。

どこかで妙な声がしている。

眼が醒めたのはそのせいらしい。部屋の中ではない。夜の声は、距離感が判然としない。

清次郎は身を起した。小用も催している。かれは脇差だけを差して、立ち上った。

重い板戸を開けると、次の間がある。暗い。

燭台を持って廊下へ出た。

声は廊下の先から聞えてくるようであった。すすり泣くような、笑うような、喘いでいるような、気味の悪い声である。古屋敷のせいでそう感じるのだろうか。陰々滅々という感じであった。

鍵の手になったところをまがると、灯りが洩れている部屋がある。板戸がほそめに開いていて、そこから燭の灯りがまたたいている。

引かれるように、清次郎は近づいた。

声はそこから洩れてくるのだ。

「――ふふふふ、ふふふふ、どうじゃ、よいであろう、ほれ、ほれ、こうすりゃ、ずんと気持がよいであろう、ははは、泣け、泣くがよい、ずんと楽しむがよい、もっとか、もっとしてほしいか……」

嗄れた声である。その声だけであった。それは、明らかに男女の営みが湧き上らせる歓喜のそれに違いなかった。

ただ、女の声が聞えない。男の声ばかりである。

その理由は、板戸の隙間からのぞいたとき判然とした。

全裸の男女が絡みあっていたが、男は半白の老人であり、女は、あのおたよだったのだ。唖者であるおたよは、髪をふり乱し、喜悦にむせびながらも、言葉を発することができないのだ。

それだけに一層、官能の波は、五体を狂おしく悶えさせ、四肢を痺れさせる。黒髪が乱れ白いからだは、白蛇の化身か何かのように妖しくうねっていた。

(あいつが、この家の主人か？)

かれが寝所に入ってから、戻って来たのであろう。まだ挨拶はしていない。

老人ながらがっしりした骨組みは、いかにも戦場往来の古強者という感じであった。

燭の灯りを受けて、汗が光る褐色の肌には縦横に刀傷が走っていた。

おたよは、その逞しいからだを受け入れてあえいでいる。男の手が豊かな乳房を揉みしだき、はげしい動きを示すと、それに合わせて、胸が、腰が、躍動する。被虐の快感に歪んだ女の顔は、苦痛と恍惚の入り混った奇妙に淫らなものだった。

枕から頭をはずし、がっくりとこちらに顔を見せた。おたよの口は半びらきになって、あえぐたびに、涎さえも溢れさせているのだった。

「ははは、はははは、どうだ極楽であろ、かような悦びは、わしでなければ、与えてはくれぬのだぞ、さ、さ、もっと、よくしてやる、もっとな……」

自信に満ちた老人の動きは、熄むとも見えなかった。

徹宵、女体を愛撫して尚、疲れを見せるふうもないのであった。

その老人の目が、突然、こちらへ向けられた。

清次郎は、ぎょっとなった。

板戸の隙間は僅かである。むしろ、古い建物だけに、多少の歪みが出ている。その故の隙間であった。

(見えるはずがない……)

と、思いながらも、清次郎は僅かに身を退いた。

主人は、にやりと笑ったようである。それはあたかも、見られていることを知っていて、快を貪っているかのようであった。

三

「——昨夜は失礼した」

翌朝、顔を合わせると、主は、快活に言った。

その言葉は何を意味していたかわからない。帰宅して挨拶しなかったことか。表面的にはそうでも、裏には、あのことを匂わせていたのではないか。覗かれていることを知っていた……いや、むしろ、かれが覗くように仕向けたのではないだろうか。

清次郎は、ふたたび寝に就いてからも、なかなか寝つけなかった。何だか、ていよく、主人の変態的な嗜好に利用されたような気すらしたのである。

それに、あれほどの、激しく、長い行為にも関らず、今朝の主人はけろりとしていることだ。

「境田十兵衛と申す。代々世襲でな。したが、界隈の者は、わしのことをくるすの十兵衛とか、十文字十兵衛とか呼ぶ」

「くるす？……」

「左様、このせいであろう」

十兵衛は誇らしげに、胸に下げた十字架を見せた。

それは銀製らしく、よく磨かれて光っていたが、横二寸に縦三寸ほどもある。十字架には、髭の天主（でうす）が、磔刑になっている姿が、浮彫されている。

「なるほど、吉利支丹を信仰なされてか」

清次郎はやや驚きをこめて言った。

「信仰？」

十兵衛は冷たい笑いでこれを否んだ。

「チト、違うな」

そう言っただけで、どこが違うのかは、説明を加えないが、こちらの思惑など、まるきり無視しているのである。

「十文字のいわれは、あれさ」

と、顎をしゃくった。

長押（なげし）に槍がかかっている。十文字槍であった。

「見事であろう、なまなかの具足など、あの刃先にかかっては、蓑（みの）の如し、じゃ、ははは」

これは、ただの自慢か、吉岡への牽制か。

「見事ですな」

清次郎は、軽く受けた。

「その十字架も見事です」

こう重ねたのは、皮肉であり、挑発を避けたのだ。清次郎もこの旅の歳月で、随分、大人になっている。当初の若さだったら、こうはいかない。

十兵衛が十字架を下げているのは、信仰でないとしたら、一種のアクセサリーなのか。

当時、河原から興った出雲の阿国（おくに）などの華麗な演劇にも、当世風なかぶき姿として、十字架を下げている絵が残っている。

いかにも桃山時代の世相を代表して見えるが、しかし、どういうものか、この種のアクセサリーはこの国では後代に発展しなかった。

一つには、禁教のあおりを喰ったのかもしれないが、ともかく、この山里でそれも老人の胸にアクセサリーとしての意味はあまり感じられない。

老人といえば、僧侶のように珠数をかけて信仰の証しにしている者がいる。あれも一種のアクセサリー的なところがあるが、十兵衛の場合、そちらに近いのだろうか。

そのあとで、十兵衛は武器蔵に案内した。

それも、この場合、故意としか思われない。

その武器蔵に入って、まず、鼻をついたのは硝薬の臭いであり、数梃の種子島銃が、目に入った。

じろりと十兵衛は清次郎を見た。

「おぬしは鉄砲で撃たれたというたが、その不埒（ふらち）なやつは、あれかもしれぬの」

「……」

「ははは、冗談じゃ」

口は笑っているが、眼は冷たい。清次郎は危険を感じた。

（ここでならば……）

この十兵衛を斬ることは出来る。そう思った。せまい土蔵の中なら負けはせぬ。槍自慢の者は、広いところを好むのである。

「あるいは」

と清次郎は言った。

「この村で、鉄砲があるのは、ここだけですか」

「らしいの」

「……」

「だが、わしの知らぬやつが持っているかも知れん。二、三梃ならどこにでも隠せるじゃろ。それとも、この鉄砲なら……臭いを嗅いでみるか」

撃った直後なら、銃口が灼けて火薬の臭いが強い。が、一ト晩すぎてしまえば、特別に残っているはずはない。それに銃身を掃除してしまえば、痕跡は残らない。

「結構です」と、清次郎は相手の鋭鋒を避けて言った。「それよりも、藤蔵どのに案内して頂いて、宮本武蔵の墓に参りたく思いますが」

「武蔵の墓？」

と、十兵衛は妙な顔をしたが、

「ああそうか、ならば、そうさっしゃい」

それきり、けろりとして、母屋に立ち去った。

すでに藤蔵が土蔵の前に来ていた。

「案内仕る」

という。

清次郎としては、武蔵の死を確認すればもうこの村に用はない。鉄砲で三発も撃たれ、生命の危険に遭ったことなど、とやかくいってもはじまらない。他国へ来た以上、しかたのないことだった。それに、かれが来たのは、間道だった。いうなれば、細作と見られて撃ち殺されても、しかたのない立場だった。

「川向うでござる」

藤蔵は川岸へ出ると、指さして、小高い山の中腹を示した。

渡川に用いるのか、川舟が岸辺の杭にもやってある。船頭はいない。藤蔵が棹をとった。村人だけが日常に使っているのであろう。

藤蔵はあざやかに流れに棹さして、舟を操ると、広い川を渡った。

途中に墓地が見えたが、そこには立ち止らずに、ずんずん上っていく。

林の中に分け入って暫くゆくと、その切れたあたりに、平らな場所があり、「あれじゃ」と、藤蔵は言った。

いかにも新しい塚であった。こんもりと土盛りがしてあって、墓標はない。
「ここが……武蔵の？」
「左様」
「しかし……」
卒塔婆も何もないのだ。武蔵の塚という印は何もない。いや、誰の塚ということもわからないのだ。
清次郎は不審を抱いたまま、見まわした。
小高い山の中腹ではあるが、そこは山の窪地で、見晴しもよくない。杉林に囲まれた妙に仄暗く、陰気なところである。
むしろ疫病で死んだりした者の、投げ棄て場のようでもある。
（武蔵が、ここに……）
信じ難かった。
武蔵は尠くとも、この村では、英雄のはずであった。その男の墓が、こういうところとは納得いかない。墓標もないということがかれの不審を招いたのである。
その清次郎の表情を、藤蔵は凝っと見つめて、
「御不審かの」
と絡みつくような調子で言った。
「御不審とあらば」

「………」
「ここを掘りかえしてみるか」
そこまでする気はなかったのである。が、そう言われて、かえって、清次郎は、ふっとその気になった。
が、むろん、藤蔵の言葉の裏には、否定的な感情がふくまれている。墓を掘りかえすなどということは、たとえ、どんな場合でも許されぬ。
「もう一度、お訊ねする。ここが宮本武蔵の墓か」
「ああ、死体をな、埋めてある」
「――なぜ、墓標を立てなんだのだ」
「それは……実は、忌日だったゆえに……」
忌日があければ墓標を立てるという。その習慣は珍しいものではない。清次郎は反撥の言葉がなかった。

四

本来なら、この日、立ち去るべきであった。清次郎は、わざと、もう一泊することにした。かれがその申し出をすると、藤蔵は一寸けげんな顔をしたが、よろしいとも、主人もお喜びになろう、とまた判で捺したような返事をした。
たしかに、十兵衛は喜んだ。また見せつけられるからにほかならない。今度は、宵の口から、

あの行為をはじめている。それも、昨夜はまだ、多少、遠慮気味ではあったが、今夜は、もうはじめから、声を大きく、すべてが、筒抜けであった。

さすがに、清次郎はのぞきにゆけない。

昨夜は何事が起っているのか知らなかったからゆけたのだ。男女の秘戯とわかっていて覗きにゆくほど、清次郎は、卑しい心はない。むろん若者として、平静ではおれない。興味もある。が、それを圧えているのは矜持である。

しかし、若いし、充足したからだには、淫らな声は耐え難い。かれは転々と寝返りをうちながら、時の過ぎるのを待っていた。それは、かれらの行為の終るのを待つというよりは、家人たちが寝鎮まって、ある計画を実行できる時間の到来を待ったのだ。

「——もし……」

ふいに女の声がした。

板戸が開いたのも気がつかなかった。いつの間にか、女が入って来ていたのである。

「お淋しゅうございましょう」

闇の中で女の囁きが、熱く耳をうった。

そう囁きながら、女の手は、夜具の中に差し込まれていた。清次郎の下腹部へのびていたのである。そこには、熱くたけりたったものがある。清次郎の若さは、やはりそれ以上の禁欲は不可能だった。

かれはろくに顔も見ずに、女を引き込んだ。女の肌が奇妙に冷たいのが、気になったが、も

う情熱の炎は、その柔肌にぶつけるしか、冷ましようはなくなっている。

短い時間であった。すでに情感はのぼりつめていたのだ。短い間に、それは頂点へのぼりつめ、果てた。

その女が、あの峠でかれに悪態を浴びせた女であることに気がついたのは、板戸のところで、ふりかえって、狐のように笑ったときである。

「お前、思ったより弱いのねえ」

それは、女体が満足しなかったことの怨みなのか。それとも、期待が過剰だったあらわれか。

その女が、この家でどういう身分なのか、この家で何をしているのか、まるきりわからない。

もっとも、こういう村では、村全体が一家のようなものであろう。境田十兵衛のような旧家は地豪の裔であろうから、かれの威令は村人たちにゆきわたり、自由に動かせるのかもしれない。

旅人に一夜の宿を提供し、男には若い女の伽をつけるのも、山里では珍しいことではない。

それに、あの女の峠での行為を見ても、かなり淫奔なふうであった。こういう場合には都合のいい存在なのであろう。

だが、それが藤蔵か十兵衛の好意とうけとるには、不審が残ったのである。清次郎は、その行為のあと、じっと寝たふりをして、時の経つのを待った。やがて、あの淫らな声も絶え、深夜の静寂がこの家を包みこんだ。

それから、尚も暫くの間、気配を窺ってから清次郎は身を起している。

足音を盗んでまず、かれが行ったのは納屋であった。盗んだのは鍬である。

武蔵の塚を曝く。曝いて、見なければ、安心ならなかった。

下弦の月が照らしているのが幸いだった。かれは武蔵塚に至ると、躊躇なく、掘りはじめた。まだ出来たてだけに土は柔らかい。掘りすすむうちに、人体らしいものが見えてきた。

（武蔵か？……）

しかし、意外にも、死体は一つではなかった。もう一体あった。いや、それにとどまらない。さらにまた一体――

都合、三体が出てきたのだ。

どれが武蔵か？　清次郎は死体の顔の土を払った。病死と聞いている。が、三体とも斬死と見えた。傷口をあらためた。

あっと、驚きの声が洩れた。

「こいつらは……」

あの三人ではないか。峠でかれが斬った三人の死体なのだ。

（武蔵ではない！）

その驚愕に答えるように、ふいに背後で声がした。

「見たか、吉岡」

藤蔵が立っていた。

「愚かな奴め、それを武蔵が塚と信じて京へ帰れば、よかったものを」

「黙れ、よくもたばかったな」

「あたら若者を殺したくなかったからじゃ。それを見た以上、生きて帰れぬぞ」

「武蔵はどこだ、どこに隠れている」

「たわけが。われらもどこに在るか知らぬ。ただ、いまや宮本武蔵は作州にかかる兵法者ありとして、六十余州に遍く知られるようになっている。宮本村でも鼻が高い。うぬを仆せば、吉岡一門を根絶やしにしたことになろう。死ぬがよい、吉岡。幸いと、墓穴はある」

藤蔵はおのれの言葉に酔っていた。その長広舌の間に、清次郎が少しずつ、まわりこむように、月を背にしていたことに気がつかなかった。

仕掛けたのは清次郎である。脇差が左手で抜かれ、宙を奔った。藤蔵の背後に槍をかいこんであらわれた影に向って――

その影がくるすの十兵衛であることは、キラリと光った胸の十字架で判然したのである。鏘然たる金属音が藤蔵の頭上で起った。十兵衛の十文字槍が、あざやかにはね飛ばしたのだ。そのことは、清次郎の計算のうちに入っていた。藤蔵はその金属音と月光を掠めた脇差に一瞬、気を奪われた。

清次郎が躍りこんだのは、その一瞬の隙であった。さすがに藤蔵も抜刀はした。が、抜いただけであった。刃は清次郎のからだに触れる前に、遠心力を喪った。清次郎の抜き打ちの一刀が右腕を肩のつけねから斬り落していたのである。

重心を失って、くるっと一転した藤蔵のからだは、十兵衛の十文字槍にとって、邪魔になった。藤蔵はよもや若い清次郎に負けることはあるまい。悪くても互角。弱ったところを、悠々

ととどめを刺してやろう。そのくらいに多寡をくくって来た十兵衛であった。

「来い！　若造」

十文字槍を青眼につけて十兵衛はうそぶいた。その胸の十字架がぎらっと月光を反射した。強烈な光であった。清次郎ははじめて気がついた。十字架は裏返しにされていた。表は天主——きりしとおろ上人の磔刑の姿だが、裏は何もない。銀の延べ板である。月光を反射して、敵の眼を眩ませるために裏返してきたのは明らかだった。月を背にした清次郎は明らかに、不利な立場になった。

「えやーっ！」

かれのひるみに、十文字槍がおどる。たたっと、後退った清次郎は、片膝ついた。掘り起した土の上である。十兵衛は得たりや、と十文字槍をひきそばめて、次に一突き、とくりだそうとした。瞬間、湿った一握りの土が、ぱっと飛んだ。反射的に十兵衛は顔をそむけた。が、これは顔を狙ったのではない。撥止と、音を立てて胸の十字架に当った。

「うぬ、よくも！……」

それは偽らざる十兵衛の敗北の叫びだった。裏返した十字架を目くらましの武器としたことを見抜かれ、その力を泥で抹殺されたとき、くるすの十兵衛の武名も終りだった。

土を蹴ってはね起きた清次郎の一刀に、ふかぶかと、水月を刺し貫かれて、十兵衛は十文字槍をしっかと握りしめたまま、不浄の穴へ転落していった。

慶長御前試合

一

駿河の府中——駿府の町に吉岡清次郎重賢が足を踏み入れたのは、慶長十三年八月の末だった。

清次郎は駿府ははじめてである。むろん、話には聞いている。足利尊氏の子国氏にはじまる今川氏が十数代にわたって東海の覇者として君臨した拠点であり、いまや徳川家康の隠居所としての結構を備えてきている。

いうまでもなく、徳川幕府は江戸に開かれた。天正十八年以降、関東百万石を領有し、江戸城はしたがって徳川幕府の政治の中枢であった。三年前に秀忠に将軍職を譲ったものの、家康は政治から手を退いたわけではない。むしろ、秀忠はこの時期、傀儡にすぎない。真の政治家になったようなものだ。

家康は駿府の城を、

「隠居所」

と、呼んだ。

駿府城の改築に熱を入れて見せた。派手なことのきらいな、質実剛健をむねとする家康が、城を華麗に造りたてることは、いかにも、隠居したというポーズである。

安倍川を西から東へ渡ると、すぐに城下になる。はじめての町すじを珍しげに見ながら歩いていると、

「ちょっと、お若いひと、お待ちなさんせ」

「若いお武家さん、寄ってお出でな」

両側から、黄いろい声が、呼び止めた。

いつの間にか、色街へ入っていたらしい。

「ねえ、寄ってお出でなさいまし、旅のお疲れがござんしょうに」

「一ト晩、泊ってゆけば、旅疲れなんか、治ってしまいますよ」

「足を揉んで差し上げましょ、ねえ、お武家さま」

清次郎は疲れを感じていなかった。かれの若さは、目的の前には、疲れを感じさせなかった。

「ねえ、足が痛んでいないのなら、もっとほかのところを揉んであげますよ。あたし、そりゃア上手なのだから」

「ほかのところ、か」

清次郎はにやりとした。

「そなたの手なら、悪くはあるまいが」

「骨がとろけるほど可愛がってあげますよ」

「そいつは嬉しいが、いまは遠慮しよう、骨がとろけては、大事が果せぬ」

歩きだそうとして、ふと気がついて、清次郎は、この色街を見まわした。

「ほかには宿(やど)りをするところはないのか」

「ないこともないけど……でも、旅の御方は、たいてい、この町にお泊りになりますよ。よっぽどの女ぎらいでなかったら」

家康の御機嫌うかがいの大名や使者などは城中か、寺院などに泊る。当時、旅人といえば殆どが男だから、色街はそのまま旅館街ということになる。

この安倍川町の女郎屋は、家の造作が新しかった。家康は積極的に城下町の整備を考えていたのであろう。先に女歌舞伎や、辻君のたぐいを城下から追放した家康だったが、それらの女たちをまとめて定着させたのが安倍川町で、これはのちの二丁町の前身だった。

「旅人は、たいてい、ここへ泊るのだな」

「ええ」

「宮本武蔵という名前を聞かなかったか」

「宮本？」

「当家ではないにしても、どこかへ泊ったはずなのだが」

女は首をかしげている。思いだせない様子だった。

「牢人者で、目つきのけわしい奴だ。左様、年ごろは、三十路(みそじ)がほどに見えるか」

「さあ、それだけでは」

「知らぬか」

来ているはずだった。宮本武蔵の風貌は一度見たら忘れない。それが気がつかないということは、この街すじには、足を踏み入れなかったのだろうか。

清次郎が聞いた噂はこういうものだった。

大御所家康が、駿府城の天守が上棟した祝いに、兵法者を集めて御前試合を行うというのである。去年から手をつけていた城の改築は、この春にまず殿舎が造られた。そしてこの八月に入って、七層の天守閣が完成した。

清次郎も鞠子(まりこ)のあたりまで来たとき、その天守閣の屋上にきらきら西陽を受けて光る金のしゃちほこに目を奪われたものだ。むろん中味は青銅か赤銅であろうが、秋空に映える金しゃちは、いかにも、前将軍にして大御所たる家康の権威を象徴するものだった。

この噂を伝え聞いて続々と、兵法者たちが駿府へ集って来たという。

時は慶長十三年である。豊太閤秀吉が薨(こう)じたのが十年前、天下分け目といわれる関ケ原の戦いが八年前。いうまでもなく、東軍の大勝利で、西軍に属した者は何らかの処分を喰っている。改易、減封、などのあおりで、浪人が増えていた。

武士というものは、だいたい、ほかのことは何もできない。端的に表現するなら、人殺ししか出来ないのだ。

腕前を認められるところは戦場であり、戦争がなければ、試合でもやるしかない。

家康の面前での〝兵法試合〟となれば、出世のチャンスにちがいない。腕自慢の者、あるいは僥倖(ぎょうこう)を狙う者たちも、続々と集ってきた——。

その中に、宮本武蔵、という名を聞いたのである。

吉岡清次郎は、

(しめた　今度は逃さぬ！)

勇躍して、夜を日についで、駿府へやって来たのである。

宮本武蔵と私的な果し合いをするよりは、駿府城での御前試合のほうが、世間の話題になる。

かれが武蔵の行方を追っているのは、ただ討てばいいという類いのものではなかった。

討ち果すことで、〝京流〟の名声と、〝吉岡一門〟の名誉を甦らせることである。

そのためには、もっとも多くの視聴を集めるであろう御前試合の方が理想的だった。

そして、この試合で勝つことは、また清次郎にとっても、徳川幕府への仕官の糸口となることではあったが、そしてそれは、かつて室町将軍家御用所であった吉岡としても、充分に魅力的であったが、尠(すく)なくとも、いまの清次郎としては、そのことは問題外であった。

すでに放浪四年——清次郎は武蔵を討たねば、京へ戻れないのだ。

「——武蔵という男のことを知らないにしても、城中での御前試合の噂は聞いているだろう」

「ええ、そのことでしたら」

女はこっくりと頷いて、

「うちの男衆なんかも、その噂で持ち切りですよ。できれば、のぞいてみたいなんて。でも、お城の中じゃ、とても、妖術つかいにでもならなきゃアね、入れやしませんもの」

「妖術つかいか……」

かれは笑った。ところが、かれは試合日のことを間違って聞いていた。試合は九月十日だと思っていたのだが、明日だということであった。

九月朔日なのである。そして試合に出る兵法者はすでに決っているという。

「――せっかくだが、諦めることだな」

城門を守る足軽が顎をしゃくった。さっさと帰ることだ、と傍の朋輩と嗤(わら)いあった。

「そうか、もはや人数の端に加えてもらえぬか。ならば諦めよう。だが、一つ聞きたいことがある。兵法者の中に、宮本武蔵なる男がいるか」

「宮本？」と二人は顔を見合わして、

「いたようだな、うむ、おぼえている。宮本たけぞう、とわしが読むと、いやむさしだ、と吐(ぬ)かしおった」

「そやつだ」

「知っているのか」

「うむ。ところで、如何(いかが)であろう、その試合を、ちょっと幕外からでも、のぞかしてもらえぬか」

とたんに、また足軽らは冷たい顔になった。

「馬鹿なことを申すな。うぬら浪人者が御城内へ入れると思うのか。とっとと去(い)ね」

二人は犬でも追うように、棒の石突(いしづき)でとんと土を打った。

二

清次郎が城内に忍び入ったのは、小半刻のちである。天守閣が出来たばかりで、まだ後片付が済んではいなかった。搦手(からめて)のほうに石材や丸太や土運びの道具などが乱雑に山積みされている。人足たちが出入りしていて、見張りの足軽も少い。

清次郎はその混雑にまぎれて入りこんだ。平気な顔をしていれば見咎(とが)められない。まさか城内に入りこんでくるやつがいようとは、考えられないことだった。

すでに乱世ではない。徳川幕府はすでに二代目なのである。

試合ははじまっていた。

先に完成した殿舎の御庭に幔幕(まんまく)が張りめぐらされている。紫の幕で、大きく三ツ葉葵の紋が染め抜いてある。その幔幕の前に家臣が居流れ、兵法者たちは一人ずつ左右から出て来て打ち合うのだ。

むろん幔幕の外には見張りが要所に立っている。清次郎は築山をまわって、灌木の蔭に身を沈めた。幔幕の合わせ目から中をのぞいた。

正面の座敷に家康らしい男が坐り、女や小姓などが左右に控えているのが見えた。

丁度、槍の試合が行われていた。槍の先には丸いタンポがついている。穂先を抜いて、タン

ポを仕込んだのは、試合で傷つかない用心だった。

（なんだ、あれでは子供の試合ではないか）

清次郎は内心呆れた。

まともな試合では、真槍をつかう。時には刃引きをするくらいだ。刀の場合も刃引きの本身か、木刀を用いるのが普通だ。したがって、打ち所が悪いと、死ぬことさえ珍しくはない。この場合、大御所の面前ということで、奉行が、配慮したのであろう。

タンポ槍や竹刀では、真剣の腕前が充分に発揮されないのはいうまでもないが、祝事であり、血を見るようなことがあれば縁起が悪いとされたのであろう。

かっと、タンポ槍が音を立てた。次の瞬間、一方がふっ飛ぶように、のけぞり倒れるのが見えた。

見物の将士がどよめいた。本来、清次郎も、こうした試合を見るのは嫌いではない。が、いまは、武蔵のことだけが、頭を占めている。

（奴は、いつ出るのか？）

いつまでも、ここにいるわけにはいかない。やがて見廻りがくるはずだった。

幸運にも、武蔵があらわれたのは、その次だった。

審判役の者が、かれの名前を高々と読み上げる前に、清次郎は、武蔵の姿を見出していた。

紅白に分けられた、紅のたまりから出てきたのが、武蔵であった。

群を抜いて、ひときわ背が高く、猛々しい容貌であり、蓬髪のままだった。その姿も、日に

曝され、垢じみた小袖と、破れさえ見える伊賀袴で、素足であった。

宿無しの野良犬の姿といえる。が、傲然たる面がまえと、爛々と光る双眸はあまたの侮蔑の視線を浴びながら、毫もひるまず、逆に、睨みつけるように試合場を見わたした。

かれは、手渡された茜染の鉢巻をしめた。

相手は白い鉢巻である。紅白の対峙の印であった。

「剣崎一竜斎良元！」

と、読み上げられた。

清次郎もその名は耳にしている。越前では聞えた使い手であった。むろん、その顔ははじめて見るものだったが、五十がらみのいかつい顔に、ななめに生々しい刀傷が、目立った。左の眼の上から、鼻柱を割き、右の頬にザクリと入っている。

左の眼は睡げに半ばふさがれているが、はたして見えるものかどうか。肩幅あくまでも広く、胸板は岩をたたんだような厚みだった。

宮本武蔵が山犬とするなら、一竜斎は猛虎という感じだった。

武蔵は竹刀に大きく素振りをくれた。竹刀はさながら苧殻のように、ひゅっひゅっひゅっと、撓った。

因みに竹刀をしないと呼ぶのは、撓えるという形容から来ている。

その一振り一振りが、幕の隙間から見ている清次郎には、兄や従弟を打ち殺したときの刀づかいに見えた。

（くそ！　武蔵め）

思わず清次郎は、刀の柄に手をかけた。

飛び出していって、剣崎の代りに立ち合いたいと思った。

武蔵と一竜斎は左右に別れて対峙した。間合九尺。ぴたりと竹刀をつけあった。と、同時に期せずして二人の口から、激しい気合が奔った。

一竜斎がつつーっと出ようとした。その分だけ、武蔵が退いた。あと一歩出たら、武蔵の竹刀が一竜斎の面上に落ちたろう。が、一竜斎は止った。竹刀の微妙な動きから察したのだ。武蔵の竹刀が、さっと上った。やーっと、肺腑から絞りだすような声に惹かれて一竜斎の竹刀が胴を狙うと見えた。

武蔵が一跳すると見せて、さっと振りかえった。

刹那、左手が動いた。清次郎は見た。何やら、光るものがかれのほうへ飛んできたのを。

その光るものが手裡剣だと知ったとき、かっと竹刀が音を立てた。一竜斎は武蔵のその一瞬の動きを見逃さなかった。隙であった。

武蔵は片手のまま、身をさらして、受けた。一竜斎は剛力でもって、双手で握った竹刀を思いきり叩きつけてきたのである。武蔵の手から竹刀が離れて、宙にはねるのが見えた。

それを見たのをさいごに清次郎は身を翻して、灌木の蔭を縫うようにして走りだしている。

（あいつ、気がついていたのだ）

手裡剣は、幕串に突き刺さっている。一寸の差で、清次郎の眼をつぶすところだったのだ。

（どうして見つかったのか？）

武蔵も御前試合だけに緊張していたはずだ。

どうして清次郎に気がついたのか。幕と幕の合わせ目の、幕串の立っているところ、僅かの隙間からのぞいていたのである。距離にしてもおよそ十間。試合に臨んでいながら、よく気がついたものだ。

殺気！

武蔵は敏く感じたのであろう。

一竜斎には殺気がなかった。あくまでも竹刀を以てする御前試合という意識だ。

それだけに、清次郎の殺気が、武蔵の第六感に反応したのではないか。

清次郎は走った。背後で騒ぎが起り、何人かが、かれの姿を見たようだったが、物蔭から物蔭へと身を転じて、またあの搦手の材料置場のところへ出ることができた。

完全に整備された城内だったら、かれがまぎれこむことも、また脱出することもできなかったろう。

それにしても、

（あの武蔵が負けた……）

たとえ、こちらに気をとられていた隙を衝かれたとはいえ、〝負けた〟のは事実なのである。

驕慢な武蔵の心中を思うと、愉快だった。ざまァみろ、と言いたい。だが、それだけでは事は済まないのだ。

負けたとなると、武蔵は一日たりとも、この駿府にとどまりたくはあるまい。かれの性質から見ても、当然、府中から出るはずであった。

(どちらにゆくか?)

西か東か。

この、のちの静岡市の地形から見ても、北は山に囲まれ、南は大洋に面し、東するか西するかしかない。

一方だけなら、待ち伏せしていればいい。西へ行くのなら、待ち伏せは容易であった。九分九厘、宇津谷峠を通る。が、東となると、必ずしも確実ではなかった。だいたい狐ヶ崎のあたりならば、八分通り、相逢うことはできる。こうしたことは、あの女――お万阿(まあ)と名乗る女や土地の古老たちから聞いた知識であった。

一人きりの清次郎は両方を圧えることは出来ぬ。どちらに奔るか、わからない。

そのためにも、武蔵の宿所を突きとめ、様子を窺うのが先だった。

清次郎はお万阿に頼んだ。

「宮本武蔵というやつの宿をさぐれぬか」

「ええ……この安倍川町だけでしたら、わかるかもしれませんけど」

ところが、武蔵の居所がわからないうちに剣崎一竜斎の宿のほうが先に判明したのである。

〈玉藻屋〉という見世(みせ)だった。

その話を聞いたとき、清次郎の頭に、ふとある考えが閃いた。

(武蔵はムザとは去るまい……)

と、いうことだった。

武蔵の性質の猛々しさ、名誉心からの発想である。

(彼奴は、一竜斎を許すまい……)

一竜斎の生存を許す武蔵ではない。御前試合に敗れたことは生涯、武蔵の負目(おいめ)になる。是が非でも、もう一度、試合を望むはずだった。

かれはそう思い立つと、すぐに〈玉藻屋〉に向った。

すでに日が暮れている。宵の賑わいが去ったあとであった。燈油が貴重な時代だけに、夜は早いのだ。昼遊びということが、現代人が思うほど不自然ではなかった。旅人が宿へ草鞋(わらじ)を脱ぐのも暮れる前の四時ごろが普通で、そのため、朝は早立ちをする。暮六つ――六時といえば、木戸の閉る時刻で、その以後の往来は不自然とされていた。また、当時は月の明るい夜でもなければ、松明(たいまつ)か提灯(ちょうちん)なしでは歩けるものではなかった。

清次郎が〈玉藻屋〉に行ったときは、すでに大戸がおりるところだった。

「おや、いまごろかえ」

と、眠そうな顔をした中年の女がいった。

「もう、いっぱいですよ。青楼(うち)は器量よしが揃っているからね。よそへあたって見さんせ」

「いや……泊りに来たのではない。この家に剣崎という兵法者が来ているはずだ。夜分ではあるが、要用があってまいった」

三

その四半刻ほど後である。〈玉藻屋〉の裏口から忍び出た者がある。月の無い夜で、星明りだけだった。

その男は、あたりの気配をうかがい、急ぎ足に歩きだそうとした。左手には提灯をさげているが、火は入っていない。まだ警戒を解いてはいないのであろう。

街角まで、来たとき、ふっと、その前に影が立った。思わず、刀の柄に手をかけて退る。

「――卒爾ながら」

と、声をかけてきた。

「剣崎どのか」

「……」

「剣崎一竜斎どのか」

言葉は穏やかだったが、時が時である。返事の代りに抜き打ちの白刃を走らせている。

「あ――何をする！」

声をかけた男は仰天して飛びのいた。尚も無言で白刃が迫る。激しい斬込みの度に、夜気がひゅッひゅッと哭いた。

「よせ、おれは」

刃をさけながら、かれは害意がないことを叫んだが、すでに相手は昂奮している。

「死ね！　こやつ」

「ま、待て、おれは、京の兵法所……」

清次郎は名乗ろうとした。が、聞き入れる様子はなかった。

「くそ！　聞きわけのない」

相手の太刀さばきが、鈍いものだったら、それでも清次郎は抜き合わせはしなかったろう。あしらうにはあまりにも激しく、殺気に満ちていた。

清次郎は抜いた。闇の中に火花が散った。折れるかと思われるばかり烈しい衝撃で手が痺れた。

剛の剣である。その男が剣崎一竜斎でないことは、刃交ぜの間にわかった。似ていた。が、別人だった。しかしもう騎虎の勢いだ。すでに二人をとらえた熱気は、あともどり出来ないところへ来ていた。

清次郎にちらりと悔いが掠めたのは、その男の脾腹を深々と割いたときである。

「――馬鹿なやつだ……」

歎息とともに、かれは呟いた。

「斬るつもりはなかったのに」

致命傷であることは、手ごたえでわかっている。夥しい血の流れは、かれの足を濡らしてくることでわかった。

「む……む……」

もがいている。呻きにも断末魔の苦しみがあらわだった。
「む、武蔵の……」
「?……」
清次郎は、耳を疑った。
「なに、何と言った?」
「む……む……むさし……?」
「武蔵? 武蔵がどうしたと?」
「……」
「おい、しっかりしろ、武蔵がどうしたというのだ」
「むさしの、一味か?」
最後の気力をふるいおこしたように、その男は、清次郎の腕をつかんだ。
「ひ、卑怯な……武蔵に頼まれて、来たのだな……」
「何という?……」
「ひ、卑怯な、武蔵……」
それが最期の言葉だった。
「おい、お前は……お前の名は?」
その問いには、もう答える力はなかった。がっくりと重く、その男は崩れて、それきり動かなくなった。

(そうか……こやつ、おれを武蔵の廻し者と思ったのか)
だから斬りかかったのだろう。意外だった。ひたすらに武蔵を追う清次郎には思いがけなかった。かれは剣崎とは一面識もないし、恩讐はない。あるいは武蔵の居所を知っているのではないかと思い、訪ねて来たにすぎない。
あの女は、剣崎一竜斎が、ひそかに裏口から脱け出ることを教えてくれたのだ。剣崎が武蔵をこれほど恐れているとは思わなかった。
晴れの御前試合では、ともかく勝ったのだ。あの勝利が、たとえけが勝ちだとしても、兵法者たるもの、自信がついたはずだった。にも関らず、武蔵の復讐を怖れているのは、解せないことだ。
(この男は、剣崎の何だろう?)
兄弟だろうか、暗くて容貌は定かではないが、感じとしては似ている。
清次郎は〈玉藻屋〉の裏口から声をかけた。
出て来た男衆に仔細を話した。
「私には何の怨みもない。が、斬りかかられたので、斬った。それだけだ」
兵法者として、当然の行為だ。清次郎は悪びれなかった。このことを一竜斎が怨みに思うなら、またそれも仕方のないことなのである。
「なに、又兵衛が!」
男衆に呼ばれて出て来た男が、驚きの叫びをあげた。

「きさま……」

「やるか」

冷静に清次郎は応対している。

「身内の者か？　私は挑まれたら、後へは退かぬ。外へ出ようか」

「おう！」

鐺をはねて出ようとした男のうしろから、また別の者が顔を出した。

「やめろ、古市」

「止めるな、左次馬、こやつは又兵衛を殺ったというぞ」

「誤解のようだ。ともかく、死体を引取りにゆかねばなるまい」

左次馬と呼ばれたのは、中年の男だった。この男もすでに旅仕度をしていた。

一竜斎は一族五人と郎党を連れて来ていたことがわかったのは、かれらの部屋に通されてからである。いずれも屈強の男たちで、腕に自信がありそうな面構えだった。清次郎に斬られたのは、矢沢孫六といい、一竜斎の実の弟で、他家を継いでいたという。

一竜斎が試合に勝って幕府に仕官する。その伝手で、かれらも、生活の安定を得ようという算段であったろう。その望みが、一竜斎に従ってぞろぞろとやって来させたのであろう。

矢沢の死体を前にして、かれらは沈鬱な表情だった。

清次郎は悪びれることなく、身の素姓と目的を述べ件のいきさつをくりかえした。

「――止むを得ない仕儀であった。このことに偽りはない。もし、仇討なされたいとならば立

ち合うのに吝かではない」

清次郎の言葉には掛け引きがなかった。真摯な態度と、その言葉に呑まれたように膝を起す者はなかった。あの古市某も、戦意を喪っている。

「――わかった」と、重く一竜斎は頷いた。

「おぬしが武蔵を仇として狙うのと、われらの余計な慮りが、かような結果を惹き起したのは、お互いに不運であった」

「了見下さるか」

「わしも兵法者じゃ。わからいでか」

「忝ない……」

一竜斎は、あの試合のことに触れたくはなかったようだ。あの試合が、けが勝ちだということは、むろん知らないはずはない。そして清次郎の言葉によって、手裡剣を打たれたのが、かれであることも、推測できたはずである。

それにしても、一竜斎はじめ一族の者たちが、武蔵の報復を恐れているのは、異様なほどであった。

あるいは、嘗て、武蔵の凄剣に接したかその評判を聞いていたのかもしれない。

矢沢孫六を先行させたのも、安全をたしかめるためであったろう。矢沢の異常な緊張と恐怖が、ああした結果を生んだことから見ても、それらのことが頷けるのである。

「弔いもせねばならぬし、出立は一日延ばそう」

と、一竜斎はみんなの顔を見まわして言った。

「吉岡どのも、御多用でなければ、野辺送りに顔を出して頂けまいか」

そう言われると断れなかった。止むを得ないことではあったが、矢沢を死に至らしめたのは、事実なのである。清次郎の腕がもっとすぐれていたなら、死なせずに、あしらうことも出来たろう。

「よろしいとも、葬列の端に加えて頂こう」

「忝ない。矢沢もそれで浮かばれる。われらは今宵、通夜をせねばならぬが、吉岡どのは御遠慮なく、お寝み下され」

「しかし、それは」

「いやいや、御斟酌は無用。この家には、なかなかの美形もいる。厄落しと思うて、ゆるりとなさるがよい。失礼だが、費用はわれらが持ちましょう」

あとから考えてみると、そこまで慮ってくれるのは、些か異常である。若い清次郎は、一竜斎の喜びがそれだけ深いのだと、単純に解釈した。

奨めにしたがって、清次郎はこの〈玉藻屋〉に泊ることにしたが、むろん、女を抱く気にはなれない。若いからだは、眠りに落ちるのが早かった。

翌朝——

眼が醒めたのは陽が高くなってからであった。

「しまった、野辺送りは何刻だったろう」

遅れたかと思った。顔を洗いに降りるとき女中に聞くと、皆様御出立になりました、という。それもまだ暗い、七ツ（四時）発足だったという。

「なんと！　左様なことが……野辺送りはどうなったのだ、死体は、死体は置き去りか」

「ホトケさまは、お寺から男衆が来て、持って行きましたよ」

ちゃんと棺桶に納めていったという。清次郎は呆然となった。夢を見ているようだった。一竜斎に瞞されたのだと気がついたのは、暫く経ってからだった。

四

「——京の吉岡の話は聞いているな」

「うむ、あの男の申す通りじゃ、たしかに吉岡一門、宮本武蔵に打ち破られたとか聞いた」

「左様……したが、あの男が吉岡の倅という証拠はない」

「それはわからぬ。疑うならば、そこまで突きつめればよかったものを」

「いや、よしんば、吉岡の一族としても、だ。武蔵を仇と狙っているかどうか。家父憲法はじめ、一門悉く仆れたとなれば、あの小倅は、武蔵に尻尾を振って手先になったとも考えられるではないか」

暗い安倍川を渡りながらの会話であった。一竜斎は清次郎にまだ疑いを残していたのである。疑いがある以上、避けた方が賢明だと考えたのであろう。矢沢孫六は清次郎に斬られたのだ。安倍川を渡って、街道を西へ——間もなく鞠子の宿に入る。のちには、ここはとろろ汁が名

物になったところだ。この時代の東海道は、他に比べて整っているほうだが、それでも後世の様相とは随分違う。宿場といっても、殆ど農家など兼業で、土地の豪農などが多かった。東海道をはじめ、五街道が整って来たのは、のちに大名の参勤交代が制度化されてからの、必然的な現象である。

その鞠子の宿を過ぎたあたりで、朝日が出てきた。行手の宇津谷峠が爽やかに浮き上った。

宇津谷峠は、薩埵峠と並んで、東海道の難所の一つだ。もっとも、箱根などとは比べものにならないが、女子供など足弱には、その急坂は楽ではない。現代でも車ではのぼれない。

「峠で飯にするか」

と、一竜斎は古市たちを振りかえって微笑した。かれは、故郷へもどって、御前試合で勝ったことを、世間に吹聴したいと思っていた。勝ったことで、引出物も賜わっている。時服ひとかさねである。

五人抜きでもすれば、仕官がかなえられたかもしれないが、一人に勝っただけで、それも明らかに武蔵がわき見した一瞬を衝いての勝ちにすぎないのだから、高く評価されなかったのはしかたがない。

しかし、故郷に帰れば、試合の詳細などわからない。勝ったという事実だけである。

兵法者の間では、〝京の名門吉岡憲法一門を仆した宮本武蔵〟の名は知れわたっている。

その宮本に勝ったのだ。評判は高くなるだろう。どこぞの大名から仕官の話もくるであろう。

加判衆たる本多正信から、

「この上とも、せっかく精進するがよい、いずれ沙汰があるやもしれぬ」

と、直々に含みのある言葉もかけられている。こうした言葉は、政治家の巧妙さで、何とでもとれる。期待させておいて、責任は免れる。

一竜斎は、それを、〝仕官の可能性〟と解釈した。希望的観測である。

昼近いころ一行は宇津谷峠にかかった。そのころから雲行きが怪しくなって、風に雨気がまじってきた。平地と違って山路だから、雲のたたずまいも変って見えるのか、などと笑いながら話していたのだが、視野を昏くして雨粒が落ちてくると、あわてて木の下へ駆けこんだ。

「こりゃアひどい。この分では晴れそうにもないぞ」

「いや、夕立ちであろう。だが、どこぞ、雨宿りするところはあるまいか」

宿の茶屋なども、当時はない。一行は樹の下で首をすくめた。急激な変り方だったから簑笠も用意していないのである。

あたりは巨杉が聳え、破れ堂がぽつんとあるだけだった。

往古から、こうした峠には、一人旅の者を狙う山賊などが出てくる。天下の将軍秀忠の父たる前将軍にして大御所たる家康の居城が近いとはいえ、やはり安倍川を越せば、治安は不安定だ。まだ慶長も中葉なのである。

剣崎の一行は、郎党までいれて六人。兵法者の一行だから、山賊などの恐れは感じてはいない。

「あの吉岡清次郎とやら、いまごろ、どうしていますかの」

田口某が、思いだしたように言った。
「玉藻屋で、ぽかんと空を見ているであろう。府中も雨だろうからな」
「女を抱いているかもしれませぬぞ、昨夜はあのように振舞うていたが」
「ははは、何しろ若いゆえにな、そうかもしれぬ……」
「よせ」と、古市がたしなめた。「うっかり左様な噂をしていると、追い駈けてくるかもしれぬ、あやつ、尋常の者ではない」
「うむ、かなりの腕だ。矢沢の傷口を見たか。一刀であれだけの深さに達するとは……」
「おい、来たぞ！」
一人がはっとしたように言った。
戯れにおどかしたように聞えた。が、ぎくっとして振り返った眼に、たしかに、人影が見えたのである。
その人影は、破れ堂の中に休んでいたらしい。傾いた狐格子から姿をあらわすと、雨の中へゆっくりと出てきた。
激しい雨は白昼なのに視界を閉している。さらでだに杉林である。さながら宵闇に蔽われたような昏さであった。
その影は、ゆっくりと近づいてくる。肩幅あくまでも広く、身の丈六尺に垂んとする巨軀であった。
一竜斎たちは、思わず息を呑んで、その影を見守っていた。一竜斎は、そのからだつきに見

おぼえがあるような気がした。判然としていることは、
(吉岡清次郎ではない！)
ということだった。
その男の影にむかって、一竜斎は言葉を浴びせようとしながら、声にならないもどかしさで、がたがた顫えた。
「み……み……宮本……」
やっと、かすれたような声が出た。
「そうだ」
自信に満ちた張りのある声が答えた。
「宮本武蔵！」
そのおのれの名に、誇りを持った男の声音であった。その名のために、かれは、この宇津谷峠の破れ堂で待っていたのである。
「あっ!?」
と、一行は、驚愕と恐怖の混った声をあげた。
「剣崎なにがしやら、御前試合のやり直しをはじめようぞ」
「む、武蔵……なんとて、かような」
「雨中では相手が出来ぬと申すのか」
武蔵の語尾は笑いに変ったようであった。

それが一族の者たちには嘲弄するかに聞えた。

「だまれ、武蔵」

だっと、突きかけて来た者がいる。

槍には鞘をしたままだった。

鞘をとる閑(ひま)もなくあわてて、突きかけたのだ。

武蔵は、これを殆ど大した動きもなく斬っている。つと、上体を僅かにそらしただけで流れる槍を片手づかみにして、一颯した。

雨の中に血がぱっと舞い上った。

その血を見るや一竜斎以外の者は、完全に理性を失ってどっと喚きながら斬りかかった。

武蔵はその瞬間に跳んでいた。跳びながらの血刀はさらに血を吹きあげた。下から掬い斬りながら跳んだのだ。三人目は、頭上からの拝み打ちに崩れ、四人目は、すぱっと小気味よいほどの一閃で片腕が落ちるのが見えた。その男は倒れる前にさらに胸を貫かれている。

一竜斎が刀を抜いたのは、一族郎党たちが雨の中に折り重なるようにして倒れてからである。かれは巨杉を小楯にとって抜刀したが、それは絶望的なものであった。そして、兵法者にもあるまじき救いをもとめた双眸は、荒々しい猛禽(もうきん)の鋭い眼力に圧(お)されて、弱々しく伏せられた。宮本武蔵でなかったら、あるいは、片腕を失う程度で、宥(ゆる)してくれたかもしれない。

雨の中の絶叫を、急いで後を追って来た吉岡清次郎は聞いたような気がした。

かれが駈けつけて来たとき、しかし、すでに、武蔵の姿はなく、雨に打たれて、剣崎一族の死体が横たわっていただけである。そして、一竜斎の首は胴から切断された上に、西瓜でも割るように、頭頂から真っ二つにされていたのであった。

剣の舞

一

清次郎は眠っていた。夢を見ていた。

かれは花園にいた。そこがどこかわからない。ただ、むやみと明るく、さんさんと陽が照っていて、赤い花や、黄いろい花や、青や緑や白や桃色や——色とりどりの花が咲きみだれている中で、かれはぼんやりと横たわっているのだった。

(どこだろう？　ここは……)

眠っているという自覚はなかった。

しかし、からだがなんとなくけだるく身を起すのが、億劫だった。

その、あざやかな色彩は、ゆらゆらと動き、明滅するように、あるいは翻りあるいはうすれるかと思うと、またあざやかに甦る。

まるで、かれは蝶になって、その花園を自在に翔んでいるようであった——。

その花々が、ひらひら動く女の小袖であることを、清次郎は知った。

眼が醒めていた。かれの靄がかかったような視野に、女たちが、舞っているのが見えた。

そこは河原であった。

このあたりでは、大川と呼ばれていたが、隅田川の河口に近く、おそろしく広い葦原だった。ところどころ沼地になっていて、水が葦の間に光っている。清次郎は乾飯を食べているうちに、ぽかぽかした陽気に誘われて眠りこんでいたのだった。

(あの女たちは？……)

女ばかり、という感じだった。

それも若い女たち。派手小袖がそう見せているのだろうか。

小太鼓がのびやかに鳴り、笛の音が爽やかに流れてくる。

その音楽に合わせて、女たちは舞っているのである。

無理に手の舞い、足の踏みかたを揃えようというのではなく、きわめて、のびやかに、自然に舞っている。

音楽についつられて、からだが浮き上り、手が動き、という感じなのだ。

女たちは、笑っている。さんざめいている。歌を口誦さんでいるものもいるし、何やら、はしゃいだ口調で、けらけら笑っている。

清次郎がここへ来たときは、誰もいなかった。葦原からなだらかに丘が盛り上った草むらで、白い蝶がひとり我物顔に舞っていた。浅春の柔らかい陽ざしの中に、まるで、まぼろしのようだ。女たちはその蝶の化身かのように見えた。

ここは江戸だった。

徳川家康が幕府を開いてから、やっと五年。急造の街の整備もできていないし、お城の前の常盤橋から数町離れると、もう櫛の歯が抜けたように、空地が目立ち、丈なす草むらや林があり、窪地の水たまりには、猫の死骸が浮いていたりした。

そんな殺風景な土地だけに、女の数が、極端に少かった。

男ばかりといっていいほど、江戸は埃っぽかった。女性といえば、町人の女房か遊び女くらいのもの。参勤交代が制度化されていない時代だから、武家の女は、徳川家の家臣の妻子にかぎられたのである。

したがって、女たち――それも、若く、綺麗な女たちが十数人も群れているというだけでも珍しい。

さらにその女たちが、いずれも派手衣裳であることは、さらに、眼を醒まさせるのに充分であった。

（何者だろう）

その疑問はすぐに解けた。

女ばかりと見えたが、男が二人いた。そのうちのおどけていた一人が、ひょいと旗を掲げたのである。大きな旗差物だ。白地に朱で、出雲阿国一座と大書してある。

（かぶき女たちだ！）

近ごろ流行の踊りの一座だった。

清次郎は京の河原で見たことがある。評判だった。出雲大社の巫女だったとかいう、阿国という女が、勧進踊りやややこ踊りなどを河原で披露して、京雀の評判になったものだ。

もの固い吉岡の家では、

「卑猥な舞女どもが、男をたぶらかしよって」

と、蔑みで否定していた。だから、清次郎はこっそりと群集の中にもぐりこんで見たのである。

たしかに淫らなものだった。念仏踊りといって、墨染の衣を着、数珠を胸に下げ、笠をかむり、撞木をもって鉦をうちながら、唱名を誦し、ゆるやかに舞っているかと思えば、さながら、憑かれたごとくに、その衣の前をはだけ、豊かな乳房をあらわにし、笠をなげ捨て黒髪を背に波うたせて、狂い舞うのだ。

みほとけにすがる信心深い女から、一変して、男に恋がれる淫猥な女と変じる――その変り映えの面白さ、女の業の深さを、白い肌にうねらせて狂い舞うすがたに、客は熱狂した。

男も女も、吸いよせられた。男は女の、むきだしの姿に心を昂ぶらせ、女たちは、おのれのおぞましい淫靡な姿を見せつけられて、奇妙な感動をおぼえるのだ。

（あの阿国の一座が……）

この江戸に下ってきたのか。

思いがけないことだったので、驚きは尠くなかった。

清次郎は鞍馬山に武蔵をもとめて以来、京へは戻っていない。すでに、四年の歳月が流れて

いる。

　武蔵が江戸へ向ったという噂を聞いたのは、小田原でのことだった。その噂も確実なものではなかったが、だが、清次郎としては、たとえ僅かの手がかりでも無視出来ない。

「おや、あのお方は……」

　女の一人が、目ざとく、清次郎を見つけた。

　ほかの女たちも、そんな近くに若い男――それも武士が見ているとは知らなかったようだ。

　嬌声をあげて、舞いをやめた。殊に若い十四、五の娘たちは、恐ろしいものでも見たように、数人ずつ固まってしまった。

「や、これは、悪いことをしたようだな……許せ。悪気があってのことではないのだ」

　清次郎は、ほうり出していた兵粮包みを肩にかけると、袴の泥を払って歩きだそうとした。

「おっと、待ってんか」

　旗を担いでいた男が、急に呼び止めた。

　その男は、飛ぶように走ってきた。旗をおっ立てたままなのである。敏捷だった。

「やい、待たんかい」

「ほう、おれに、用か？」

「当り前やねん、用があるさかいに、呼んだんや」

　その男は口をとがらした。猿に似ている、と思った。子供のように背が低く、肩幅はあるが顔が大きくて、赧い。額に皺が多く、きょときょとした奥眼である。

「何の用だ、わしは、おぬしを……」

知らぬ、と言おうとして、そうだあのとき、見たようだと思いかえした。

河原で、ちょろちょろと、猿のように動いていた。いや、猿になりすましていた。

猿若、と呼ばれていたことを思いだした。道化なのである。

猿若は、ちろりと上眼づかいに見た。

「そこで、何してたんやね」

「何と申して……何をしようと、この方の勝手であろう」

「舞女を見ていたろ？」

「うむ、それは……あでやかなものだ」

「ほい、それで決った」

　猿若は手をだした。

　掌を上向けて、

「ほれ、ちゃッと乗せてんか」

「なんだ、それは」

「お鳥目」

「鳥目だと？」

「アイナ。木戸銭や」

「……」

「あの妓らは、舞いが商いやねん、舞いを見せて、銭もらうのが、仕事や」
「…………」
「せやさかい、舞いを見たら、木戸銭出さなあかんで」
なるほど、これは理屈だ。どうせ小銭だ、清次郎はだそうかと思ったが、猿若の押しつけがましい態度が気に食わなかった。
「わかった」
「出してんか、鐚銭十文」
「おれは、わかったと申しただけだ。銭をだすとは申しておらん。一文もださぬぞ」
「なんやて！」
猿若は気色ばんだ。
「タダ見か、タダ見するのんかいな」
「おれは、うぬらがここへくる前から昼寝していたのだ。わざわざ、舞いを見に来たのではない。眼があいたら、女がいた」
「せやさかい、見よってん」
「見たのではない、見せられたのだ。第一、昼寝の邪魔をされた。こちらで、銭を貰いたいくらいだ」
清次郎は、呵々大笑すると、もう、話は済んだというふうに、肩をゆすって立ち去ろうとした。

「やい、待ってんか」
猿若は追いすがった。旗竿で、清次郎の背中を突いた。
かつッ、と乾いた音がした。みんなの見ている前で、旗竿は二つに折れ、ぐにゃりと旗が曲った。
一瞬のことである。清次郎の右袖がさっと翻ったようであるが、それもほんの一瞬のことで、確かめようはなかった。翻ったのは旗かもしれない。あるいは、眼の錯覚かもしれない。清次郎はそのまま、大股に立ち去ってゆくのである。
「お待ち下さいまし」
女の声が、その足を止めさせた。
いつの間にか、すぐ近くに一人の女が立っていた。これは、清次郎も見おぼえのある、出雲の阿国だった。
「さすがに、みごとなお腕前でございます」
「…………」
「でも、猿若は、兵法を知らぬ者。わたくしが、お相手をいたしましょうか」
艶然と、微笑んでいるのだ。
あのころ、十八、九だと思った。したがって、もう二十三、四になっている。この時代としては、年増である。が、女体の熟れ工合からいえば、盛りであろうか。熟れきって、その肌から発する芳香は、若者の心をとらえずにはいなかった。

「相手とは？」
「ほほほほ、男と女……いえ、あなたさまは兵法なさる方。わたくしはただの舞女、刀を合わせることは、かないますまい」
「ならば、大口たたくまい」
「いいえ、この勝負、わたくしが勝ったようでございます」
「なんと！」
ぎょっとした。
阿国の言葉が、人を食っていただけではない。そこには、おそろしいほどの自信の裏づけがあった。
平然として、艶めいた笑みを洩らす面（おもて）には、強がりや、作為ではない、勁（つよ）さがあった。
阿国は呆然たる清次郎を尻目にかけて、
「さ、まいりましょう」
と、女たちに声をかけた。
女たちは一せいに黄いろい声で返事をしめいめいの荷物を担いで歩きだした。
煙にまかれたように、呆然として清次郎は佇んでいた。
半町ほど行って、猿若がこちらをむいて道化た笑いで、ぺろりと舌をだした。
「あいつ……」
ぶった斬ってやればよかった、と思った。

刀に手をかけて、はっとした。
刀の感じが違った。納まりが悪い。何か、鞘に詰っているような感じだった。むろん、さっきまではそんなことはなかったのである。
清次郎は、刀を抜いてみた。鞘を逆さにしてみた。ころころ、と小さな音がした。
鯉口から、ぽろりと、小石が転りでたではないか。

二

何ということであろう。
（誰が、いつの間に……）
清次郎はふりかえりざまに、旗竿を切った。まばたきする間ほどもない、素早さである。
切った瞬間に刀は鞘に納まっていた。
文字通り、一弾指（だんし）の間だ。その僅かの間に、小石が入っている。
小石が、ひとりでにはねて、偶然にとびこんだか。
ないとはいいきれない。が、万に一つもない。
とすると、誰かが、素早く、小石をほうりこんだということになる。
（あの猿若が……）
いや、そんなことはあるまい。あの剽（ひょう）けた男が。
剽軽（ひょうきん）さは、生業（なりわい）だとしても、それだけの、恐るべき技（わざ）を持っているとは思えない。

むろん、清次郎は、あまりの執拗さに威かすだけの気持だった。したがって、あの刃風を躱すことは、さして至難ではない。

だが、旗竿を切られる一瞬に、小石を拾って空鞘の中にほうりこむなどとは、よほどの達人でなければ出来ないことだった。

(すると、あの女……阿国が!?)

艶然たる微笑の裏に、そのような極意を潜めていたのか。

ただの淫猥な舞いとのみ思っていたのが、その舞いを通じて、会得した呼吸の秘法であろうか。

清次郎は、春光の下で、愕然として、色を失ったのである。

一瞬の抜刀の間に、小石を鞘に投げこめる腕なら、針一本で、心ノ臓を射抜くことが出来る。眼を潰すことも、咽喉笛を打つことも、耳の穴に射込むことも可能のはずだった。

(恐るべき女……)

艶冶なだけに、かえって、空恐ろしいものを感じたのである。

清次郎は、翌日、阿国の小屋に入っていった。

江戸ではすでに阿国の名は遍かった。

京のときのような河原ではない。

京でも、のちには小屋掛けをした。はじめ、河原で客を集めて大いにうけたので、しまいには、丸太を組み、小屋掛けをして、銭を出さないと、見ることが出来なくなった。

江戸に下って来たのは、もう堂々たる大一座になってからだった。

だから、小屋掛けをするのにも、鼠木戸の幔幕は紫に花菱紋を染め抜いてあるし、華麗なものである。

場所は芝の愛宕権現社山下であった。ここは小丘をなしていて、先ごろから、本社拝殿、楼門、石階などが造られていた。六年前、将軍家康の下命で勧請されたもので、当時は草葺きの仮屋だった。

当時、材料を運んだり、工事もゆっくりと、念入りにやったせいもあるが、長年月をかけたものだ。

石運びや土捏の人足たちはもとより材木をきざむ工匠たちや、監督の御作事方役人までも、阿国の嬌名にひかれてのぞきにくる。

阿国がはじめて江戸下りしたのは一昨年のことだ。そのときは、本丸と西ノ丸との間で興行して評判になったものだ。

この京と江戸での評判を利用して、近国へ行っては稼ぎ、暫くすると、また江戸へ戻ってくる。

愛宕権現の山下の小屋からは、笛、太鼓、小太鼓にまじって、蛇皮線のベンベンという音も聞えた。この音色は、江戸の人々にとっては、珍しい〝舶載モノ〟の興味をそそりたてた。

清次郎は藁編笠をかぶっている。かぶったまま木戸銭を払って、中へ入った。

青天井だし桟敷などない。地ベタへ坐るのである。

持参の毛氈を敷いて、重詰めや煙草盆を置き、ゆったり見物している人々がいるかと思えば、尻をまくって、赤褌を剝きだしにしたまま大あぐらをかいている男。

何しろ、後世のように、芝居の見物の様式などない。気楽に、のびのびとしている。

清次郎が入ったときは、かなりの入りだった。前の方に、一ヶ所、隙間を見つけて坐りこむと、

「半畳は要りまへんか」

半畳売りが寄ってきた。

「幾らだ」

「へえ、一枚鐚銭五文、二枚で八文」

「二枚だ」

半畳は三尺四方である。うすっぺらなものだから、人によっては二枚重ねる。

清次郎のような若い兵法者が、二枚も重ね敷きするのは珍しい。それには意味があったようだ。

舞台に阿国が出て来たのは、二、三の演しものがあった後である。彼女がお囃子に誘われて、つつーと出てくると、わっと、人々はどよめいた。

一瞬、清次郎は、男が出てきたのかと思った。

男装だったのである。細身の大小を差し、手には扇子。袖無しと若男袴で、髪はちゃんと中剃りをして、角前髪。

女姿のときも、眼をひいたが、男姿になると、一層、隠された色気がある。

清次郎は思わず、伸びあがるようにして見惚れた。

客席のどよめきは、舞台の雰囲気を、ひときわ華やいだものにした。阿国はこれまでに、何十回、何百回この喜びを味わったかしれない。女にとって、これほどの感激はない。何十人という客の視線を身一つに浴びて、艶冶に舞い、狂言をするのである。

阿国は、舞台から媚笑をおくりつつ、扇子をひらひらさせて、舞いはじめた。

〽わが恋は
　月にむら雲
　花に嵐とよ
　……………

人々は、ただ、うっとりとなって見ていた。男姿になった女のからだのなよやかな動きには、倒錯した妖しい美しさがある。その声は、多少、しゃがれたものであったが、そのことが、かえって奇妙に、欲情をかきたてるのであった。

〽茶屋の女房に
　末代添わば
　伊勢へ七度
　熊野へ十三度
　愛宕様へは

月参り……

その艶麗な舞台にむかって、突然、半畳が飛んできた。

「あっ！」

人々は愕然とした。

少し後のことだが、舞台の踊りや狂言が面白くなかったり、かれらがトチッたりすると、客がこの半畳を投げるのが一つの習慣のようになった。

このことから〝半畳を入れる〟という言葉も生れて、現代でも、それはまだ生きているのだが、このころは、阿国かぶきの漸く評判になったころであり、まだ習慣化はしていなかった。

阿国は、これをひらりと躱した。

飛んだのは、彼女がくるくる舞いまわって、背を見せた瞬間である。

まるで、うしろに目があるように——。

あざやかに、阿国はこれを避けた。そして、客席の方を向いたとき、その面には、笑みすらあった。

全く、意に介していないというふうであった。

その笑顔にむかって——

と、見えた。

ぱっと、また何やら、飛んだ。それは稲光にも似た、光の箭であった。

阿国が左右の扇をひらりと翻したときである。阿国のからだは、一瞬、静止した。その両の

手には、双つの扇があった。

一つは金地に朱で日輪を描き、一つは銀地に金で月が描かれてある。

これを交互に舞わせ、あるいは面をかくしたり——。

丁度、顔の前で、双の扇がひらりと翻って、一つに合わさる。扇のかげに扇がかくれ、さらにそのかげに、角前髪の顔がかくれる。

この瞬間であった。その光の箭が飛んだのは。

今度こそ、見物たちは、肝が冷えた。

顔の前で合わせた扇を、ぶっつりと、一本の小柄が貫いたのである。

さすがに、阿国は、愕っとなって、舞いをやめた。

双扇は、小柄に中心を貫かれ一つになっていた。

阿国は蒼く見えた。

しかし、見物たちには、その小柄は、阿国の顔を傷つけるために投げられ、そして、阿国があざやかに扇で受けとめたというふうに、見えたのである。

「誰だ！」

「ひでえことをしやがる」

「太夫に、なんてえことを」

「とっ捕まえろ」

「ぶち殺せ」

見物たちは、騒ぎはじめた。
その中で、清次郎は藁編笠をかむったまま、ゆっくりと立ち上っていた。
「いまのは、先日の返礼だ」
と、静かに言った。
「前にやられたことを、いま、返した。それだけのことだ」
静かな声音だし、その自信のある態度が、群集の怒気を鎮めさせたようである。
吉岡清次郎もすでに、この慶長十四年、二十二歳になっている。立派な成人だ。苦心の兵法旅は、かれの筋骨を逞しくし、背丈もかなり伸びていた。
その体軀には、自信が漲り、他を圧するものがある。
「やい、太夫になんであんなことを」
一人の向う見ずが、飛びかかってきた。
これはしかし、刀を抜くまでもないことだった。
からだをひらいたかと思うとその場へ叩きつけていた。
「うぬらの知らぬことだ」
清次郎は、そこで、はじめて藁編笠を脱いでいる。
あの手裡剣打ちで、阿国の高慢の鼻も折れたろうと思った。
かれの、この思いきった行為には、もう一つの狙いがあったのである。
多勢の群集が、はじめて、清次郎の顔を見た。

このことは、二、三日で江戸中にひろまるだろう。ひろまれば、宮本武蔵も耳にする。
そこで、かれが、武蔵討ちの旅を重ねていることを、口にするのだ。武蔵は、逃げるわけにもいくまい。必ず、試合を申し込んでくるにちがいない。
清次郎は、まわりを睥睨しつつ、名乗った。
「京より下ってまいった吉岡清次郎重賢だ」
吉岡、吉岡と、人々は呟き合った。
「用があれば、いつ何刻でも、わが宿へまいるがよい。日本橋に近い、さがみ屋と申すところだ」
それだけいって、かれは木戸を出ていった。
これで、充分、目的を果したことになる。
（二、三日、待ってみよう）
と、思った。
（それで武蔵があらわれなかったら、高札を出す）
真剣勝負の高札を出すのである。もし江戸にいて、その高札を目か耳にし、それで試合にこなかったら、世間の嗤いものになる。
武士たる資格——殊に兵法者たる名声は、その厳しさに支えられている。
試合を申し込まれて逃げることは、武蔵にとって、死よりも辛いことに違いない。

三

夜になって、訪れた者がある。
「吉岡さまにこれを」
手紙だった。左封じである。
「来たか、武蔵め！」
清次郎は思わず、中腰になって、宿の者から受けとった。ここは木賃を出す宿であり、入混みだった。腰屛風で、夫婦者や病人との間を仕切るくらいで、雑多な職業の人たちが寝るだけのところだった。
いそいで開けてみると、文面は簡単だった。
——お手合せ仕り度候、この手紙持参の者、試合の場へ御案内仕るべく候。
と、ある。
「よかろう」
清次郎は刀を摑んだ。
「その者はどこにいる」
「土間でお待ちしています」
二階から降りてみると、意外なことにそれは女だった。
女というより、少女なのである。十歳かそこらの、愛くるしい少女なので、清次郎は拍子抜けした。

少女は提灯を持っていた。
「吉岡さま？　御案内しますわ」
物おじしない態度で、先に立った。
「どこだ、場所は」
「——いいところ」
少女はふりかえって、にっと笑う。
はじめから、毒気を抜かれた感じなのである。あの武蔵の荒々しい風貌とはあまりにも合わなかった。
（そうか……武蔵め、術を用いるか）
この少女によって、清次郎の意気込みの出鼻を挫こうとするのだろうか。
それならそれで、対応の仕方はある。
清次郎は、肚裡を決めた。武蔵がこの少女を楯として、卑劣な手段に出るようであったら、
（この子を斬る！）
十歳の少女でも斬る！　それくらいの悲情さを持たなければ、とても、兵法者としては生きてゆけない。
（たわけな。この少女によっておれの剣先が鈍ると思っているか）
その武蔵の、見方の甘さ、愚かしさを嗤ってやりたいような気持だった。

だが、足もとを照らす少女の提灯に案内されていった先は、芝だったのである。

目の前に工事の石材や、愛宕山のこんもりとした丘を見て、清次郎は、眉をひそめた。

「ここは、阿国の小屋ではないか」

「――お待ちでございます」

少女の案内したのは、小屋の裏である。

そこから入ると、目の前に明りが見えた。

板敷きで幕が壁代り。明りは、貝殻に油をたたえて、芯に火を点したものだった。

それは魚油らしく、煤けたけむりをだし、臭いがあたりにこもっていた。

人気のない感じであったが。垂れ蓆をあけると、そこには、夜具がのべてあった。

衣裳が入っているのであろう、つづらが幾つかあり、小太鼓や、蛇皮線や、大小などが投げだしてある。

そして、幕が間仕切りしてあった。

その幕をあけて出てきたのは、阿国ではないか。

「あ、そなた……」

「ほほほほ、何を驚いてお出でか。さあ、おあがりなさいまし」

そのときまでは、まだ、宮本武蔵が、そのあたりにいるのではないかと思ったことである。

あの女たちや、猿若などの男衆はどこへいったのか。

阿国だけが、あの男装のきりっとしていた姿とはちがい、小袖一枚の、ゆったりした姿でいたことだ。

「まあ、酒でも、お食べなさんせな」

阿国はかたわらの指樽から、濁酒を椀にそそいで奨めた。

「うむ……」

「酒はお嫌い？」

「いや、左様なことはないが」

「ならば、お過しなされませな。さあ、御遠慮なされずに」

「しかし……」

「ほほほ、果し合いがお気がかり」

「うむ。武蔵はどこにいる」

「むさし？　何のことを」

「……」

「あたくし、あなたさまの手裡剣うちに驚きました。やはり、あたくしの小手先ワザなど、とてもかなわない。つくづく……感じ入りました」

阿国は、白い頤を襟にうずめるようにし感情をこめて言った。桐の大火鉢のへりに肘をついて、横坐りした姿は、艶めかしく、男の気持に訴えてくるものがある。

「ねえ、吉岡さま」

「……」

「最初はわたくしが、小石を入れ、二度目は、あなたさまが、手裡剣打ち……で、三度目は」

ねえ、とずりよって、阿国は、清次郎の手をつかんだ。

「男と女……男と女になって、お手合せを」

内心、清次郎は、啞然とした。そのことだったのか。緊張が、急にほぐれた。まるで、塩をかけられたなめくじのように、五体の関節が、ぐにゃぐにゃと、とろけかけたようであった。

かれは、思わず、欲望の臭気が、咽喉にこみあげるのを、難しい顔で、ぐっとおさえた。

「そなた、そんなことをして、よいのか」

「ほほほ、だから、お手合せ。どれくらい、お前さまが強いか。いっそ、この阿国を泣かして下さんせ」

女を泣かせる。むろん、嬉し泣き。まぐわいの果てに、女がよがり泣きするくらい、男にとっての優越感はないのである。

清次郎は、阿国に誘われるままに、夜具に身を横たえた。

それでも一応の用心はあった。その気持を察したように、阿国は酒を自分が飲んでみせ、それから、口うつしに、清次郎へ飲ませた。

ごくりと、清次郎が咽喉を鳴らせると彼女は、かれの手をとって、おのれの谷間へ導いたのである。

清次郎のおとこは、異常な情感のたかまりを見せて、熱くたけりたっていた。

阿国のゆるやかな小袖の襟から盛りこぼれる豊満な乳房を、咫尺の近くにしただけで、かれは、平静ではおれなくなっていたのだ。

阿国は、その魅力を心得ていた。おとこの手が、谷間をなずりはじめると、低く声を奔らせ、上半身をふるわせた。すると、小袖はするりと肩からすべり落ち、白いキメのこまかな肌があらわれた。

熟れた女の強烈な甘肌である。かすかに酸味をこめた匂いが、なんともいえぬ魅力で、男心をとらえている。

清次郎は若者にかえっていた。阿国の脚の間にわって入り、狂ったように、おのれを、潤んだ泉へ沈めるとき、かれは、すでにそれだけで感動の声をあげ、女の口を吸った。

ぬめりと柔らかい唇の感触。五年前に、京の四条河原で、憧れを抱いたときの清次郎にもどっていた。

「………」

かれは、何やら、うつつの声をあげて挑み、からだを動かしていった。

女体のほうの動きも、それに合わせている。震動は、女の乳房を大きく動かせ、そして、絶え間ない女の唇から洩れる熱い息が、かれの欲情をせり上げてゆき、そして、早くも、達した。

熱いしたたりを吐きだして、がっくりと清次郎が女体の上にかぶさると、彼女は清次郎の胸からすりぬけるようにして、身をおこしたのである。

彼女のその態度は、急に別人のように見えた。

あんなに誘っておきながら、かれが呻いている間、女は一語も発しなかった。

角前髪を解いて、うしろへ長く垂らしてい、枕からばっさりと乱れ箱に投げだされていたが、その髪の動きというものは、殆どなかった。

それは、清次郎があれだけ昂揚したにも関らず、阿国は、大して燃えなかったことを意味している。

「この勝負、あたしの勝ちじゃアないかしら」

流し目で見て、阿国は言った。その眼は、魚のように、冷ややかだった。

「……」

「吉岡さま、どうやら、あたしの勝ちらしゅうございますね」

「む……いま一度」

「ほほほほ、そんなに出来て？」

冷たい視線が、かれの下腹部へ無遠慮に投げられる。かれは急に屈辱感で、からだ中の血が冷えるのを感じた。

愚図愚図していると、座員たちが戻ってくるかもしれない。

かれは、あわただしく立ち上って、帯をしめなおした。

阿国はそれっきり、送り出そうとはせず、間の幕の内へ入っていった。

男にとって、これほどの恥はなかった。清次郎は出ようとして、うしろ耳に阿国の嘲りを聞いた。

「――いくら剣が強くても、あれじゃア男としても、駄目ですよう」

「さ、その剣もな、いかほどか」と、これは男の声だった。「どうせ、大したものではあるまい」

「お前さま……さあ、もう一度、口直しを」

「はははは、口直しか」

「早く、抱いて、思いきり燃えてみたいの……」

「よいとも、さ……なんだ、ここを拭けよ。あやつのものが、中に残っているわい」

「拭いて」

「指でな、かい出してくれようわさ」

「あ……」

ひきつるような阿国の声。男の太い指が、乱暴にも阿国をさいなむ。かきだす、とは。なんという侮辱であろう。

帰りかけたが、しかし、清次郎は、戸口から、先へすすめなかった。

奥にいるのは誰だ。あの猿若の声ではない。

すると、別の男か。丸太組みしたり、重い荷物を担いだり、道中山賊などの用心もしなければならないから男衆は、七、八人いた。最初、葦原で見たときの二人はその一部だったようだ。

阿国の夫か、ともかく男である。あれだけの豊満なからだで、艶冶、淫奔な舞いをするのだ。男がいないはずはない。

その男がいるのはいいとして、清次郎との逐一を、幕の向うで、冷笑しながら、見ていたの

ではあるまいか。そう思うと、一層、屈辱感で、いたたまれなくなった。

いい、いい、いい……きれぎれに、女の叫びがあがった。あ、手が、痺れる、死にそうな……ああ、極楽、極楽……。

その言葉は、支離滅裂だったが、迫真的だった。阿国は気が狂うかもしれないと思った。歓喜にのたうち、悶えた手が、間の幕をぎゅっと摑んだ。

もっと、もっと、そこを……阿国のうつつの声にかぶせて、勝ち誇ったような男の声が、

「よいであろ。これが男じゃ、ふふふ、これが男よ。あやつは、小童にひとしいわ」

「ああ……たまらない」

「あやつの尻は青くはなかったか。はははは、もっと、よくしてやる」

「う、れ、し、い……」

「まだ、女どもは戻って来ぬさ、どこぞで、男とこうやっている。ははは、ささ、どうじゃ」

「ああ、好き、好、き……」

その絶え絶えの声は、やがて、ひーっと悲鳴のようになった。

清次郎の耐えたのは、それまでである。かれは、逃げるように立ち去った。

翌日、かれは、大工を呼んで、高札を作らせる相談をしていた。女のことは忘れ、やはり剣ひとすじに生きる。堂々と、宮本武蔵と試合をして、勝つ。それが、いまの清次郎のすべてだった。男としても、兵法者としても、それでいいのである。

だが、そこへ、また、手紙が届けられた。

「昨夜の女の子でございます」

「なに……それで待っているのか」

「いいえ、今日はお渡しするだけだといって」

その手紙は、今度は左封じではなかった。

ひらいてみてわかったのだが、字が違っていた。昨夜はそういえば、流れるような、ととのった字だったがいま目前にする字は、激しい性格があらわれた鋭角的で、攻撃的な字であった。

——昨夜の一条、試合に勝ちしは、当方かに覚え申し候。まだまだ修業なさるべく、十年の後にでも拝眉、試合は其の後にて宜しからんと存じ候。この書、御披見のころおい、この身は強き敵を需めて、東方へ歩を進め居り候……

そして、末尾に宮本武蔵政名、宛名は吉岡、伜どのへ、とあった。

秘剣闇夜星

一

まさか、そんな場所で、そんなことが行われていようとは思わなかったので、吉岡清次郎重賢は、呆然となって棒立ちになった。

そこは箱根の山中、早川の畔りであった。

崖の下で、竹藪が大きく川の上にかぶさっていたので、そこに人がいるとは知らずに、清次郎はおりていったのだ。

咽喉に渇きをおぼえてのことだった。ただ、水を飲むためだけにおりていった。

と、竹叢のかげに、人がいた。

一人ではない。大きな男と、そして少年だった。

はじめに大きな背中が見えた。

（人か……）

陽は傾いていたが、まだ明るい。爽やかに鳥の声が山の静けさを思わせている。川の潺湲たる音と、眩しいほどの黄ばんだ陽光の照り返し。

うしろを向いていながら、清次郎がおりてきたことを、その男は知っていた。

「悪いところへ来たな」

と、吼えるような声で言ったのだ。

向うをむいたままなのである。

「旅の者か」

突然だったので、その問いかけにも、清次郎は咄嗟に返事ができなかった。

「そうであろう、まだ、若いな。だが、足腰はしっかりしている、それに軽やかだ、武家だな、それも、武芸の修業をしている……図星であろう」

一度も振りむくことなく、これだけ言いあてたのである。

これは、機先を制するためだったようだ。

「秘事を行うている」

急に声音を変えて、おごそかにかれは言った。

「見ぬふりをしてもらおう」

見るなと言われても、目はそちらへゆく。山中の谷川の畔りである。どこを見ようと旅人の勝手ではないか。

その男は少年と一緒だった。いや、少年というより、幼児といったほうがいい。まだ四つか五つと見える。

この少年を膝の上に乗せている。

手桶で川水を汲むと、膝わきに置いた。岩の上である。その男は、向うむきになったまま、岩に腰をかけ、少年を膝に乗せているのだ。

少年は死んだもののように横たわっている。

男は左手で少年の頭をささえ、右手で手桶の水を掬い、何やら呪文めいたものを唱えながら、顔を撫でている。

顔を洗うというほどではなく、水で濡らしている。

両眼のあたりである。

(何をしているのか!)

清次郎は、ますます興味にかられて、視線を釘打けにされた。

背をむけていても、かれがおりて来たこと、かれの風姿や年齢を言いあてたことなどから見ても、いま注視されていることはわかっているはずだった。

距離はおよそ三間(げん)ほどである。

少年の両眼を洗うが如く、水でしめしていた男の手に、ふと何やら光った。

落ちる前の最後の輝きのように、強烈な陽光である。

その陽にキラッと何やら反射した。

「あっ!」

思わず、清次郎は声を洩らした。

その、小さく、キラッと光ったものは、針と見えたのである。

それも、数本束(たば)ねられたものだ。

(針を……)

何とするのか。

次の瞬間、愕然とした。昏い予感が走った。

「あ、待て!」

止めようとしたとき、その予測に答えるように、数本の針は、ぶっつりと、少年の眼に突き刺さっていた。

「な、何をするのだ」

清次郎の叫びを、男の声が強く圧えた。

「黙れ」

「なに!」

「黙っていろ!」

「……」

「これは当流の秘事じゃ」

「……」

「余人の嘴(くちばし)をさしはさむことではない」

「しかし?……なんと酷(ひど)い……」

　"秘事"というからには、たしかに余人の口をはさむところではない。

　清次郎はただの旅人にすぎない。だが、相手がいたいけな少年なのだ。黙過できなかった。

「片眼を潰すなど、それでは一生、不具になってしまうではないか」

　その制止にも、向うをむいたまま、嘲るような答えがかえって来た。

「片眼だけではない」

「え!?」

「当流は両眼を失わしめる」

「まさか」

「眼あれど見えず、眼なけれど見る、これ心眼の極みなり、仮眼を棄て、心眼を以て万象を観る……」

　その唱えは、すでに清次郎への答えではない。

おごそかな秘事のために誦しているのである。

　少年は片眼を潰されても声は立てなかった。四肢をびくっと、顫わせただけである。

血に染んだ針の束は、次に残りの眼にもぶっつり突き立てられた。

　少年の四肢はふたたび、びびっと、痙攣した。

が、泣きもせず、抵抗もしない。幼いながらに覚悟をきめている様子だった。

　男は、血の吹きだした両眼に、さらに水をかけてやり、血を拭い、拭いつつ水をかけた。

かれがふりむいたのは、その"儀式"が終った証拠なのであろう。

「見たか」

　はっとした。

　それまで言いたいことが胸にいっぱい盛り上っていたのが、一瞥したとたんに、失われた。

　男の両眼も盲ていたのである。

　清次郎は道に迷った。

　この箱根の道は一度通っている。西から東へ――宮本武蔵の後を追って東海道を下っている。旅から旅を重ねていると、はじめての道でも、妙に勘がはたらくものである。

　一度通った道だから、迷うはずはなかった。にも関らず、迷ってしまったのは、一人の少女のせいだった。

　その少女は、十二、三歳と見えた。

　一人で歩いていた。裾の短い小袖を着て、手に一本の細い青竹の杖をついていた。

　足もとは尻切れ草履だし、笠もない。むろん手甲も脚絆もない。

　誰が見ても、近所の子である。近所といっても、まだ東海道も完備していないころだから、箱根の宿か湯本の子であろうか。

　少女は、巨杉の根方に腰をおろしていた。そろそろ、あたりには夕闇が迫っている。

　少女は、清次郎が通りかかると、にっと笑った。

「小父さん、どこまでゆくの」

涼やかな、邪気のない声である。
「どこと申して……西へな、まいる」
「三島まで、連れていって下さんせ」
相手は少女だ。天下の嶮たる山道だし、すぐに暮（く）れる。こういう山には山賊が多い。第一、少女の一人歩きなど、意外すぎることだった。
「よいとも……」
気軽く清次郎は引きうけた。どうせ一人旅である。少女すぎるが、旅は道連れだ。
「あたくし、千加（ちか）です」
少女は、はきはきした調子で言った。
眼が大きく黒瞳（くろめ）がちで、悧発な感じだった。少女はものを言うとき、凝（じ）っと見つめる。その瞳に吸いこまれそうに感じた。あと三、四年も経つとどんなに魅力的になるか。いままさに陽が落ちようとして、残照が雲を赤く灼いていたし、少女の顔もその余光で彩られていた。その情景のせいもあったかもしれない。
「お千加か、私は吉岡だ。吉岡清次郎重賢、京（みやこ）の生れだ」
「まあ、京の……」
お千加は入陽を指さした。
「京は、あっちかしら」
「そうだな。京は遠い……」

清次郎がお千加を疑わなかったのは、あまりにも若すぎたからだ。もしも年ごろの女だったら、その笑顔をまず疑ってかかったろう。
「三島へおりるのは、こっちのほうが近道よ」
女の子は杉林の中の小径へ入っていった。
「そなたは、近くの者か」
「ええ」
「三島か」
「ええ……」
宵闇が林の中から湧いてくるように、あたりはみるみる黄昏（たそがれ）ていった。
「今夜は月があるかな。暗闇では、道がわからなくなる」
「大丈夫よ、あたしが知っています」
少女はずんずん歩いてゆく。
それからほどなく、真っ暗になった。あいにくと月は出ていない。星がまたたきはじめた。道はまた森の中へ入ってゆく。少女はよほどこの道を知っているのか、足が早くなった。
「待てよ、そんなに急ぐと木の根に躓（つまず）くぞ……おい」
呼び止めようとして、はっとした。
闇の中に、ふと、ある気配を感じた。夜と闇と森。木々の葉の呼吸か、森の精か。清次郎はそこにうごめく何かを感じた。それはものの影ではなく、ものの気配だった。

（来た！）

清次郎は四方に油断のない眼をくばった。

その気配は一つではない。前方からも、左右からも、背後からも——

いや、頭上にあった。

ざざっと、木の葉が囁いた。岩石の落下するように、舞い降りて来た影が、きえーっ、と、異様な掛け声を発した。

「おう！」

一瞬、清次郎は身をちぢめて、横へ飛んだ。

刹那、その闇から、別の影が飛びだして来た。

「死ね！」

凄まじい刃風であった。清次郎は反射的に抜きあわしている。殆ど、無意識であった。がっと鋼が哭き、火花が目を灼いた。火花は瞬後に闇をさらに濃くする。立ち直るひまもなく、左側から斬りこんできた。清次郎が夢中で振った刀に、したたかな手応えがあった。蒲団を殴ったような感触である。そのまま刀を引いて走った。

前面にもすでに影は立ちはだかっていた。

闇の中の影は、常態では見えない。その動きと呼気が、自と影をあらわすのである。清次郎の片手突きに、ぱっと相手は身を躱したが、僅かながら傷つけたようであった。

悲鳴が起った。

「来い！」

はじめて、清次郎は叫んだ。

「何者だ、うぬらは」

返事はない。

「答えろ。何の恨みだ」

それにはじめて、闇は答えた。

「——恨みはない」

誰とも知れぬ。影は十数箇である。その手に手に刃があった。

「恨みがなくば……山賊か」

「否！」

「ならば？」

「その方は……」

「吉岡清次郎だ」かれは油断なく、四方に眼をくばりながら、「京の吉岡清次郎重賢、兵法の試合ならば、いつでも応じるぞ、理由を申せ」

「死んでもらおう」

「なに！」

「その方は、生きてはおれぬ」

殺気が闇を針のように鋭くした。闇が裂け剣が走ってきた。すでに清次郎には余裕が生じて

いる。その剣勢を読んでいた。

〝虚の剣〟

集団の場合、常に虚と実がある。虚を以て相手を誘い、実を以て倒す。虚の意識は、その刃風にも気合にも、自らあらわれるものだ。

それを〝識る〟には実戦を重ねることから会得する以外にない。からだでおぼえるというか、白昼ならその眼、あるいは剣先の迷いやためらいにそれを観る。闇夜ならば、僅かに夜気に漂う呼吸で察知する。

殺気とともに落下した剣を軽やかに避けて清次郎は虚剣をはねあげざまに、袈裟掛けに斬り倒していた。

「退け」

そのあざやかさが、襲撃者たちを動揺させたらしい。

あの声が命じた。

「みんな、刀を退け」

首領の命令に忠実だった。かれらはさっと刀をひき、後へ退った。

「吉岡とやら、存外の使い手だな」

「……」

「感じ入ったぞ。若いのに、よく使う。兵法者とは見たが、それほどとは思わなんだ」

あの男ではないか。

早川の畔りで、少年の両眼を潰していた盲目の巨漢だ。

「如何じゃ、吉岡とやら、あらためて詫を申したい、われらが巣に立ち寄らぬか」

二

〝巣〟はそこから二、三町はなれた山腹にあった。巨大な岩肌が剝きだしになった山の窪地に巨杉が周囲を包みこむように立ちはだかり、その裡に檜皮葺きの屋根の茅屋があった。星明りだけの仄明りのもとでである。

まだ深夜でもないのに、家の内外には灯りがない。まるっきり火の気がない。

それなのにかれらに近づくと、数人の影がばらばらと出迎えた。

「——珍客じゃ」

通された部屋も真っ暗であった。

わざと灯を点さないのだ。それをまた平気で、出迎えた方も、かれを襲撃した連中も暗闇の中で行動している。

「そうじゃ」

と、思いだしたように、首領は言った。

「この客は、目明きじゃほどに、灯りがいるの……」

しわしわと周囲で笑いの波が揺れた。

それには蔑みというより憐れみに近い感情がこもっていたようである。

灯りが運ばれてきた。

燭台である。さして明るくはないが、闇よりはマシであった。尠くとも清次郎には有難い。

かれは、その灯りで、見わたして驚いた。

あの首領の双眸が無いことは、早川の畔りで見て知っていたが、周囲に坐った連中もいずれも、両眼は失われていた。

(誰も……眼が見えないで、おれを襲ったのか)

いや、行動が、少しも目明きと変りなかったことに、慄然とさせられた。

それも、あのときに思い当ると、驚き以上の、恐怖さえ感じられた。

(少年のように、両眼を針で潰したのか)

その驚きにこたえるように、首領は言った。

「――さっき、見たのう、当流の秘事を」

「……」

「いずれも覚悟の上じゃ」

「……」

「一流の兵法者となるためには、心眼さえあればよい」

かっかっ、と語尾を笑わせて、

「おぬしらのような生兵法には、わかるまいがの」

その生兵法のために、死者も負傷者もでている。

が、そのことには、言及しないのである。

死体はたしか、運んできた。この家に運びこんだ様子がないから、途中から、どこかへ運び去ったようだ。

聞ける立場ではなかった。いまの清次郎の立場そのものが不安定なのだ。

が、気になった。

かれは、そのことを言った。

「それがしが斬った者はどうした。仏になった以上、それなりの……」

「ははははは、なにを申す。人間、仏などどこにあろう、死ねば、塵骨灰よ」

首領は大笑した。

「生きている間じゃ、人間は。兵法も左様、おのれがきわめた兵法は、誰かに奥儀を譲る。譲られた者が、次に譲る……これで兵法は死なぬ」

「では、あの死体は埋葬せぬのか、供養もしてやらぬのか」

「本人も、望んではいまい」

それから、その言葉を肯定する返事を促すように、輩下を見まわした。

「のう、おぬしらも、そうじゃな」

いかにも、と数人が答えている。

「死体は、狼にくれてやる」

「……」

「狼が喜ぶわ。その狼の肉を、われらが喰う……ははは、若いの、どうじゃ。これが当流のならわしよ」

　恐るべき兵法者の一団であった。

「心眼……左様か、心眼で、目明きよりも、わかると申される」

「まずな」

　と、言葉を切ったのは、ともかく、清次郎に手こずったからだ。

「われらを悩ませた、おぬしのわざ、なみなみではない」

　首領は、事実、感じ入ったように言った。

「われらは、おぬしほどの腕に接するのははじめてじゃ」

　そして、かれは名乗っている。

「足柄闇夜斎……」

「……」

「足柄山中に生れた、いずれここで死ぬる。が、死ぬるまでに、関東一円、この闇夜斎の名はしれわたろう、足柄剣法が、天下を制するときが、やがてくる」

　もとより、その本名はわからない。自ら、生ある眼をつぶしてまで、秘奥を得ようというすさまじさには、清次郎も息をのんだ。何よりも、あの少年の眼をつぶすところを、目のあたりにしているだけに、その言葉のすさまじさが、ひしひしと感じられるのだ。

「――闇夜こそ、われらの剣にとっては、自由に生きるところ。世の多くの兵法者は、白昼に

生きる、が、夜と闇には、まるきり、小児に変るまい」

　闇夜斎の言葉は自信に満ちていた。

「闇夜の礫は避け難し、とは――だが、われらにとっては、昼も夜も変らぬ。闇夜の礫を避けるのは、楽なことよ……それだけ、世の常の兵法者は弱い」

「しかし……」

「まあ待て。おぬしらにとっては、われらの存在ははじめてであろう。意外であろう、じゃによって、教えてくれているのじゃ。なまじ眼が明いていれば、余分なものを見る。雑念がわく。それが兵法者にとっては、邪魔だ。わかるか」

「……」

「わからぬ？　ははは、憐れな」

　そのとき、瓶子と盃を三方に乗せて、あの少女があらわれた。

　思わず、清次郎が、そちらを向く。

　すかさず、闇夜斎は言った。

「それ、それよ」

「……」

「邪魔が入った。の、雑念が入った。ははは、それだけ、おぬしに弱味がある。たとえばおぬしを討とうとする。おぬしが、いま、お千加が来たことに、ふっと気をとられたな。その瞬間に、わしが抜き討っていたら……おぬしは真っ二つ」

「そうかな」
清次郎も静かに笑いながら、言い返している。
「どうかな。おぬしの首が飛んでいたかもしれぬ」
「こうか！」
たっと、闇夜斎が抜刀した。坐ったままであった。刹那、その刃は、宙を薙いで、かつんと、手応えを示した。
刃が真っ二つにしたのは瓶子であった。
清次郎は一蹴して、柱を小楯にとっていた。まだ抜きもせず、余裕を持って、見まもっている。
「ぬ！　しまった」
これは、寛やかな笑い声で、
「わかったようだな、闇夜斎、おぬしの負けだ」
「なにを！」
「よせ。おぬしは死んでおる」
「う……」
「懐中をあらためてみよ」
あわてて、闇夜斎は左手を、懐に入れた。何やらつかみ出した。それは盃であった。
「あっ！」

「おぬしの水月はとうに貫かれた、な」
その言葉は闇夜斎だけではない。輩下たちにも衝撃を与えたようである。
たしかに、心眼を働かせて、わずかの呼気にも、瞬時に行動できるところまで、兵法の腕が神技の域に達すれば、これほど恐るべきものはない。
そこまで、この足柄剣法がすぐれているであろうか。
両眼を潰してまで、きわめた剣法。清次郎にとって、かなり手ごわい連中ではあったが、とにかく、あれだけの多勢に襲われて切り抜けたのである。一人一人だったらもっと楽なはずであった。
清次郎は、もとの席へ座った。
闇夜斎が刀をおさめたのが合図のように、ざわと立ち上った者たちも、また膝を折った。
しかし、これは、必ずしも、平和が甦ったことを意味しない。
いうなれば、戦が、膠着状態に入っての、小休止の感じだった。
清次郎は油断しなかった。いかに自信があるといっても、ふたたび、あの闇の争闘——それも、この多勢を相手に闘うとなれば、どこまでやれるか。
なまじ、森の中だっただけに、眼は闇に馴れてもいた。
宵闇がしだいに濃くなってきたのだ。その馴れが、かれらほどではないにしても、かなり見分けさせたし、逆に、かれらが多寡をくくったのが、失敗となっている。
が、いま。この乏しいながら、一穂の灯明りに狎れた眼に、突然、闇が齎されたらどうなる

か。

そこまで、清次郎は自信がもてなかった。

（なんとかして、ここから出なければ……）

相手が夜の梟（ふくろう）なのだ。逃げ出すのは、容易なことではない。

「――お千加とかいったな」

かれはつとめて、冷静を装った。

「せっかくの馳走がこぼれてしまったな」

「はい……」

「あらためて、馳走になりたい」

「は、はい……」

お千加の眼には、脅えがあった。

瞞したのは彼女である。が、清次郎はそれを一言も咎めようとしない。むしろ、微笑を含んでさえいる。

そのゆとりが、かえって、少女には恐ろしかったようである。

「ほう、こぼれたのか、勿体ない」

と、闇夜斎はとぼけた声をだした。

「お千加、新しい酒をな、汲んでこい」

まわりがみんな盲（めしい）ているだけに、お千加の黒瞳（くろめ）がちの眼が、大きく、輝かしく見えた。

お千加が運んできた酒に、何か痺れ薬か、毒でも入っていないかと思った。まるで、その清次郎の気持を見ぬいたように、お千加は、

「どうぞ」

と、言いながら盃へそそぐと、その盃を自分の口へ運んだのである。

凝（じ）っと大きな瞳で清次郎を見ながら、ぐいとあけた。大人の手つきであった。その前も後も、一語も発しなかった。呼吸さえもおさえていた。

清次郎は、はっとした。

（そうか、この子は毒見（どくみ）をしてくれたのではないか）

その呼気をころしているのは、闇夜斎はじめ、一同に気取られまいとしているのだ。

清次郎はそれと悟ると、

「もう一杯……」

と言い、盃をつかんだ。

「よい酒だ」

二杯目を彼女と同じように飲んでから、また言った。

「駈けつけ三杯ということがある。なみなみとな、ついでくれ」

三杯ではとどまらなかった。清次郎は旅寝の数年の間に、酒量があがっている。一升以上飲んでも大したことはなかったが、いつまた殺人剣が襲ってくるかわからないのだ。いかにも沢山飲んだように見せて、

「今宵は泊めてもらうぞ」
と、横になった。
闇夜斎はそれを聞くと、
「お千加、衾の世話をしてやれ」
と、無雑作に言った。
寝具の用意である。お千加は、闇夜斎の言葉をどう受けとったのか、夜具をのべ、清次郎が身を横たえると、わきからすべりこんできたのである。
「そなた……」
「いいの……清次郎さま」
お千加は、猫のように身をすりつけてきて囁いたのである。
「抱いて」
それは、〝少女〟のゆえに、父親に甘える言葉に聞えた。
あまりにも意外すぎた。
まだせいぜい十歳ぐらいと思っていたが、すりよってきた少女のからだは女を感じさせた。
「お千加……」
「抱いて、あたし……もう、女です」
少女だと思われたくない。そういう気魄のようなものが、お千加の語気にも眼にも感じられた。

「そなたは……」
「十二歳」
それは返事になっていなかった。いや、お千加にしてみれば返事だったのだろう。十二歳は、少女ではない、という気持なのか。お千加は、かれの手をとると、おのれの胸に導いた。そこには、みごとに固い隆まりがあった。円錐型の乳房があった。さすがに、下腹部へ誘うには、恥じらいが多かったのであろう。
「おねがい……あたしも、そのうちに」
「そのうちに?」
「眼を……つぶされます」
「そなたまでが!?」
詳しい話をお千加はしようとしなかった。が、お千加の一言で充分だった。
「あたくしも、兵法を……」
どういう事情だったろう。深い事情があるに違いなかった。あの闇夜斎には、男も女もない。足柄兵法という奇怪なまでの秘剣を伝承しようという意欲が、男女のみさかいをつかなくしているのか。
お千加は、二つか三つのころ、街道で拾われたのだと言った。ここで養われた。闇夜斎の養女分というわけでもない。闇夜斎には、そういう身分的なつながりのことは一切、念頭にない。ただ、拾った。育てた。兵法の家だ。兵法を伝授する。すなわち、〝盲目の秘剣〟を。それ

だけの理由であろう。

お千加はすりよってきた。

「抱いて、おねがい、女にして！」

やはりはじめてだったのだ。

清次郎は、そう思いながら、おのれが浅ましく、下腹部に熱を持っているのを感じた。かれは荒々しく、女の下肢をひらいた。十歳か十二歳か？　それを判別する、何があるというのだろう。二、三歳で拾われた捨子に、生年月日がわかるわけはない。ということは十三歳か、十四歳か、いや十五歳かもわからないのだ。

十五歳でも小柄な女は、このくらいかもしれない。

そう思うのは、欲情に対する詭弁だったろう。清次郎の指は濡れた。濡れたということが、まるで、免罪符でもあるかのように、かれは熱くたけり、どうにもおさまらぬほど硬くそそり立ったものを、女の中に押し込んでいった。

お千加が、そのとき、何か叫んだ。

それは、昂ぶった男の耳には〝何か〟という程度にしか、聞えなかった。言葉とも叫びとも聞えなかった。昂奮がかれをとらえている。情熱というより、逞しい若者の欲望といったほうが正確だろう。それはお千加の若い女の肉体が、ただ目ざめさせた動物性といったほうがよかった。

少女へのいたわりや、思いやりや、同情ではなかった。若い兵法者のからだは、その異常な緊張のなかだけに、一層、動物的になっていた。

少女には、やはり破瓜の疼痛があったはずである。が、不安の中の好奇心と、せめてもの救いに似た憧れが、それを耐えさせたのだろうか。少女も、男に合わせてあえぎ、かれの首に手をまわして、甘美な水を貪り呑んだ。

果てるのが早かったのは、蒼い果実の新鮮さのゆえであろう。果てたとき、清次郎はすぐにおのれの置かれた立場を思った。

闇夜斎が何を考えているかわからない。広くもない家の中で、お千加がかれの衾にもぐりこんできたのは、当然、わかったはずだった。

あるいは闇夜斎の差金（さしがね）かとすら疑ったほどだった。

むろん、それは尋常の手段では、かれを仆せないから考えだした方法ではないか。

三

清次郎がお千加を連れて逃げよう、と思ったのは、その危険を感じたときだった。

お千加への情愛だろうか。お千加もまた双眸を潰して女兵法者の道を歩まねばならぬという。そのことへの憐愍もあったろう。

「お千加、逃げよう」

「え!?」

「くるか、拙者と」
お千加は頷いた。
「ええ」
二人は寝所を脱けだした。が。闇には眼があった。
「どこへゆく」
闇の中でふいに男の声がした。
それは闇夜斎ではなかった。命じられて見張っていたのであろう。
「お暇（いとま）する」
と、清次郎は答え、左手でお千加を抱きあげた。足音を一人にするためだった。
「まだ外は暗いが、もう間もなく、夜が明けるだろう。みなの衆に挨拶するべきだが、先を急ぐゆえ」
「待て」
と、その男は言った。
「おん師にも無断でゆくつもりか」
「そうだな。せっかく寝（やす）んでいるところを起すのも悪いからな」
清次郎は低く笑った。
「おぬしから話しておいてもらおう」
「待て」

「待たぬ。それとも、一夜の木賃（きちん）がほしいと申すか」
清次郎は一刻も早く、この家から出たかった。
「退（の）け」
その声に反撥するかと思ったが、男は、なぜか、急に静かに身を退いた。
あまりにも静かだったので、おかしいと思ったのだが、それも道理、戸外へ出ると、はっとした。
いつの間に起きだしたか、十数箇の影が半円を描くようにして、ゆく手をふさいでいたのである。
「お千加、ひとりで走れ」
と、囁いた。
「おれは斬りぬける。三島はどっちだ」
たしか、下りになってから、山中城の城址があった。かれはそれを思いだして、囁いた。あの城址までゆくうちに夜は明けるだろう。
夜が明ければ、この〝闇の一族〟たちは、かえって、分（ぶ）が悪くなるのだ。
（斬りまくってやる。むざとはやられぬ）
そっと、お千加をおろすと、清次郎は、左手で鯉口を切った。
墨汁のような闇が、かれらを包んでいる。暁闇は、あとどれくらいでうすれるのか。
それまで、保（も）つか。

（保（も）たせねば……）
清次郎は、闇の影を目で読んで言った。
「闇夜斎はいるか」
「……」
「闇夜斎と話がしたい」
「……」
いるはずだった。多勢で包み討ちにしようとしているのか。
「闇夜斎！」
清次郎は大喝した。
「卑怯だぞ、出ろ」
「……」
「一騎討ちでまいれ」
それにも返事がなかった。
「それでも兵法者か。足柄剣法とは、多勢を以て闇討ちをなすことか」
ざわ、と影が動いた。
一陣の嵐気（らんき）に似ていた。幾つかの影は、さながら、輪（わ）をちぢめるように、どっと、一せいに、清次郎めがけて殺到した。
数人が一度に抜刀した。その白刃が夜気を冷やした。

清次郎は一瞬、身をひるがえしている。再び家の中へ駈けこんだのである。
これは包囲の者たちにしてみれば、予想外のことだったのである。
「逃げた」
「逃げたぞ」
その声に答えず、清次郎は、闇夜斎をもとめた。
闇夜斎はいた。燧石（ひうちいし）の音がした。かれは鉄砲の火縄に点火していた。
「闇夜斎！」
「や、きさま……」
「それでも兵法者か」
「なにを」
「剣で勝てぬことを知って、闇夜鉄砲か」
「黙れ、これは兵法の試合ではない」
ぴたりと筒口が、清次郎を狙った。
「うぬは、足柄剣法の秘事をぬすみ見た。秘事は、外聞を許さぬ。盲目の秘剣のからくりを見られたからには、うぬは生（い）けて箱根山から出られぬのじゃ」
「馬鹿な。ぬすみ見たとは……」
「だから申したはず」
ぴたりと、胸に銃口を擬して、闇夜斎は言った。

「見るなと申した。見なければよかったのじゃ。が、うぬは見た」
「見なかったことにすればよいではないか。するなと申すならば、口外はせぬぞ」
「遅い！　もはや」
　その問答の間に、輩下がもう出口をふさいで、まわりをとりまいていた。
「秘事は、神仏のみが知ることよ。うぬのような、いずれの馬の骨とも知れぬ奴に、秘事を盗み見られては、将来も案じられる。せっかく、わしが齎した闇の世界も、うぬのようなに禍いされては真の闇にならぬ。もろもろの俗な一切から離れてこそ、真の心眼を得るのに、彼奴は、雑念が死ぬるまでつきまとうであろう」
「闇夜斎、この吉岡清次郎も兵法者だ。口外はせぬ。疑いとあれば、金打しよう、それで了見せぬか」
「黙れ！　死ね」
　轟然と鉄砲は炸裂した。火蓋を切ったのではなかった。闇夜斎がかまえた鉄砲の、筒口から、清次郎は二間と離れていなかったのである。
　狙いが外れるはずもない距離。いや、狙いは確実だったろう。心眼は、はっきりと清次郎の心ノ臓に照星を合わしていたはずであった。
　大音響とともに爆発したのは、銃そのものだったのである。
　一瞬、何が起ったかわからなかった。火花と、凄い黒煙とともに、闇夜斎がのけぞり倒れるのを見るや、清次郎は走りだした。

　この突然の出来事は、包囲した者たちにも、意外な結果だった。闇夜斎の絶叫は、何が起ったのか、かれらにもおよその推察はついたのである。
　清次郎は、その動揺につけいって、突っ走った。
「あ、待て！」
　追いすがるように叩きつけて来たのを、ひっぱずしてしゃーっと、片腕を切り放した。双足を薙いで来た刀がある。清次郎は足をちぢめて飛んだ。一間余のところへ、足が着くか着かぬかに、その気配で斬ってきた。ガッと、刃が哭く。足がらみにかけて倒すと同時に真っ向額を切り裂いた。
　硝煙の臭いと、同輩の負傷は、かれらの勘を狂わせたようである。
（助かった）
　包囲は崩れた。逃れようとした清次郎は、しかし、血の中でもがいている少女を見た。
「あ、お千加」
　駈け寄って抱きおこしたが、もう断末魔に近いあえぎだった。
「吉岡さま、鉄砲……鉄砲……筒口に土を詰めこんだの……」
　それで、弾丸は飛びださず、火薬は鉄砲を吹き飛ばし、闇夜斎の顔を砕いたのだ。
「誰に斬られた、どいつだ、そなたを斬ったのは」
「いいの……これで、いいの……吉岡さま、好き……」
　それが最後の言葉だった。お千加の手は、かれの手を握ってそのまま、こときれた。

いつの間にか、夜が明けていた。爽涼の冷気が流れていた。
残った闇の一族たちは瀕死の師を抱え、もう、兵法者の意地を失ったように、呆然となっているだけだった。
清次郎はお千加の死体を抱いて立ち上ったとき、あの両眼を潰されたばかりの少年が、よろよろとさまよい出てくるのを見た。頑（かたくな）な兵法家に育てられた哀れな犠牲者の姿がそこにあった。

火術深秘録

一

目の前で、それは起った。
突然のことだった。吉岡清次郎は、一瞬、何が起ったのか、わからなかった。
目の前に刀を閃かしていた二人が、突然前後して倒れたのである。
そこは尾張の熱田の宮の森に沿った道だった。
二人の男は清次郎に私的な怨みを抱いていたのではない。鴨（かも）の通るのを待っていたにすぎない。
時刻は五ツ——午後八時ごろだった。二人はかれの行く手をふさいだ。
「路銀を貰おうか」
と、一人が言った。
「ここを通りたかったら、関銭（せき）を払うことだ」
もう一人が言った。

「いやだな」と、清次郎は言下にはねつけた。
「うぬらに払う銭など、一文もない」
その言葉が消えぬうちに、二人が抜刀したのである。
間合いは九尺。清次郎は刀に手もかけず、二人を見ている。何ほどの腕もない。すぐに抜刀したがるのは、自信のない連中なのだ。自信があれば容易に抜かないし、相手が見るからに兵法者とわかるからには、よほどの決意でなくば仕掛けては来れないはずであった。
（軽い……）
と、思った。
この二人を仆すのは、雑作もない。
が、清次郎には、まだ殺意が起らなかった。かれは人を斬ることに愉しみを感じる性質ではない。宿命の宮本武蔵を討つ、その目的の旅なのである。
清次郎に殺意が沸かないうちに、その〝突然の出来事〟は起ったのである。
バーンと、音がした。どこかわからない。と、その抜刀の一人が、あっとのけぞったのだ。
「どうした？」
もう一人が支えようとした。
倒れなかったのは、かなり気丈者だったからだ。その男は、たたらをふむと、前のめりになって、「やられた」と、呻いた。「ひ、卑怯な……」
清次郎を非難するように、白い眼をむいた。

むろん、清次郎には、わけがわからなかった。
第二の銃声がした。刹那、もう一人の男がげっと、呻いて、手を顔にあげかけたまま、これは、棒を倒すように倒れた。
最初の銃声がしてから、ほとんど、呼吸にして、五つと数えないうちであった。
二人が折り重なるようにして倒れたのを見て、清次郎は、ぱっと、傍の老杉を小楯にとった。
闇鉄砲の三発目が、かれを狙わない保証はどこにもなかった。
宵闇は、まだものの文目を見わけさせる。清次郎は、油断のない視線をあたりにくばった。
そうしながら、かれは、なぜ、この二人が撃たれたのかを、思いめぐらしていた。野盗を捕えるのは、治安にあずかる者の当然としても、その場合は、闇鉄砲ということはあり得ない。捕吏をもって、囲み、押し包み、捕えるのが当然の手つづきで、手にあまる場合には斬る。傷つけても捕えるというのが、司直の方針である。
闇が動いた。
闇に火薬が臭った。硝薬の臭いは、すがすがしい浅春の宵闇の中で、強烈に鼻腔を刺したのである。
影があらわれた。
意外だったのは、その影は一箇だったことである。
二人を撃ち倒した男だと知れる。小脇に鉄砲を抱えていたのだ。
その影の背格好から、かなりの老齢者だと思われたが、足腰はしっかりしたものだった。

もはや、二人が逃げるおそれもないと見たのか、悠然と、しかし、ためらいのない足どりでやってきたのである。
その眼には、清次郎の姿も、当然、見えたはずであったが、一瞥もせず、二人の傍へ寄って、見下した。
「うむ……」
何やら頷くと、かがみこんで、傷口をさぐった。
先に倒れたほうは、まだ息があった。断末魔の喘ぎをつづけていたが、あとで倒れたほうは、こときれている。
これは眉間の真ん中に、喰っていたのである。
その加害者は、眉間の穴にずぶりと小指を突っこんだ。それから、後頭部を見た。が、弾丸の出口はなかった。
「――やはりな」
と、頷いてから、もう一人を抱き起した。
こちらの方は、傷が左の胸だった。これも指を突っこんでしらべた。
それから、乱暴に、裏返して触った。これは貫通している。弾丸は、肋骨の間を通ったらしい。
それだけ見ると、もう充分だというようにほうり出して立ち上った。
断末魔の苦悶にも、かれは少しも心を動かされないようであった。

思わず、清次郎は声をかけている。
「あいや、待たれよ」
小脇にかかえられた鉄砲が、こちらへ向けられるかと思ったが、その様子はなく、足を止めて振り向いた。
老杉の蔭から、清次郎は出ていった。
「おぬしが撃ったのか？」
それに対する返事はなかった。返事の必要はないというのだろう、かわりに、咳をした。それは別段の意味もなく、かれが老人であることを証明したにすぎない。
「寒いのう、まだ。春と申しても、夜になると寒い」
きわめて自然な調子だった。
宵闇の中ではあったが、清次郎には、かれが還暦に近い年齢に見えた。
「何か用かな。用があれば、早く申せ、老人になると、就寝が早いのじゃ」
「おぬし……この者たちをどうする気だ」
「どうする？　とは」
「まだ、死にきれずに、苦しんでいるではないか」
「そのようじゃ。心ノ臓を外れたゆえにな」
「とどめを刺してやらねば」
「なんの、そこまで、面倒見てやることはない。たかが兇賊じゃ」

「しかし……」
「やりたければ、おぬしが、やれ」
　もしもこの鉄砲の老人が、清次郎の危難を救ったというような顔でもすれば、清次郎としては、その必要がなかったことを言うつもりだった。
　が、老人は、そのことは口にしない。かれには、野盗二人を撃ち殺したことを誇る気持なぞはまるきり無いようであった。
　そのまま、闇の中を去ってゆくのである。
「待て、卒爾ながら……」
「なんじゃ」と、また素直に振りかえっている。「名でも聞きたいというのか」
「左様……てまえは、京の吉岡憲法が一門、清次郎重賢と申す」
「おお、吉岡か。わしは稲富一夢」
　それだけであった。老人は、歩み去った。
　稲富一夢——その名は著名であった。本名は稲富伊賀守直家という。その名が遍く世に知られているのは、鉄砲の名人としてのことである。
　兵法者といえば、刀槍をはじめとして、弓馬柔術までも含まれるが、その中に鉄砲だけは入らない。
　天文以来、種子島が伝来して、戦国争乱の様相を大きく変えたことを知らぬ者はない。

　当時、無敵を誇った武田信玄の槍騎兵が、織田の鉄砲に破られたことは、もっとも顕著に時代の転換期を示したのだった。以来、鉄砲が武辺の死命を制することは遍く知られて、それを軽視する者はなくなったが、しかし武士の誇りという点では、故意に舶来飛道具として、否定された。
　国内で生産されるようになってからも、それは変らない。
　鉄砲は十間、十五間離れて敵を仆せる優秀な兵器ではあっても、武士の兵法とは無関係なものとされた。
　飛道具という意味では、弓矢もまた同じではあったが、そこには、膂力やそして的中させる精神が重んじられている。
　鉄砲はあくまでも火薬と鉛玉であり、照準を合わせるのに、精神は必要なしとされたのである。
　ために、鉄砲が、安土桃山時代の戦争の主力となったにも関らず、それを扱う者は、あくまでも軽視された身分に甘んじねばならなかった。
　いわゆる鉄砲足軽である。弓や槍も足軽組を構成するが、槍は武士の表芸であり弓と馬の心得もなければ、武士として一人前ではない。
　が、鉄砲のワザなど知る必要がない、とされたのである。
　戦争の大勢を動かすのは鉄砲勢であっても、勝敗を決するのは、あくまでも武士の刀なのだ。
　そうした時代だけに、鉄砲使いの技術は兵法のうちに入らず、したがってそのワザが卓抜し

ていても、稲富伊賀守直家の名声は、兵法者の名声を凌ぐものではなかった。

稲富の名が天下に知れるようになったのは必ずしも、その砲術家のワザのゆえばかりではない。むしろ、恥辱的な事件の〝悪名〟のゆえであった。

二

ともあれ——

清次郎が稲富伊賀守の名を聞いて驚いたのは事実である。

かれは、何か声をかけたい衝動にかられながら、しかし、適切な言葉が浮ばないままに、佇んでいた。

（——そうか、なるほど、ここは尾張だ）

尾張・美濃は徳川二代将軍秀忠の弟で、従四位下右兵衛督義直の領地である。

両国合わせて六十一万九千五百石。屈指の大大名だが、義直は実はまだ少年だ。この慶長十六年、十二歳になったばかりである。もとより、この少年では一万石の小封でも支配するのは難しい。況やこれほどの大国、それも要衝の地だ。関西から関東、東海へ下ろうとするには、尾張・美濃の地を踏まねばゆけない。家康の巧妙な配慮だ。

そのために成瀬隼人正のような有能な家老がいる。

稲富は以前、細川家に仕えていた。関ヶ原以前である。

かれは戦後、細川家を浪人し、この尾張徳川家へ仕官したということを仄聞していた。

（その稲富が、なぜ、野盗などを）

あの老齢で、野盗狩りを命じられたわけではあるまい。伊賀守を称しているとすれば、かなりの身分である。自ら、一人で行動していることも、不審であった。

清次郎が、われにかえったときは、稲富の姿は、闇にまぎれてい、そして足元に転がっている二人の野盗はむくろとなっていた。

その夜、清次郎は名古屋城下の木賃宿に泊った。

かれがこの地を通ったのは二年前である。

まだ名古屋には義直はいなかった。それまでは尾張清洲、つまり織田信長の城にいた。

家康が、名古屋への転居を命じたのは、二年前の十一月である。翌十五年から、諸国の大名へ名古屋築城の御手伝いを命じて、漸く去秋、竣工した。この御手伝いの大名の中には肥後の加藤清正などもいて、高麗陣の経験を生かして難攻不落の石垣組みをこころみているという。

清次郎は、この名古屋城を見るのも楽しみにしていた。

翌朝、顔を洗っていると、客が来たという知らせだった。

はじめての土地で、客などあるはずがなかった。

が、二人来ていた。一人は武士であり、一人は馬の口とりだった。

「吉岡どのですな。てまえは稲富伊賀守の家臣で、倉橋志摩と申す」

主命で罷り越したと言った。朝餉を差し上げたい、屋敷へ御出で願えぬか、というのである。

昨夜、誰かに尾行されたのだろうか。

「よく、ここがわかりましたな」
道々、清次郎はちょっと皮肉をこめて言った。
「容易でござる。西からの旅人は、おおむねこの界隈の木賃に宿りなされる」
志摩はむっつりした顔で答えた。
稲富伊賀守は、屋敷の陽あたりのよい縁側で鉄砲の手入れをしていた。
「昨夜は、卒爾をいたした。粗餐を差し上げようと思うてな」
「いつもかようなことをなさるのですか」
「いつも、とは？」
「野盗を倒して救った旅人に、馳走なさること」
「ははは、左様なことはない」
「すると、てまえには」
「吉岡一門、とあれば、あのままにわかれもなるまい」
それは、兵法の名誉を尊重するという意味なのか、それとも、兵法者ゆえに、試合を希むということなのか。
「御存意、謝すべきかどうか。鉄砲と京流の剣では……」
「太刀打ち出来ぬ？」
「いや、対等に立ち合うものではござるまい」
「吉岡どの、古い」

「………」
「もはや、当今の戦は、一人一人、名乗りをあげて刀を打ちあうものではあるまい。鉄砲玉はどこからでも飛んでくるものじゃ」
「どこからでも？」
「左様、戦場ではな」
「往来でも飛んで来ますな。昨夜の二人は、まさか、闇の中から飛んでくるとは思いもせざったろう」
「左様さ」と、一夢は大きく頷いた。
「あやつらは、野伏りじゃ、旅人を威すよくない奴じゃ、わしの鉄砲の的になったゆえ、無駄死ではあるまい」
「………」
それは当代鉄砲の第一人者たる稲富一夢にして言える言葉であった。思い上りには違いない。が、その道一すじに来た老人の自信が、清次郎の反撥を許さなかった。
「ま、野伏りのことなぞどうでもよい」
「………」
「おぬしを招いたのは、粗餐は口実」と、歯の抜けた口が、声のない笑いを見せて、「実は、京流の真髄を拝見したいと思うての」
「いや、てまえは、まだ若輩でござれば、当流の奥義をきわめておりませぬ」

「ほう、これは謙虚な言葉を承る。兵法者と申す者、十人が十人、高慢で、鼻持ちならぬと思うたが」
「兵法者にもいろいろござれば」
「そうかな。わしが逢うた奴は、いずれも、腕自慢での」
「てまえも、当流を継ぐほどになれば、あるいは高慢の体（てい）にもなるかもしれませぬ」
「ははは、それでは遅い」
「遅い？」
「うむ。わしはこの世にいない」
　他人事のように、静かな表情なのである。
「これまで、多くの兵法者と試合をした」
「……」
「ただ、京流とだけは、未だ、手合せをせぬ」
　鉄砲と刀とどういう〝手合せ〟を望んでいるのか。清次郎はこの老人の言葉に警戒した。ずるずると引きずりこまれそうな怖れを感じた。
「聞く、京流には〝矢切りの術〟というのがあるそうじゃの」
「——如何にも」
「飛来する矢を切る！　ならば、鉄砲玉をも受けとめられるか」
「……」

「出来ぬ、かな」
　出来ないといえば、如何にも役立たぬ兵法のようであった。老人の言葉は、若者を煽り立てて、試合に持ち込もうとしている。
「その御返事は、早急にはできませぬな」
　清次郎は、故意にあたりを見まわして言った。
「天下の尾張六十二万石。その御家中である稲富伊賀どのが、京流の青二才との試合に敗れたとしたら、無事では済みますまい」
「なんの、斟酌（しんしゃく）無用」
「いや、この身のほうが心配なので」と、清次郎は笑い声を立てた。「この身が無事に尾張から出ることが、かないますまい」
　かれは廊下の端に控えた倉橋志摩を見、さらに垣根のところにうずくまった二人の家来を見た。
　この屋敷の広さは、稲富伊賀守の様子から見ても、その輩下は少くとも五百人はいよう。公平な試合であっても、無冠の旅の兵法者が無事に脱出できるとは思えない。
「つまらぬ心配を。わしの名誉にかけても、左様な、卑劣なことはさせぬ」
「貴殿が生きておれば、の話だ」
「……」
「死んだ場合の話をしておる。死せる孔明、生ける仲達を走らす、というが、三国志のように

は、現実はいくまい。稲富伊賀守の威光がそこまで一門輩下の衆を差配できるかどうか」
　清次郎の言葉は辛辣に聞えたはずである。
　稲富伊賀守は呵々大笑した。如何にも自信と誇りに満ちた様子を見せながら、しかし、どこか虚ろなひびきは蔽えなかった。
「左様に心配なれば、暫く、逗留してはどうじゃ。木賃の宿よりは、美味いものがある」
　その申し出を受けるのに清次郎は吝(やぶさ)かではなかった。
　武蔵の行方をたずねて、もう七年になる。路銀も豊かではなかった。永い放浪の間に、いろんな智慧がついている。路銀を稼ぐこともおぼえた。名ある兵法者を訪れて試合をし、打ち負かせば、二、三ケ月の費(つい)えは出る。
　客殿は別棟だった。
　清次郎を案内してくれたのは、梢(こずえ)と名乗る女だった。
　十六、七の娘である。老人の孫に当る年齢だが、実の娘だという。
　笑いもしないで、梢は言った。
「羞ずかしいことでございます」
　何が羞ずかしいのか。
　祖父ほどの年齢の父を持ったことか。だが、逆算してみても、梢は、稲富が四十三、四のころの子だ。男の場合は、そうおかしいことはない。
　世間の通り相場では、孫に当るわけだから、老人には目の中へ入れても痛くない可愛さであ

ろう。
「一夢どのには、可愛くてならなんだであろうな」
「はい、そうらしゅうございます」
　やはり、笑いもせずに言うのだ。
「人並以上に、可愛がられました」
　衒(てら)いや、誇張ではなく、むしろ、冷たいほどの言い方だった。
「なれば、倖せであろう」
「いいえ」
　梢はかぶりを振った。
「もの心ついて……倖せと思ったことはございませぬ」
　普通の娘の口から出た言葉なら、我儘からくるものにしか聞えない。
　だが、梢の場合は、むしろ、怒りに似たものがあった。その思いを裡(うち)に秘めている。
　父娘の間に、何があったのかわからない。
　それは外部の者が詮索することではなかった。
　梢としても、父娘の相克を無縁の者に知らせたくはないのだろう。
　その娘のことを、一夢はこう言った。
「何せ、年をとってからの子じゃゆえ、可愛がりすぎてのう、ずんと我儘女に育ててしまったわい。わしの娘なのに、鉄砲はいやじゃと申す」

「それは残念でしょうな」
「残念などと生温(なまぬる)い言葉では、わしの胸の裡(うち)はあらわせぬて。一体、何をはじめたと思う？」
「さて、ほかに何か」
「手裡剣じゃよ。手裡剣を打つ」
　家中に手裡剣の名手がいる。北山備俊といい、北山備州流といえば、ただ尾州家中だけでなく、江戸でも知られているということだった。
「ほう、梢どのが……」
　意外ではあったが、鉄砲とちがい、これは兵法の一つである。清次郎としては、好感を抱かざるを得ない。ところが、梢の手裡剣と試合をしなければならぬ羽目に陥ったのである。

三

　挑んで来たのは、梢自身だった。
　稲富屋敷に逗留して五日目だった。
「京流の矢切りの術を」
と、彼女も口にした。
「矢切りの術があれば、手裡剣を払うのは雑作もないことでございましょうね」
「どうかな。相手しだいであろう」
「わたくしの腕前では」

「まず、難しかろう」
「――女の腕を、あなどりなさいますか」
「あなどりはせぬが……」
　清次郎は、ややとまどった。何を言いだすのかと思った。梢が、そういう態度を見せるとは、思いがけなかったからである。
　いや、自惚(うぬぼ)れていたわけではない。が、その前夜、梢は、かれの部屋を訪れている。
　夜半に、ふと眼がさめた清次郎は、庭先に足音を聞いたように思った。
（来た？……）
　あたりを憚る足音であった。
　清次郎の手は、枕元の刀にかかっていた。
　足音は忍びやかに近づき、沓(くつ)脱石のところまで来た。
（入ってくるか？）
　まさか、稲富ほどの男が、暗殺の手をのばすとは考えられない。
　また、そんな理由は何もない。
　すると、そこに来たのは誰なのか。何のために？
　清次郎は、凝(じ)っと気配を窺っていた。
　その人は、かなり長い間、そこにいた。そこで何をしているのか、音はしなかった。ただそ

こにいる。

こちらから咎めるのは容易であったが、他家の客なのである。稲富家の者が夜半とはいえ、そこらを散策するのを咎めるのは、筋ちがいになる。

闖入してきたとき、はじめて、その非をなじることが出来るだけであった。

その人は、そこに長い時間いた。

静寂の中で、ほっと吐息をつくのが、わかった。それは反射的に、

（梢ではないか……）

と、思わせた。

やがて、立ち去る気配がした。

清次郎があとを追わなかったのは、おのれの立場を思ったからである。梢の心を獲ってどうなるものでもなかった。かれは、宿敵宮本武蔵を討たねば、京へは戻れないのだ。その目的を果すことが、京流吉岡一門の名を存続させることであり、清次郎重賢を生かす唯一の道であった。

しかし、兵法者とはいえ、若い美しい女に慕われることは、悪い気持ではない。

翌日、清次郎は爽やかな笑顔で、梢に話しかけている。が、反応は冷たかった。予期しない冷たさであった。

前日よりも、一層、頑になったようであった。

そして、あの手裡剣の試合を申し込んで来たのだ。

清次郎は、梢の腕前をあなどったのではない。

昨夜の態度とは、あまりにも違った女心の不思議さに、まだ、とまどっていたにすぎない。

梢は言った。

「——立ち合ってみればわかります」

「お覚悟なさいまし」

女にこうまで言われて、後へ退くことはできなかった。

「よかろう、だが、試合となれば、容赦はせぬ」

「わたくしも」

梢のその声には、なぜか羞じらいに似たものがあった。

手裡剣と、剣の試合である。稲富一夢と門弟の重だった者が居並ぶ中で、それは行われた。

距離は三間。梢の手には、手裡剣が四本握られていた。左手である。

清次郎は袴の股立ちをとっただけの姿だった。かれはまだ、その場になってもためらいを感じていた。

稲富伊賀守一夢が目に入れても痛くないほど可愛がっている娘を、その眼前で斬ることができるか。

そして、昨夜のあのひそかなふるまいには女の真情があったはずであった。

「吉岡さま、お覚悟！」

凜然たる声とともに、手裡剣が飛来した。顔に向って来たのである。これも意表をつくもの

だった。

たっと顔をふって避ける。間をおかず、二本目が胸へ。三本目は、また顔へ。

清次郎が抜刀したのは、四本目が飛来したときであった。

鏘然と、かん高い音がはじけた。抜きざまに、鍔ではねとばしたのである。宙に白刃が一転し、梢の頭上へ――

四本の手裡剣を打ち尽くした梢である。よろよろと崩れて膝をついた梢の、諦めの表情が、ふっと、間一髪に、刀を止めさせたのであった。

「…………」

一夢をはじめ、並いる鉄砲衆の面々が、一様に、はっとなった。次の瞬間には、梢の頭上から血が噴く、と見えたのが、時間が停止したかのように、ふっと止ったのである。

清次郎は、刀をおろした。

斬られると、観念していた梢は、不審の眼をあげた。

「――なぜ、お斬りになりませぬ」

むしろ、怒りさえこもっている語気だった。それは、おのれの未熟な腕前へ腹だたしい思いを抱いているかのように見えた。

清次郎は、黙って刀をおさめた。

「吉岡さま！」

なおも、とがめようとする梢に、清次郎は一言、

「勝負はあった」

と、言い捨てた。

そのときは、稲富一夢の姿は、どこかへ消えていた。娘の未熟さと、清次郎の卓抜な腕に言うべき言葉がなかったからにちがいない。

夕方になると、毎日のように、一夢はどこかへ出かける。むろん、鉄砲を抱いて。

それがあの夜のような、野盗撃ちであることは、明らかだった。

時代はまだ乱世の劫火が、熾となって、くすぶっている慶長時代だ。城下を一歩でると治安は乱れている。野盗が跳梁している。山に山賊、海に海賊は当り前だった。

野盗に遭するのは、難しくない。一夢老人がしかし、かれらを撃つのは、役目でないとすれば、なんのためであろうか。功なり名遂げ隠居の年齢になったいま子供じみた正義感でもあるまい。

その夜――

梢がまた、来た。

やはり昨夜と同じように、そっと足音をしのばせてやってきた。

そこまで来ながら、声をかけるでもなく、沈黙して、吐息をついているのだ。

清次郎は黙っていられなかった。かれは雨戸を開けた。そこに白装束の娘の姿があった。

「梢どのか」

「はい……」

「昨夜も見えられたな」

「まあ、どうしてそれを」

「そのくらいわかる。用があるのなら、入るがよい」

梢はためらいを見せたのち、清次郎の言葉に従った。

「その姿は、一体、なんとされたのだ」

「清次郎さま！」思い迫った目（まな）ざしだった。

「どうか、梢を斬って下さいまし」

「なんと!?」

「兵法者の試合に敗れた梢は生きては居られませぬ。恥をさらしておめおめと、余生を永らえたくはございませぬ」

「恥？　ははははは、これは大仰な。たかが刀と手裡剣の勝負。そこまで固苦しく考えるには及ぶまい」

「――私が、女であるから」

「いや……そういうわけでもないが」

「女ながら、稲富伊賀の娘でございます。試合に負けては、生きていられませぬ」

「ははは、この尾張名古屋は、左様に固苦しい士（し）道を強いるところか。ならば、何もここにとどまることはあるまい。尾張にばかりは陽（ひ）は照らぬ。どこに行こうとも、六十余州、天道（てんどう）と米の虫はついてまわるものよ」

「どこに行こうとも……」と、梢は復唱するように言った。「恥は、汚名はついてまわるものでございます」

「……」

「それが武家の世界でございましょう」

「……」

「斬って下さいまし……もう、これ以上、耐えられませぬ」

これ以上、とはどういう意味か。

それほど、差し迫ったものとは思えなかった。何がそこまで、梢を思い詰めさせたのか。

清次郎が不審に思ったのは、昨夜の彼女の気配も、今夜のそれも同じに思えたことである。負け試合が、死を望ませたのではない！

「梢、真実（まこと）、死にたいか」

「あい……」

「死ぬがよい。もしも、おれに抱かれても尚、死にたいと望むならば」

「え!?」

愕（ぎょ）っとした梢を、清次郎の手がとらえた。あっ、いけませぬ！　と、梢は身をそらしたが清次郎は手を止めなかった。もはや消しようもなく、荒々しい情火が焔をあげていた。その壮軀をかりたてたものは、思いをとげるまで、熄（や）むとも見えなかった。

抵抗は最初だけであった。梢は清次郎に押し倒されると、素直に下肢をひらいた。彼女の思

いはそのことだけにあったのではあるまい。が、清次郎を憎んではいなかったことはその行為でも明らかだった。清次郎のものがからだの中心を貫いたとき、梢は、悲鳴をあげ、苦しげに腰をよじった。が、逃れようとはせず、清次郎に強くすがりついてきた。

果ててのち――

梢は、かれの胸に顔を伏せたまま、凝っと陶酔に浸っていた。

彼女が見せた喜悦のさまは、死神を追い払う効果があったようである。

夜が白々と明けるまで、梢は清次郎の肉体の感触と体臭の中から離れようとはしなかった。

彼女の〝恥〟の意識が、奈辺にあるかがわかったのは、ふたたびの美酒に酔った後であった。

「父は、尾張に来ても、汚名はついてまわりました。……一度ついた汚名は、土地を変っても、消えないのです」

稲富伊賀守直家は、以前の名を祐直と称った。

細川越中守忠興に仕えていたころである。慶長五年、天下分け目の関ヶ原の戦いがあった。石田三成は徳川方与力の大名の妻子を人質にして、味方に引きこもうと計った。細川忠興も狙われた大名である。夫人のガラシャは、人質を肯んぜずに、いさぎよく自害して火中に死んだといわれる。

その屋敷に稲富祐直はいた。かれは火中から逃れた。

周知のように関ヶ原の戦いは、徳川方の大勝に終り、細川ガラシャ夫人のいさぎよい自害は、武将の妻の鑑としてほめそやされた。

その反動もあった。稲富祐直の振舞いは卑怯未練なものに見えた。ほかにも一族や腰元などは脱出している。が、稲富が一人悪しざまにいわれたのは、かれが武士だからであり、当時、鉄砲では、並ぶ者なしとされたゆえんであろう。

「イザとなれば、鉄砲とは屁の役にも立たぬか」

「稲富の逃げ鉄砲」

などと、罵る者もあった。

祐直は致仕した。一説には逃亡して、井伊家にかくまわれたとされている。

かれが浪人したと聞くと、しかし、誘う手は多かった。立場が異なれば解釈が違ってくるのが世間である。

殊に鉄砲を蔑みながらも、その戦力価値は否定できないのだ。徳川義直の家老成瀬隼人正が、浪々の祐直を招いたのは、その意味にはほかならない。家康直々のアツカイ（和解）ともいわれる。大名も濃尾六十二万石ともなれば、世帯が大きいから、些事のこだわりは少くなる、と見られた。

一面では、そう言えた。が、やはり武士にとっての最大の恥辱は、敵前逃亡である。

非難は冷笑と蔑視に変ったが、やはりかれにとって、重い壁であった。かれは名を変えた。直家と名乗った。待遇は悪くなかった。かれは伊賀守に任官した。六十二万石の大大名の戦闘部隊の前衛たる鉄砲足軽総指揮となれば、高禄と地位も当然であろう。そして、還暦を迎えて、かれは一夢斎と号した。

名を変えたからといって、一度、失われた名誉は取戻せるものではなかった。

そして、その恥辱は、かれ一人ならず、娘の梢にも及んだのだ。

美貌に生れながら、暗い青春を余儀なくされた彼女の懊悩は、父の逃亡の理由が、幼な児にあるとされたことである。

「あの可愛ゆらしさじゃ、親として、無理もないわさ」

幼な児のときのことだ。梢に責任はない。母は産後の肥立ちが悪くて死んだというから祐直の男の手で育てられたには違いないが、梢がすべてだったかどうか。

真意が奈辺にあれ、梢が普通の娘のように、華やかに浮いた気持になれなかったのは無理もない。その梢をさらに悲しませていたのは、一夢が、野伏り撃ちと称して、出てゆくことである。

「長い間、ずっと書きものをしていました。砲術の伝書だとのことでした。それが書き上ると、やはりまだ、至らぬ(未熟)と称って、玉薬部屋に籠ったり……そして、試し撃ちは、生身の人間が相手でなくてはと申して参ります」

いま、一夢が実験していることは、火薬の強さと、距離による、その効力だという。

かれはムスケット銃に照尺を作って遠距離射撃による命中を可能ならしめた。だが、その効力はわからない。薄暮の中で、かれが野盗を撃ち、その効果をしらべていたのが、それだったのである。

清次郎は、暗然となった。

老いてなお、鉄砲一途に生きる一夢を、たたえるべきか。そこまで執念を持つ彼を非難すべきか。

あのときの老人の姿は、清次郎に異様な感を抱かせた。遠距離にも関らず、的中させたことの満足感には、一種の加虐性さえ見えたのである。

「あっ、清次郎さま、あたし、死にたくない。いつまでも、いつまでも、あなたさまと一緒に生きていたい……」

梢は、なおも、あの甘美な思いへの導きをもとめて、かれのものを両手で愛撫した。

「待て」

清次郎は、ふと聞耳を立てた。

外にある気配を感じた。梢が、忍んで来たのと同じ、人の気配である。それはいつ来たのか、しだいに遠ざかってゆく——

(一夢だ！)

一夢に知られた。

恥辱をかえりみないほど、溺愛した娘を行きずりの男に奪われた老人が何を考えるか。それは言うまでもあるまい。清次郎は、梢の気が狂ったような情熱に応えながらも、この屋敷を去ることを考えていた。

(一夢を斬ることになるかもしれぬ……)

清次郎は考えていた。かれは、一夢に辞去を告げて、西に向う道すじを聞いた。一夢に殺意があれば当然、襲ってくる。

黙って逃げてもよかった。が、それは清次郎の士道が許さなかったのだ。

名古屋の城下を出外れる三本松のところまで来たとき、突然、人影があらわれた。

「………」

清次郎は刀の柄に手をかけた。が、瞬後に、一夢でないことを知った。闇に女の香がしたのである。

「梢か」

「はい。清次郎さま。私を捨てて、どこへお出でになりますの」

蒼いほどの面だった。凄艶といってもいい梢の美しさであった。梢の手には、あの手裡剣が握られていた。

「あ、危ない」

梢が叫ぶのと、その手から、手裡剣が闇を裂いて奔るのと同時だった。轟然たる銃声はすぐ近くで聞えた。火が耳もとを掠めた。梢は第二撃の手裡剣を手にしたまま、のけぞった。その胸もとから血が吹くのが見えた。

「梢!」

清次郎がかき抱いたとき、火薬の臭いが流れ苦悶の声が背後で起った。築地塀の間から、よろめき出て来た一夢の胸もとには、ぶっすりと、手裡剣が突っ立っていたのである。

「なんと……」

清次郎は言葉もなかった。一夢と梢の相撃ちに終ったすさまじさに、かれは戦国の世の非情さを感じたのである。

一夢が地上に倒れるのとひとしく、梢も息絶えている。梢の口が動いていたが最後の言葉は、なんであったろうか。清次郎への想いか、哀れな父への憐愍だったろうか。闇の中に硝煙は吹き流されることもなくいつまでも渦巻いていた。

狂い官女

一

その女に呼び止められたとき、吉岡清次郎は、夢でも見ているのではないかと思った。

闇の中に香が匂った。麝香（じゃこう）の匂いであった。

久しく香料の匂いを嗅いでいないのだ。清次郎は、おのれの鼻を疑った。いや、眼を疑った。匂いなどというものは、かなり気分的なものである。目の前の非現実的なものが、その匂いを感じさせたのではないかとすら思った。

「——もし……」

と、女はあたりを憚るように声をかけてきた。

「旅の御方（おかた）……」

「——おれか？」

清次郎は足を止め、女を見た。

そこは村はずれの小さな御社（やしろ）の前であった。あたりにほかに人影はない。

日が暮れたばかりで、清次郎は、道を急いでいた。

今夜の宿を見つけねばならないのであった。

こんな辺鄙なところには、木賃の宿というものはない。

伊豆の南の果てであった。昼間、妻良（めら）というところを過ぎてきた。この村は、たしか、下賀茂と呼ばれている。

その村の西のはずれであった。

清次郎が驚いて、おのれの眼を疑ったのは宵闇の中で微笑んでいる女性（にょしょう）が、あまりにも、優艶なものに見えたからである。

このあたりの方言は、清次郎には、わからないことが多い。かれは、北から南へ西伊豆を下ってきたのであった。言葉の半分はわからなかった。すでに宮本武蔵の影を追って漂泊の旅が数年つづいている。各地を歩くと、それぞれの方言の違いはあっても、正確には把握できなくても、大体の意味はわかるようになっている。旅人の勘が働くのであろうか。

意外さは、その女の言葉に、

〝京〟

を感じたことである。

「はい、あなたさま」

と、女は答えた。

「突然、お呼び止めして、お宥（ゆる）し下さいまし」

「……」

「あたくし、このあたりの者でございますが、今宵、どこぞへ、お泊りのところがおありでしょうか」

「いや……それはないのだが」

と、清次郎は、まだ用心を解かなかった。

漸く、夢ではなく、現実の女だとわかっても、そして、その心を酔わせる女の薫香にしても、ほんものだとはわかったが、そうなると今度は、どうして、こうした美しい女が、こんなさいはての地にいるのか、その疑問が湧いて来たのであった。

「そなたは？」

「やすと申します」

「お安どの……この土地の者か」

「いいえ」

と、かぶりを振っただけである。

多くを語りたがらない。小袖の姿といい、かつぎをかぶった、その手の腕のほそさや、しなやかそうな姿態は、どう見ても、都会の女——京か、江戸か、堺か、それら都邑の匂いがある。

南伊豆といえば、当時は、まだ人が住んでいるかどうか、疑いの眼を持っている人も多い。

このさいはての地に来て、こんな美女に出逢おうとは、思いがけないことであった。それも女の方から声をかけられようとは。

女が動くと、ふっと、麝香が夜気に匂う。それは、女なしで数日を過している若い清次郎には、たまらなく煽情的であり、かれは惹かれるものを感じた。

「そなた……」

京の女ではないか、と問おうとして止めた。

こうして声をかけてくる女が、どういう種類の者か、何が目的かは、およそ想像がつくのである。

どういう事情があるかわからないし、深く立ち入るのは、よくなかった。清次郎自身、大望を抱く身なのだ。

余分なことに関りたくない。この地へ来たのも、宮本武蔵が下田というところに居るという噂を聞いて来たのである。

武蔵という仇敵を探しての旅なのだ。女を抱くことがあっても、心を奪われてはならぬ。

その自戒がつねに、清次郎の心に働いている。

男の情欲を霽らすだけの女には、深くその素姓などを問うことはない。問うことは、関りを深めることになる。兵法者は非情でなければならなかった。

「——宿を、世話してくれると申すのか」

「はい」

「頼もうか」

言葉少なに清次郎は言った。

「むさ苦しいところでございますが、どうぞこちらへ」

清次郎が案内されていった先は、そこから二、三丁行って林の中の小路を暫く行った丘の麓であった。

前に小川が流れていて、かなり大きな家構えは、このあたりの長者か、名主ででもあろうか。土塀をめぐらして、中に望楼のようなものが見える。おそらく、このあたりの治安は悪いのであろう。

女はその塀について廻ると、小門を開けて手招きした。

清次郎は、必ずしも女の美しさに惹かれたのではない。が、一応の興味を感じたのは事実だ。

（女賊の類いではないか？）

脂粉の香を以て、旅人を誘い、毒を盛るなりして有金を奪う。よく聞く話である。

（まさか、この女が……）

そうした女の一人とは見えない。清次郎はおのれの直感を信じた。

「木賃は幾らだ」

部屋へ通されると、清次郎は、あらためて問うた。

「そのようなもの」

と、女は微笑んで、

「左様な商売ではございませぬ」

これは意外すぎた。

商売ではないとすると、何であろう。清次郎はこの南伊豆にはじめて足を踏み入れている。知り人など居るはずはなかった。

だが、女のほうに、何か魂胆があるのではないか。それがどういうものか、清次郎にはまだわからない。

が、木賃をとらぬ、となると、かえって心配になる。

（タダほど高いものはないからな……）

清次郎の姿は、誰が見ても旅の兵法者であり、その姿を見て声をかけて来たとなると、危険な仕事に利用されるのではないかと、思われた。これまでにも、度々、そういうことがあった。路銀稼ぎで、農民に傭われる者もいる。大名や代官への対抗策に旅人を金で傭うということは、昔からよくあることであった。

幸い、清次郎はまだそこまで零落はしていない。

食事が出た。タダにしては悪くはない。鮑や海老や若布などのほかに刺身があり、焼魚もある。海が近いということは有難い。清次郎のように、海に遠い京育ちには、こうした海産物は、有難い。こんな珍味を口に出来るのも、宮本武蔵を追っているお蔭かと、皮肉な立場が苦笑される。

その食事の間中、お安は、ずっと給仕をしてくれた。

食事が済むと、湯の支度が出来ているという。

このころ、連日の入浴の習慣は地方にはない。よほどの豪族でなければ、しなかった。

旅の身には、入浴は有難いが、また危険でもあった。裸身になったときが、一番危ないのだ。どういう連中が、陥穽（かんせい）を設けているかわからないのである。

だが、お安の方も、その辺のところは心得ていた。

「わたくしがお世話いたしますよ」

と言って、その場でするすると帯を解き、着物を脱いだのである。肌襦袢と腰のもの——年若い女が、あらわな姿態を曝（さら）したのは、危害を及ぼす意志のないことを示したのであった。

むろん、こういう娘一人が、何をしようと清次郎には、危険はないが、どこになかまが潜んでいるかもしれない。その心配がないことを女は、身をもって示したのだ。

「どうぞ、湯殿へ御案内いたしまする」

と、小腰をかがめて、先に立った。

こうなればもう度胸を決めるしかない。清次郎は、やはり着物を脱ぎ、下帯一本の姿になった。

旅のうちに鍛えられて、隆々たる体軀になっている清次郎である。刀傷もいくつか残っている。顔はまだ、若い品の良さを残しているがその肉体の素晴しさは、女には圧倒的であった。

お安は、顔を赧（あか）らめ、目を伏せた。

清次郎は、小柄（こづか）を一本髪にさして、脇差は手に持った。これは常識だ。

湯殿は立派なものだ。こんな辺境にこれほどの風呂の設備があるなど、信じられないほどだ。

すでに濛々（もうもう）と湯気がこもっているのを見ると、清次郎は、

「火を落して貰おうか」

と言った。

「は？」

けげんな表情をむけるお安に、

「心得のある兵法者は、蒸し風呂には入らぬ」

ここはすい風呂と呼ばれる、桶風呂である。お安は、清次郎の言葉が解し兼ねたようだ。

兵法者の言葉である。湯気ぬきの無双窓を開き、入口の戸を一ぱいに開け、湯気がすっかりぬけてから、清次郎は湯殿へおりた。

脇差は、板戸を開け放した脱衣の場の羽目板に立てかけた。これだと入浴中も、刀の所在がわかるし、万一の場合に咄嗟に身を処することもできる。

清次郎は、そうやった上で、檜の香りがする湯槽に身を沈めた。

お安はその間、流し場の簀（す）ノ子の上に腰のもの一つで膝（ひざ）をついて待った。肌襦袢は脱いで、双の乳房もあらわにして、その胸を羞ずかしそうに、両腕で隠すようにし、身をちぢめている。

そんな風情が、ふっと清次郎の心を動かした。

（何か謀事（はかりごと）があるやもしれぬ……）

と、疑ったことが悪いような気がした。その女の半裸の姿からは、悪心は想像できない。女

がそんな姿を彼の目に曝したのは、害意のないことを示そうとしたのではないか。
とすると、猜疑心を恥じねばならぬ。
「――お安、どのと称ったな」
清次郎は、湯の中から声をかけた。
「はい」
「そなた、寒くないか」
「いいえ」
「そなたも、入ったらどうだ」
「……」
「いやなら奨めぬが」
「いやではございませぬ。でも……」
「でも？」
「あまりに不躾けで」
と、羞じらいの微笑を見せる。
清次郎はそんな女に、しだいに愛しさを感じながら、
「左様なことはない。この身も、一介の旅牢人だ」
「でも……」
「よいと申しておる」

その言葉に魅力があったように、お安はこっくりした。
「はい。では、お言葉に甘えまして」
立ち上って腰のものをとった。腰のものは紐がついていない。端を折りこむようにしてまとっているだけであった。
活動的に、きちんと紐や帯を締めなければ気が済まない兵法者の気持からすれば、その女の着物の寛やかな着付は、妙な解放感を感じさせるのだった。
その腰のものを、女は戸口から手を伸ばして、外の横木にひっかけた。
それから、湯槽のところに腰をかがめて腰湯をつかい、
「御免なされませ」
と、入ってきた。
清次郎は胸が騒ぐのをおぼえた。
燈油を入れてあるのは大きな貝殻である。このあたりでは、自然の道具であろう。
が、女の言葉といい、楚々たるふるまいといい、どう見ても、優雅な、京ぶりであった。
（こんないなかに……）
どうして、こういう優雅さを身につけた女がいるのか。
そして、その女が、なぜ、声をかけて来たのか。清次郎には、どうしても納得いかないことであった。
「そなた……」

湯に身を沈めた女を、近々と眺めて、清次郎は言った。

「如何なる素姓か」

「……」

「あかせぬか」

「はい……でも」

「秘密にせねばならぬことなら、敢て聞かぬ。が、われらには、解せぬゆえ」

「はい……御もっともなお疑いでございます。これには仔細がございまして」

そう言ったきり、お安は、口を噤んだ。

あとを言おうとしないのである。

それなら聞かないまでのことだ。清次郎は、

（素姓などどうでもよい。それより、この女、おれの伽をしようというのか）

どうもそうらしい。

見ず知らずの若い女が、旅の男の前で、一糸まとわぬ裸身を曝すということは、その意味でなくてなんであろう。

それも、身ぶりそぶりに、羞じらいを見せ、嬉しげな微笑を洩らす。湯に温まった花でこうもてなされては、兵法者の逞しい肉体は、沈黙してはいない。

「お安！」

と、いいざまに立ち上った清次郎の下腹部に、逞しく勃起した肉塊を見ると、お安は思わず、

面を両手で蔽い、流し場にうずくまってしまった。

「そなた、せがれを慰める義務があるぞ」

清次郎は湯をはねて出るや、女の肩に手をおいた。

二

女は抗わなかった。それが目的だったことは、あとからわかったのである。彼女は簀ノ子の上に身を横たえた。

簀ノ子といっても板を張って隙間を作ったものである。腰のあたるあたりに、手拭いを敷いただけであった。清次郎の手が下肢をおしひらくと、両手で面を蔽って、促すように腰をゆすった。

清次郎はもうためらわなかった。

女は未通女ではなかったが、多くの男を知ったとも思われない。清次郎の怒張したものが入ったとき、微かに呻いて身をよじった。

それから、ひしとしがみついてきた。

豊かな乳房が、弾んで、胸毛にふれると、一層、女の口から切ない声が洩れた。

甘美な思いが全身を顫わせ、女体は官能的な動きで、かれに応えてきた。

湯殿であるという、その情況の特異性が、かれの昂奮を強くしたようである。かれ自身、意外なほどであった。ここのところ、長く女に接していないせいもあった。

かれが離れても、女はまだ横たわっていた。

が、はっと醒めたように身を起すと、

「お宥し下さいまし」

と、詫びながら、手桶に湯を汲んで、かれの下半身に注ぎ、丁重にかれのものを洗うのだった。

その細い指は、貴重な宝物を扱うようにやわやわと動いて、くまなく、ふぐりのひだまで洗うのだ。

「――よかったな、お安。かようなところでそなたのような女性に逢おうとは」

「お羞ずかしゅうございます」

何度も何度も、湯で洗う。まるで、女の指は、それを楽しんでいるかのようであった。

その柔らかい指の動きで、清次郎は再び、血が漲ってくるのを感じた。

それは、お安にも、すぐとわかったらしい。彼女は、素早く水槽から水を汲むと、さっとかけた。

「こりゃ、何をする」

「お宥し下さいまし、なだめたのでございます」

微笑しているのだ。お安はひとたびの喜びに満足すると、さらなるものは求めたがらぬように、清次郎の水滴を拭って湯殿から出ることをすすめた。

女が求めないことを、無理強いすることもなかった。冷水をかけられて、ふたたび勢いを失ったおのれのものを眺めて、清次郎は苦笑した。

が、湯殿から出たとき、かれは庭先に、ふっと動く影を感じた。

素早く、手が刀に走る。

小柄（こづか）を抜きとるのと、一閃、夜を裂いて飛んだのが、殆ど同時である。樹木が騒いだ。そのまま、影は逃げ去った。

勝手を知らぬ邸内だけに、深追いはできない。清次郎はあきらめた。

「怪しいやつを見なかったか？」

清次郎の問いに、お安は静かに面をふって、いいえ何も、と、だけ応（こた）えた。

三

清次郎はこの屋敷に、もう一ト晩泊っている。夜明けとともに出立しようとしたのを、お安が引き止めたのである。

「要用がある。かようなところに留まっておれぬ」

というのを、お安は、泣かんばかりに押し止めた。どのような御用か、わたくしで出来ることなら、申し付けて下さいませ、という。

なるほど、それも便法だと思った。下田というところに、宮本武蔵がいると聞いてやって来たのだ。実際に居るかどうか、お安を探りにやってからでも遅くない。女でも、これは難しい仕事ではない。

お安は遅くとも夕方までに戻ります、といって出かけた。
その日、清次郎は刀の手入れなどをして過している。かれをお安が引き止めたのは、夜の愉しみをもう一度、味わいたいからであろう、と思った。女のそんな真情は哀れでもあった。
夜になって戻って来たお安は、
「数日前に宮本というお侍がいたそうでございます。でも、いずれかへ立ち去って行先を誰も知らないとか」
また行き違いになったのか。清次郎は唇を噛んだ。
その夜――
お安は来なかった。寝所で清次郎は、お安がくるかと思った。
それほど待ち望んだわけではない。武蔵がどちらへ向ったかを探るのが必要だった。ひょっとして、こちらへ来るかもわからない。
下田を立ち去ったとすれば、東海道を北上したか、修善寺への山道をとったか、あるいはこの妻良(めら)を経由する、三つの道しかない。
海路を舟でいったとすればどうにも手のほどこしようはない。
とつおいつ案じているとき、衣(きぬ)ずれの音が聞こえて来た。
板戸が静かに開いた。
手燭の明りが流れてきた。
（お安か……）

と、思い、清次郎は、眠ったふりをしている。
だが、ふっと、
（別人か？）
そんな気がしたのは、女が入ってくると夜気に流れ出た香りが、お安のものとは違っていたのである。
手燭を二階棚に置くと、女は静かに着物を脱ぎはじめた。
打掛けがまずからだから落ちた。その着ているものの重みと数とが、お安ではないことをまず悟らせている。
（何者か？……）
夜気に漂う薫香も尋常のものではない。こういう鄙(ひな)びたところにはふさわしくない。
まるで、京の御殿にでも来たような感じだった。
女は最後のうす物をも脱ぎ捨てた。その柔らかいものが軽やかに夜気を揺すって、ふわりと落ちたとき、清次郎はふり仰いだ。
そこに女が立っていた。いや、美しい娘の裸像があった。
一瞬だった。
女は、さっと、手燭の火を吹き消したのである。
が、その一瞬に、清次郎は見ている。
白い裸身は息を呑むばかりの美しさだった。長く艶やかな髪は腰を蔽うばかりに長く垂れ、

白い肌には一点のしみもなく、滑らかだった。
　女は、一瞬の闇に身をかがめて、清次郎の夜具にすべりこんできた。
「……」
　ものをいわぬ。男のからだに夢中で裸身をすりつけてくるのだった。
　清次郎が拒否するには、あまりにも〝一瞬〟に見た女体が美しすぎたことだ。
　お安も醜くはなかったが、この美しさに比べたら、輝きを失うだろう。嘗て清次郎はこれほどの女を抱いたことがない。
　そして、何よりも、かれの若い壮軀を昂ぶらせたのは、その女体と動作に、やんごとない上﨟のみやびやかなものをも感じさせられたことである。
　荒い男の胸に情感が湧いた。かれは、女体を抱きしめ、唇を吸った。女の方でも、それに応えて、強く吸ってきた。舌がすべりこんできたとき、女の動悸の高鳴りを、はっきりと清次郎は聞いた。
　唇を合わせ、舌をまじわらせたのは、甘美な陶酔への能動的な行為であったが、その女のはげしさには、何か、清次郎の言葉を封じようとする意図が感じられた。
　女のからだは、二十歳前後と思えた。はっきりとはわからないが、そのくらいであろう。抱きしめると折れるのではないかと思われるばかりの骨の細さや、まろやかな肉づきと、その感触、そして、甘肌を包む薫香が、女の情熱に一層、強く匂って、かれを狂おしくするのだった。
　このやんごとなき女性が――

　その手はあくまでも柔らかく、その細い指は、珍しいもののように、清次郎の巨きく硬いものをつかんで、やわやわと指を上下させた。
　その女の行為は、不甲斐なくも、それだけで清次郎を、爆発させようとした。耐えた。かれもまた、女の花芯をまさぐっている。
「そなた……」
　語尾はふたたび女の口に吸いとられるように消えた。
　清次郎の指が花芯にとどいたとき、そこはすでに、たっぷりと夜露を吸ったように潤み、柔襞のせつない呼吸さえ、指先に感じられたのだった。
「ああ……」
　女は、はじめて声をあげた。
　狂ったように頭をふり、長い黒髪を千々に乱して、
「早よう……入れてたもれ」
　声を出すまいとつとめていた女の、それはいのちの叫びといえた。理性の仮面が脱ぎ捨てられ、そこには、男をもとめる、牝だけがあった。倖せをもとめる女の生の姿があった。
　清次郎が、おのれをとりもどしたのは、その女の言葉によってである。
　何者とも得体が知れぬままの、無言のもとめに応じることは、この若い兵法者の好むところではなかった。女は、性欲の捌け口にすぎない。女に主導権を握られていたような、暗黙の行為は、清次郎のどこかに残っている良家の子息の、弱い部分をひきだしていた。

いま、女の切なるもとめによって、かれは兵法者吉岡清次郎に還っている。かれの力強いものは、自信に満ちて、花芯を貫いた。

たまぎるような悲鳴の語尾は涙となり、嗚咽となり、女体は狂ったように躍動した。

まるで、十年も男のからだに接しなかったようなすさまじさであった。

枕はその頭から離れて転がり、水さしの土器も倒れたようである。が、そうしたすべてが、もはや女の念頭にはなかった。

ただ、男の逞しいからだだけだった。

「ああ、いい……こんなに、わらわは、ああ、とてもに、ああ、なんとしよう……」

きれぎれの、呻きとも叫びともつかぬ声を洩らして、女は、かれをもとめ、かれを吸い、深い淵に溺れた。

その刻は長く、夜気はために赤く染められたようであった。

そして、二人は、しとどに濡れた。まるで下腹部のその部分が、ひとつに融けあいただれて、流れるような——清次郎は二度放った。が、女はおそらく、五度も六度も、達したにちがいない、狂いざまであった。落ちたあと、ぐたりとなって、女は、投げだした四肢を動かす力さえ失っていた。

そして、闇の中で、胸だけをあえがせていた。

闇の底に白い胸の隆まりが見える。女の若さは仰臥していて、胸乳がかたく円錐状に光っているのを見ても明らかだった。

かたちが崩れていない。その隆起が、荒いあえぎの余波で、まだ高く低く、波打っているのだった。

ぐたりと四肢を投げだしたまま、汚れた部分の始末もしようとしないのである。

闇の中に栗の花の匂いが漂っている。清次郎も、ものをいう気はなく、陶酔の中に浸っていた。

かれもまた、そのままにしているのだった。

そのとき、まるで、闇の中の行為を見まもっていたかのように、どこかで鈴の音が起った。

その鈴の音は、しだいに高くなる。回廊を近づいてくるのだった。

まるで夢の中のことのように、清次郎は、鈴の音を聞いていた。快い陶酔の中で聞く妙な音色は、幽玄の趣を一層ふかめて、清次郎はおのれのいる場所を忘れた。まるで、京の御殿で、上﨟衆と不倫を楽しんでいるかのような気さえした。

その鈴の音は、板戸の前で止った。

「——お済みでございましょうか？」

それが、お安の声だと気がつくまでに、ちょっと時間がかかった。

返事はなかった。

女はわざと返事をしなかったのか、返事をする力も失くしていたのかわからない。ただ、あえぎが、高くなった。

それに応えるように、板戸が静かに開き、手燭をかかげたお安が入ってきた。

彼女はお湯を七分目入れた小桶を用意して来たのである。

まるで命令されていたかのように、その桶を持って入ってくると、女の腰のところにうずくまった。手拭いを湯で軽く絞っては、女の股間をゆっくりと拭い、桶の中でゆすぎ、またそこを念入りに拭っているのだった。

股間だけでなく、臍（へそ）のあたりまで、ゆっくりと手拭いを這わせ、内股も膝近くまで拭き、それから、すすいではまた、うしろのほうまでも、拭きとる。

女も、すっかりまかせている。

まるで幼児が母親にまかせるように、妹が姉にまかせるように、からだを拭わせているのだった。

お安が清次郎のそこへ濡れ手拭いをあてたのは、女の手当てがすっかり終ってからである。

その意味では、まるで、清次郎はこの女に仕える家来ででもあるかのようであった。

しかし、お安の手つきが、清次郎の方がぞんざいだったわけではない。むしろ、その手つきには、懐かしみがある。昨夜の甘美な思いを甦らしているようであった。

お安は、しかし、あの微笑は忘れていた。無表情なのだ。侍女としての当然の行為をしているようであった。

女は立ち上った。

するとお安は脱ぎ捨てた着物を拾いあげて、女のうしろから着せかけた。

女は人形のようにされるままになっている。そうしたことは、付焼刃でできるものではない。生れも育ちも、やはり常人とは違っているのだ。

女が元通りに着込むと、そのまま、清次郎を振り返りもせずに、すっと出てゆくのだった。

「おい、待て」

せめて名前ぐらい名乗ったらどうだ、と言いかけて、清次郎は眉をひそめた。あまりにも、女の態度が自然だったのだ。わざとらしさがなかった。またお安の態度もそうなのである。

普通の女だったら、何か一言ぐらい言うはずだった。

勝手に寝所に入ってきて、勝手に美酒に酔い、勝手に出てゆく。

いかに宿をかりたためとはいえ、女の尊大な行動には、腹立たしさをおぼえた。

男との交情に身も世もなくとち狂ったことですら、おのれだけの欲情の世界だったのではないか。

清次郎は、こけにされたような怒りをすらおぼえた。

「待て、そなたは一体……」

言いかけた言葉にふりかえったのは、お安だった。

「御挨拶は明朝に」

「……………」

「それまで、ゆるりとお寝（やす）み下されまし」

お安の声は、昨夜の湯殿の狂喜は、まるで別人だったように、冷たく静かなものであった。

四

翌朝、まだ暗いうちに、お安が来た。旅人は暁闇のうちに発つのが、普通である。灯の下で、お安はそっと金包みを差し出した。それは一目で、小判の包みとわかる、重さでありかたちであった。
「これは？」
不審の眉をひそめる清次郎に、お安は静かな声で言った。
「路用の足しにでもお持ち下さいますよう」
「草鞋銭か」
「……」
「――多いな」
これは皮肉であった。
「お金は多すぎるということはありますまい。何とぞ……」
口封じか。二夜の乱倫の代償か。鄙びた場所で女に買われたような、嫌な感じであった。
そういう気持を殊更に、お安は無視して、立ち上った。
「待て、事情を聞きたい」
「――お宥し下さいまし。私の口からは申し上げられませぬ」
たしかに、複雑な事情があるにちがいない。京のやんごとない上臈が、こういう南伊豆の地に暮しているというだけでも、不可解である。京や上方から見れば、当時、江戸というだけでも草深い土地であった。上方の者には、関東は、奈良平安の時代からの〝坂東〟という概念から抜けきれない。東海地方も、駿河の府中（静岡）は発展した都邑ではあっても、大洋に突き出た伊豆、それも南伊豆のほうは、辺境であった。中央的に意識されたのは韮山あたりまでである。
この南伊豆の妻良という地方一帯が、どういう意味を持っているか、清次郎にはまだ理解し難い。
清次郎は黙って立ち去ることにした。近所で聞けばわかることだ。
お安にしても、あの上臈にしても、夜陰の淫らに狂ったおのれが恥かしいのであろう。そういう女心はわからぬではない。殊に、京の女が、この地に流れて来ていることには興味が感じられた。他で聞いたほうが、他人事として、冷静に聞かれよう。
屋敷を出るときはまだ暗かった。が、東の空は、漸く明けようとしている。
ものの三丁と来ないうちである。清次郎を襲った者たちがいた。藪の中に、その連中は潜んでいた。三人であった。ものもいわずに飛び出して来た男が槍を突きかけたのである。
心得のない者だったら、脇腹を貫かれていたであろう。清次郎は飛び退いている。
「何やつだ」
清次郎の脳裡を、昨夜の〝影〟が掠めた。尚も突きかけてくる男の槍を、千段巻の下から切り放したとたん、左右から刀が叩きつけられた。文字通り間一髪に小手返しの刀で受けとめる。

暁闇の中に火花が飛び、鋼の灼ける臭いが、つんと鼻腔を刺す。

体のよろめきに乗じて、拝み打ちの刀をふたたび受けると見せて、摺りあげざまに横に払った一刀が胴を割いた。手ごたえを感じるままに、血尾を曳いた刃は、次の男の胸へ——これは僅かに、襟のあたりを切っただけであった。が、そのすさまじい剣勢に、相手がひるんだのは疑いない。その間に、槍を切られた男も抜刀している。が、自慢の槍を切られたことの怯えが、すでにして士気を喪わせていた。その男が、刀を引いて逃げだしたのは清次郎が二番目の男をあざやかな袈裟斬りで倒してからである。

「こやつ、逃ぐるか、待てい」

清次郎は追った。が、その男、脚が早い。藪を抜けて、姿をくらましてしまった。その足あとを辿るように、小路をくだったとき、その路が、屋敷の裏門につづいていることを発見したのである。

(やはり!)計画的だったのだ。

あの女二人の乱行を隠蔽するために、清次郎を抹殺する。小判は十枚くらいあったろう。大金すぎた。これは一時の見せ金で、旅の兵法者を安心させるためだったのだ。

(あの女たちが頼んだことか)

そうだとすれば、このまま黙って引き下れない。清次郎は血刀を拭いおさめると、裏木戸を乗り越えた。屋敷の中には一部、屋形造りの部分がある。あの女の起居するところであろう。清次郎が勾欄に足をかけたとき、ひゅっと、風を巻いて薙刀が落ちて来た。

一瞬、飛び離れた清次郎が、がくっと膝を突く。刹那、かれは、刀を鞘走らせざまに、投げた。刀は、薙刀を持った男の胸に、ぶっすりと突き刺さっている。わあーっ、と絶叫を噴きあげて、のけぞり倒れた男が石階から転げ落ちる。そのとき、清次郎は二人の女の姿を回廊に見つけていた。

「話を聞こうか?」

「……」

「それとも、二人して首を刎ねられたいか」

まだ、苦悶している男の胸から、血刀を抜きとって、清次郎は、女たちを見た。

「お宥し下さいまし、これには、事情がございまする……」

お安が、転がるように駈けおりてきて、ぴたりと両手を突いた。

「——実は、こちらの御方は、前権中納言中院通勝さまの御息女でございまする……」

「中院家の?」あまりにも意外な言葉だった。

正三位前権中納言通勝の娘で、朝廷に仕えて権典侍だった彼女は、堂上公卿衆の間で当時風紀が乱れ、罪を得た者の一人として、この地へ配流されてきたという。

慶長十四年のことで、清次郎が京をあとにして、五年目のことだから、まるきり知らなかったのだ。こうした辺境の地では、京に生れ過した若い女には特に、毎日が辛いにちがいない。その哀しみをまぎらせるための男をもとめての、浅ましい行為だったのだ。

「——すると、そなたは……」

清次郎は、あとの言葉がつづかなかった。

かれも京の生れであり、京の育ちだ。京の女の心淋しさは、痛いほどにわかった。お安の態度も、それでわかる。入浴させてまぐわいしたあとも、丁重に洗い浄めたのは、主人である権典侍の相手をさせるためだったのだ。まず、おのれが先に挑んだのも権典侍にひきあわせて、悪い結果にならないかを試したにちがいない。

「――お宥し下さいまし、何卒、お怒りならば、わたくしめを斬って……姫を助けて下さいまし」

お安の必死の顔を、凝っと見おろして、清次郎は殺意がうすれてゆくのを感じていた。

夜がすっかり明けて、爽やかな風のなかをかれは妻良の村から出て、山路を修善寺へ向った。

その清次郎の胸の中には、二夜の女たちの、喜悦に狂った姿態やあえぎが、揺曳していた。

お安は姫のために、と言った。が、あのまぐわいの中で、彼女自身の快楽にほんとうに溺れていたのではないか。そのことを追求するのは、哀れであったが、本心はどうであったろう。

清次郎は久々に味わった京の女の柔肌を、いまさらのように朝風の中で思いだしていた。

湖賊来る

一

そのとき、吉岡清次郎は、舟の中にいた。近江の長浜から南へ少し下ったあたり、彦根との中間ほどのところ、川口に近い葦の中である。

かれは空腹だった。

もう、まる二日間、何も食べてはいない。水ばかり飲んでいた。

(いよいよ飢死か……)

苦笑とともに、かれは思った。大刀を腰からはずし、抱くようにして、孤舟の中に横たわると、身を動かすのも、億劫になっている。

空には、幾つかの星が、ぼんやりと淡く見えた。今夜はここで野宿だと覚悟を決めた。

(仇も討てずに、こんなところで飢死するとは、みっともないが……やむを得ぬな)

疲れていた。

仇敵宮本武蔵を捜しまわって、すでに十年近くになる。

もう一歩というところで、逃がしてしまったこともある。情報の伝達の遅い時代である。人を捜すということの難しさ、辛さ苦しさを、いやというほど、味わわされた十年であった。

(どこにいるのか……)

彦根は井伊兵部少輔直勝の城下である。直勝は生れつき病弱で実際の行政は舎弟の掃部頭直孝がとりしきっているという話であった。

直孝は豪勇の武将であり、父の直政もまた雷名を轟かしている。井伊家は数代前から東海の今川家に属して武将として知られた家柄だ。

宮本武蔵がこの地にとどまって、兵法伝授しているという噂を伝え聞いて、清次郎は北陸から急いで来たものだった。

すでに漂泊の十年は、心身ともに、疲弊している。何よりも、懐中が乏しかった。三度の食事と宿泊に無理が重なれば、疲れが激しくなるのはいうまでもない。

以前は、懐中が乏しくなると、京へ路銀の無心をいってやった。〝家名〟のために仇敵を追っている身だ。路銀はただちに送って来た。が、この一、二年、その送金が遅延したり、とだえがちになっている。

(実家のほうも、苦しいのかもしれぬ)

吉岡清次郎は、弱冠十六歳の身で、武蔵の足跡を追って、仇討に出たのだった。

そして、九年余月——いま、慶長十九年の春四月、清次郎は無精髭は剃らず、月代もむさく疲れたからだを琵琶湖の孤舟に横たえているのだった。

琵琶湖といえば、すぐに京である。

比叡を越えれば懐かしい京なのだ。そこは生れ故郷であり、懐かしい人々がいる。

だが、この旅の垢にまみれた姿で、仇の首も持たずに、おめおめと帰れようか。

(——死んでも、帰れぬ……)

清次郎は唇を噛んだ。

四月の湖の空は、靄って、星もうるんでいる。

まるで、かれのために涙しているようであった。

(武蔵めは、はたして彦根にいるのか)

人間、疲れてくると、信念までゆらいでくるのか。ここまで来ながら、武蔵がいるかどうかまで、信じられなくなっていた。

(いるという話だった……明日はなんとしても彦根にいって)

だが、明日になっても、この疲労が恢復するかどうかは疑問だった。

ただの疲労だったら、ゆっくり寝めば恢復するだろうが、空腹は何か食べなければ、恢復しようがない。

食物をもとめるには、銭がいる。それが一文もないのだ。鐚銭すらない。

売るものもない。刀しかない。刀を売ってしまっては、いのちを維持することはできても武蔵と顔を合わしたとき、討つこともできない。

(脇差だけでも売り払うか……)

飢死することを考えれば、大刀一振残しておくだけでもいい。

その気持になっている。

（野盗をするよりそのほうがいい……）

武蔵は二刀を使う。一振の刀を自在に操るのさえ普通の力では難しい。況や二刀を振りまわして、的確に用いるには、常人の数倍の膂力を要する。

その剛ノ者に立ち向うのである。一刀だけでも難しいが、止むを得ない。

（腹べらしで負けるよりは、いのちのかぎりを闘って、それで負けるならば……）

しかたがない。

尠くとも、汚名は残さずに死ねる。

いまの清次郎は、死際をいさぎよくすることだけを考えているようであった。

そこまで退嬰的になったというのも、永年の疲れのせいであろう。

盈月に近い月が頭上にぼんやりと光っていた。

十三日か十四日か、正確な日を数える気持も失っていた。

空腹は眠気を誘って、うとうととしたようである。

かれは夢を見ていたようであった。

声が聞えた。数人の声であった。

「——舟はどこだ」

「このあたりだったはずだ。あの木が目印だ」

「そこだ。早く乗れ」

「よかった。波にさらわれたと思うたぞ」

「大丈夫だ、そんなへまな結び方はしていねいわな」

「とも綱を解け。愚図愚図するな、追手がやってくる」

「なんの、案じることはあるまい。もし来たとしても、こっちは湖の上だ」

「莫迦！　それではせっかくの苦心も水の泡ではないか。わざわざ、ここに舟をつないだのは、追手の目を晦ますためだったのだぞ」

二人や三人ではない。尠くとも五、六人はいる。いや、実は十人ほどいたのだ。

清次郎は、眠りからさめた。夢ではなかった。

数人の影が見えた。どかどかと舟に乗りこんで来たのだ。この舟は、せいぜい五、六人乗りである。近くにも、一艘隠していたらしい。葦の陰から別の舟を曳きだしていた。

「ヤッ、妙なやつが乗っている」

動きだしてから、はじめて気がついたように一人が頓狂な声をあげた。

暗かったし、追われる者の焦りで、誰も気に止めなかったのだ。

連中の服装もまちまちだった。平服の者もいたし、小具足をつけた者、坊主のような広袖を手くびで括った者、あるいは半裸に陣羽織をひっかけた者もいた。

一目で野伏りの集団とわかる。このそぼろな集団では、清次郎が一枚加わっても、まぎれてしまうだろう。

「なに、誰が乗っていると？」
「変だぞ、こやつ！」
「どこのやつだ。内藤の……」
「まさか。旅の牢人者じゃ」
「つまみ出せ、変なやつに島を知られてはまずい」
「おい……岸には戻れぬぞ」
舟はもう一丁ばかり沖へ出ていた。
岸には馬蹄の音が入り乱れ炬火（たいまつ）が右往左往していた。二、三十人の追手である。
とても引き返せない。
「駄目だ。引返してみろ、見つかってしまう」
幸い、この二艘の舟は、向うからは湖上の闇にまぎれているようであった。月がかさをかぶっているのが幸いだった。
「じゃア、ここへ蹴込んで」
「莫迦な、水音で気がつかれてしまう。島へ急げ、話はそれからだ」
（――助かったようだな）
狭い舟の中である。空腹で身も起せないのだ。とても、五人を相手に勝目はなかった。
かれは無言で目を光らしていた。
（どこへゆくのか？……）

清次郎は、ほっとした。
広い琵琶湖である。ひとたび岸を離れればどこにでも逃れることができる。
話の様子では、どこかで盗賊をはたらいて来たらしい。
（内藤……といっていたようだな）
このあたりで内藤といえば、長浜の城主である。城下を荒して逃走して来たのであろう。
（こやつ……湖賊か）
悪い連中に関った、と、あらためて、清次郎は危険を感じた。
その間にも、舟は湖の沖へ進んでゆくようであった。
（――たしか、〝島〟といったな……この琵琶湖で島といえば……竹生島か！）

二

小舟はその〝島〟に着くまでに、かなりかかった。波の上なので、どれくらいの距離を来たのか、よくわからなかったが、三里や四里は来たようであった。
その舟の上では、湖賊たちは、清次郎を警戒してか、あまりものを言わなかった。
奇妙な緊張の時間であった。
その間に、かれらは、清次郎を観察していたらしい。
島へ着くと、
「目隠しをするか」

「いや、その要はあるまい……」
と、首領格の男が言った。
「おい、きさま、どこから来たぞ？」
「——江戸だ」
「この島がどこか知っているか」
「——知るはずがない、近江のくにははじめてだ」
清次郎は嘘を吐(つ)いた。咄嗟の判断だった。京の生れといえば、このあたりの土地勘があると見られる。他国者のほうが、かれらも安心する。江戸といえば、近江からは、遠い坂東の地であった。この時代の交通の不自由さでは、後世よりもずっと僻地に感じたのである。
「よし、ともかくあがれ」
と促されて、清次郎は、刀を杖ついて身を起した。
(——ここは、竹生島であろうが……)
夜なのでよくわからないが、島だとすれば、琵琶湖にはそう沢山はない。
竹生島か沖ノ島くらいのものだ。
(上ってみればわかる)
竹生島だったら、舟をつけることの出来る場所は一ヶ所しかない。
島の南東部に僅かの砂浜があるだけで、周囲およそ半道（二キロ）の九分九厘は断崖である。
「こっちだ」

野伏りたちの間に挟まれるようにして、坂をのぼった。
夜闇の中に建物が見えた。湖中の孤島とも思えない豪荘な感じだった。
(やはり……竹生島だ)
坂を上った右側に津久夫須麻神社があり、左側には、宝厳寺がある。
前者は弁天様で知られる。ここの弁財天は古く、相州江ノ島と芸州厳島と並んで三弁天の一つと称されているのだ。清次郎も、上陸するのははじめてだが、その由来は耳にしている。
この社殿が豪荘なのも当然で伏見桃山城の日暮(ひぐらし)御殿を移建改修したものだからである。
豊臣秀頼の名で慶長七年のこととなっている。むろん、秀頼は幼いから、大野治長や淀君などの発案であろう。
鬱蒼たる樹木の間を暫くゆくと、尾根から沢を下ったところに、三つばかり小屋が見えた。
木の皮で屋根を葺いた丸太組みに蓆(むしろ)戸の粗末な小屋である。
清次郎はその中の一番大きい小屋に連れ込まれた。
「さて、こいつをどうするかだ」
「まあ急ぐな。それより、まず分け前だ」
湖賊たちは、担いで来た金品をひろげて、分け取りをはじめている。
小判や丁銀や刀剣や着物などがあった。黒塗り金蒔絵の文箱の中には、櫛笄(くしこうがい)など、上﨟姫君の髪のものがぎっしり詰っている。
それらの分け前で騒いでいるのを、清次郎はぼんやりと見ていた。

「おい、そこの牢人」
と、小判を懐中にしながら一人が、にやにやして言った。
「なんだ、羨ましそうな顔をして。どうだ、悪くない生業であろうが。一夜で半年一年食えるだけの稼ぎがある」
「……」
「やい、名前と生国を言え」
「江戸と申した」
「江戸はわかった。名前だ」
「江戸の江戸だ」
「なに!?」
「江戸清次郎」
「妙な名だな、まあいい、なんでこんなところを、いやさ、われらの舟に忍びこんでいた?」
「忍びこんだのではない。一夜の宿を借りようと思っただけだ」
「宿を?」
「ああ、一文なしでな」
「……」
「もう二日も食うておらぬ」
腹べらしの牢人者とわかると、野伏りたちの態度が変った。

「なんだ、ひもじ腹か。なぜ早くいわぬ。食物ならくれてやるぞ」
どうせかれらも食い詰め者たちなのであろう。
食物は豊富にあった。米俵が積んであるし、野菜もある。大きな囲炉裡が切ってあって、自在鉤に吊した大鍋では、粥がぐつぐつ煮えていた。
「たも、こやつに粥を食わせてやれ」
首領格の男が顎をしゃくった。
たもと呼ばれたのは、若い女である。かれらが入ってきたときからいた。片足の悪い老爺とこの女が、留守番をしていたのだ。
「はい……」
たもは、杓子で粥を掬ってくれた。
「召し上れ」
眼を合わせたとき、思いがけない美貌に気がついた。
こんな湖賊の棲家にいる女とは思えない美しさだったのである。
「忝(かたじけ)ない……」
女の素姓への不審が胸に残ったが、やはり飢餓を癒やすほうが先だった。
清次郎は欠け茶椀をひったくるようにとり、がつがつと啖(く)った。まるで乞食が十日ぶりに一膳の喜捨にありついたような、浅ましく、みじめな姿に省みられた。
(吉岡の後嗣ぎが、浅ましいことさ……)

かれが、一応の満腹を感じたのは、二杯の粥を流しこんでからである。

「――馳走であった」

かれは箸と茶椀を置き、口を拭った。

にこりとしてたもを見た。たもも、かれに微笑をかえした。が、それは一瞬であった。すぐに表情をひきしめ、目をそらした。他の者にその微笑を見咎められるのを憚るような様子であった。

（この女は……）

何者なのか。

この山寨（さんさい）の炊婦（かしぎ）をしているが、ほかに女の姿は見当らない。

とすれば、当然、男の誰かの情婦であろう。逞しい壮者ばかりの島の山寨である。情交がないはずはない。一夜に何人でも女を貪（むさぼ）りたい連中ばかりであった。

酒を呷（あお）り、粥を啖いながらの、かれらの野卑な会話は、女と金の話に終始した。むろん、金は、強奪の対象であり、その際の自慢話は、何人斬った、何人殺した、だった。

「――啖ったか」

と、首領格の男がこちらを向いた。

「たもの給仕で粥を啖ったのを死土産にするがいいぞ」

かれはのっそりと立ち上った。

「なんと……」

「この島は、旅人を泊める極楽島ではないからの」

そうだそうだ、と何人かが和した。げらげら笑う者がいた。

「極楽どころか、地獄の島じゃわの」

「そろそろ、首を叩っ斬ってくれや、酒の肴にしようで」

「藤十郎の斧が、ざっくりとやってくれよう」

みんな酔っている。

真っ赧な顔で、酒気を発して、ぎらぎらと目を光らせ、これから行われる血祭りに期待をこめているのだった。

清次郎は、まだ、おのれの置かれている立場が判然としないようだった。かれは、家の中を見まわし、その男たちの期待が奈辺にあるかに漸く気がついた。

藤十郎と呼ばれた男であろう、ひときわすぐれた上背の男が立ち上ったが、その手には大鉞（まさかり）が握られていた。

清次郎は静かに、聞きかえした。

「ほう、それでおれの首を打ち落すのか」

「そういうことだ」

藤十郎は、しゃがれた声で頷いた。

「どちらでもいいぞ、好みのほうを言え。せめてそれくらいは聞いてやらぬばな」

「……」

「こいつ、わからんらしい。前でもうしろでもいいというわけさ。顎の下から切ってやってやってもいいし、襟くびから切ってやってもいい。度胸のないやつは、下を向きたがるがね」

「——一つ、聞きたい」

清次郎は、覚悟を決めて言った。

「前でもうしろでもいいが、手はどうなっているのだ」

「手だと？」

「手さ。首を討ち落されるというのに、こちらは手ぶらでいなければならぬのか」

「ほ……こいつ、面白いことを吐かす」

藤十郎は、まるで子供のむずかりを聞いたように、蔑みの高笑いをした。

「どうやら、ひとり前に、刀を抜く気でおるわ、ははは、はははは」

その笑い声にあわせて、ほかの男たちも笑った。それはまるで、狼の前で、しきりと力んでいる犬を嗤うような調子だった。

「——そういうことだ」

と、清次郎は静かに言った。

「ムザとは斬られぬ。立ち合おう」

「よせ、かえって苦しむだけだ」

と、ほかの男が真顔で止めた。

「藤十郎は、こう見えても、怒ると、恐い。おとなしく首を斬られれば、あっという間だ。苦

しみも少くてあとは地獄の鬼どもが可愛がってくれるわな。存外、奪衣婆さんなどが、閻魔よりもいい男だというて、舐めるように可愛がってくれるかもしれんぞ」

「そうだ、素直に、首と胴が離れたほうがよい。この男、怒るとな、耳を切り、頭を打割り、手足を斬り、眼玉をえぐりだし、うぬの股間にちぢみあがっているムサイやつまでひき出して切り落す」

「………」

「そんな目にあうより、おとなしゅう、首をくれてやれ。男のあそこをチョン切られてはな、また男には生れ変るわけにはいかんでの」

「——死ぬのは同じだ」

と、清次郎は、刀を腰におとして昂然と答えた。

「生れ変ることなど考えぬ。この世に生をうけた以上、生きぬくだけだ。それしか考えぬ」

清次郎にとって、問題はこの男に勝ったとき、ほかの連中が、はたして、どう出るか、というにある。

（こいつ一人なら……）

仆せる。

大言壮語する男には、欠点がある。膂力がすぐれているだけでは、達人の域に至らない。清次郎にとって、恐い相手ではなかった。

三

この騒ぎの間に、清次郎が観察していたのは、
（首領は誰か？……）
ということだった。
この全部を相手にまわすのは、不可能だった。せまい孤島の中である。やっと空腹を満たしただけで、体力の恢復には、数日をまたねばならない。
首領を押えさえすれば、脱出できよう。
藤十郎と呼ばれた男は、哥兄分ではあっても、首領ではない。
「よかろう、だが、万一ということがある」
家の壁を背にして立った清次郎は、油断のない眼をくばって言った。
「おれが勝ったら、何とする」
「ははははは、はははは、ははははは」
まるきり相手にしない。
「首領は誰だ」
清次郎は静かに見まわした。
「おれだ」
たもを抱き寄せていた男が言った。肩幅が広く、腕が太い。小具足を着込んで、陣羽織をひ

っかけている。一軍の武将を気取っているらしい。
（なるほど　あいつか）
そういえば、さっきから何もせずに、みんなを顎で使っていた。
「名は？」
「三苫陣内」
吼えるように言って、
「うぬは、江戸、なんとか言うたな。まあいい、どうせ、すぐに死ぬのだ。名前なぞ聞いても詮ない」
誰もが、清次郎の敗北を絶対のものと信じこんでいる。
（かえって幸いだ）
と、清次郎は思った。
「どこでやる」と、藤十郎を促した。「ここか、それとも、外へ出るか」
「死ぬのはここじゃわい」
藤十郎は家鳴りがするほどの大声で、喚きざまに大鉞をふりあげて襲いかかった。
清次郎は抜刀した。抜刀したがそのまま身を転じて、三苫陣内へ飛びかかっていたのである。
陣内も藤十郎もこの行動は思いがけないものだった。
「うっ、こやつ」
二人は動顛した。いや、湖賊の誰もが、この行動には意表を衝かれたのである。その狼狽の

うちにも、陣内が脇息をつかんで、さっとかざしている。咄嗟の思いつきだった。どうせ、どこからか奪って来たものであろうが、螺鈿のみごとな脇息だった。清次郎の刀は、ずばっと両断している。尖先があまって陣内の膝を傷つけた。が、それだけである。清次郎はさらに躍りこんだが、これは二ノ太刀で陣内を斬るのではなかった。陣内の頭上にかざすとともに、片手で胸ぐらを掴んだのである。

「殺すぞ、こやつを殺されていいのか」

「……」

何よりも驚いたのは、藤十郎だった。大鉞を叩きつけようにも、首領が圧えられていては、どうしようもない。

だが、清次郎はひとたび立ち合ったものを中止するつもりはなかった。その態勢で他を威圧するや、藤十郎をふりかえった。

「啖え！」

手にした大刀を投げた。

呆然としていた藤十郎の虚の胸へ——大刀は唸りを生じて真っ直ぐに飛び、ぐさっと、心ノ臓を貫いていた。

そして、清次郎の手は、藤十郎の胸から血が噴きだす前に、陣内の脇差を奪いとり、咽喉元に擬していた。

文字通り、瞬く間の早業である。他の者は呆然として、為すところを知らなかった。中には

膝を起した者もいたが、それだけだった。

「——勝った」

と、ふとい息をして、

「いまの勝負、おれの勝ちだ」

清次郎は言った。

「……」

「な、陣内とやら、勝負、見たであろう」

「う、うむ……」

「次は、誰だ、おまえか。死ぬか……」

尖先がちくりと、咽喉仏を刺した。

「うッ、よせ」

「死にたくないか」

「あ、あたりまえだ」

「では、彦根まで送ってもらおうか」

「なに!?」

「立て」

この陣内さえ人質にしていれば、ほかの者は手出しできないと見た。

「さあ、歩け、舟着場へゆくのだ」

「きさま、島から出ることができるつもりか」

「陣内の命と引き替えさ」
「すぐに追いつかれるぞ」
「どうかな。岸の近くまでゆけば、追手がまだ、捜しまわっているだろう。すでに舟を出しているかもしれぬ」
陣内を引き立てて歩きだしたとき、
「待って」
と、たもが、すがるように、
「わたしも、連れていって下さいまし」
「そなたも？……」
「はい！　わたくし、実は彦根から拐かされて来たものでございます」
「そうか、道理で」
この山寨に閉じこめられて、屈辱の日々を過していたのであろう。
「くるがいい。おっと、おれの刀を引きぬいてくれ」
「はい」
言われた通りに藤十郎の心臓に突き刺さっている刀を、たもは抜いた。
さして、たじろぐ風もなかった。この山寨の生活が、血に馴れさせたのであろうか。
出てゆこうとすると、
「待て」

と、数人が立ち上ろうとした。とたんに、清次郎の擬した脇差が、すぱっと、陣内の耳を削ぎ落していた。
「うわッ！」
陣内の悲鳴がつんざく。
「それ見ろ、うぬらが騒ぐからだ。今度はずぶりと咽喉を貫く」
潮時と見えて、鮮血がとまらない。淋漓として、あふれ出ているのを、そのまま、清次郎は追いたてて小屋から出た。
たもがぴたりとついてくる。油断のならない連中なのだ。僅かの隙でも見せれば、飛びかかってくるだろう。
こうした盗賊たちの間で、主従の関係がどの程度のものかわからない。はたして、三苫陣内の生死を、真剣に慮っているかどうか。一時的な衝撃で、手も足も出ないのかもしれない。
それだとすると、気が変らないうちに漕ぎださないとどうなるかしれたものではない。人の生死など、虫ケラのそれほどにも感じない連中なのだ。
清次郎は陣内のえりがみをつかんで追いたてると、舟着き場へとおりていった。
舟は二艘ある。その一艘に乗りこんで、
「陣内、船頭をやって貰おうか」
「う……わしは」

「船が漕げぬとはいわせぬぞ、湖賊だからな」
「それは……一応、漕げるが、巧みではないゆえに」
「ははは、巧みなことは要らぬさ。急ぐこともない」
たもに言いつけて舟の艫に、空舟のもやい綱を結ばせた。曳いてゆけば、あとを追われる気遣いもない。
よしんば、潜ってくることがあっても、これは、上から突き殺す。陣内も一蓮托生なのである。
「たも、泳げるか」
「はい、少々……」
「ひっくりかえったら、そのときは、一緒だな」
「はい、覚悟しております。あの島にいても地獄の苦しみでございましたゆえ」
「ふん」と、陣内が櫓を押しながら、嘯いた。
「結構、よがり泣きしていたくせにの」
「まあ！」
たもはきっとなった。
その間にも、舟は島を遠ざかってゆくのであった。

四

（さて、こやつを、何とするか）
彦根が近づいてきた。陣内の処置を考えている。今宵も長浜で盗賊をはたらいてきたのだ。湖賊の首領というだけでも、湖の周辺の者は大喜びをするだろう。彦根城下でも、変りはあるまい。たもが拐かされたのは彦根城下だというから、
（彦根の奉行所に突き出すか）
まるで、その清次郎の考えが、かれに通じたかのようであった。
突然、かれは櫓を放した。身を翻して、ぱっと、空へ飛んでいる。
「ぬッ！……」
反射的に身を延して、抜き討っていた。
手ごたえはあった。わっと悲鳴をあげたのが、その証拠でもある。小具足からはみ出た背中の部分を、さっと斬っている。致命傷とは思えなかった。が、二ノ太刀はとどかない。激しい水しぶきをあげて、陣内のからだは湖中に沈んでいた。
「――逃したか」
舷側から、身をのりだすようにして、清次郎はのぞきこんだが、暗い水中には、かれの姿は見えない。いたずらに、膏血らしいものが、淡い月かげに、窺えるばかりである。
水練は巧みなのであろう。深く潜行して、遠ざかったかもしれなかった。手ごたえ加減からいっても、かれが逃れた疑いは充分あった。
「――逃がしてしまったようだ」

刀を拭いながら、清次郎は微笑した。
「おれも腕が落ちたな。ははは、まあ、仕方はない。まさか、ここまで来て逃げるとは思わなかった」
虚をつかれた感じであった。
些か残念だったのは、陣内を突き出せば、恩賞にあずかれたであろうものが、フイになったことだ。
「憎い男……でも、手傷を負っているのだから……きっと鱗屑(うろくず)になっていますわ」
「どうかの」
あの手ごたえでは。清次郎は半信半疑だった。
彦根の城下に入ると、たもの家に案内された。
城下の繁華街にある大店であった。丹物を商っていて、加賀屋というのが屋号だった。
むろん、もう大戸をおろして寝ていたが、たもが顔を見せると、大騒ぎになった。
「――生きてござらっした!?」
と、驚きの声を洩らした手代が、けたたましく怒鳴った。
「御寮人が戻らっしゃったぞ、ほんものじゃ、幽霊ではない、足があるぞ、生きてござらっしゃったぞ、起きろや」
それから、家中が起きてきて、まるで、火事場のような騒ぎになった。いなくなった者が突然、夜中に帰って来て、それも客を連れてきたのだ。何よりも、当時は食事が馳走である。簡

単に外食できる時代ではない。
使用人だけでも七、八人いた。家族は、六十くらいの老父徳右衛門と二つか三つの女の子と、五十前後の女。これは、老人の妹らしい。お三(さん)と名乗った。
たもは、女の子を抱きあげ、頬ずりして涙を流した。彼女の産んだ子だった。一年ほど前に盗賊に襲われ、つれあいの菊蔵と義母を殺され、金品を奪われた上にたもまで拐かされたのである。
「よく生きていたのう、わしは必ず生きている、必ず戻ってくると信じていたわ。これも御先祖さまのお蔭じゃ」
その仏壇には、たもの陰膳が据えられていた。
たもは、その義父の膝に突っ伏して泣きじゃくった。徳右衛門には、可愛い伜の嫁であったろう。人目がなければ、抱きしめたいばかりの気持が露(あら)わだった。それは異常なほどに見えた。
たもは、島のことは話したがらなかった。自分の屈辱の部分を口外したくない気持はわかる。
彼女にとって、島に於ける凌辱の日々は悪夢のようなものだったろう。
食事が出来るころは夜明け近かった。もう粥腹は空いている。久しぶりの馳走に満腹してぐっすりと寝た。眼がさめたのは、日が暮れてからである。
疲労もあったが、安心感が、まるで十年間の不足した睡眠を与えてくれたようであった。
充足した眼ざめの中で、清次郎は、ひそひそと話す声を聞いた。男と女の声である。圧(おさ)えてはいても感情が昂ぶってきて時々、高くなる様子だった。

「――そなたのことは、ずっと忘れられなんだぞ」
「わたくしも、ああ、なんと悪い女かしら……でも、世間が……」
「世間が何じゃ、人が何といおうと、かまわぬ。この老人を喜ばせておくれ」
「でも、菊蔵どのが、ああいうふうに亡くなって、世間では、私がまるで悪人のように言いふらす方もいるとか」
「そのようなことを気にせまい。わしには、そなたさえいれば……菊蔵がよしんば生きていても、わしには、憎い恋がたきじゃ」
「ま、そのような……」
「もう義父の仮面をかぶってはおれぬて。のう、たも、いっそ、祝言(しゅうげん)をあげて、わしの女房になってくれや」
「ほほほ、そんな。嬉しゅうはございますが、それでは人の道にはずれたことと……この加賀屋の商いもできなくなってしまいましょう。商いは世間体が大事でございましょう、世間の噂さえ封じてしまえば、何をしようと、ほほほ……、……」
夢を見ているのではないかと思った。
あのたもが――あまりにも意外すぎる女の正体だったのである。
亭主、義母の生きているうちから、義父に通じていたとは。
ふと、清次郎は、自分でも思いがけない考えに、はっとなった。たもと義父の醜関係にとって邪魔なのは、夫と義母――その二人だけが夜盗に殺されている!

たもはあの島の山寨でたしかに異質ではあった。が必ずしも悲しげではなかった。哀れな女という感じはしなかったのである。
そのことと思いあわせると、清次郎の連想も、飛躍しすぎたとはいえない。
咽喉がかわいていた。枕元には、ちゃんと水差しが用意してある。清次郎は、茶椀にそそいで、呑んだ。その音が聞えたのか、隣室のむつごとはたりと絶えた。
(この家にも永居はできぬ……)清次郎はそう思った。
どんな不倫が行われていようとも、旅人としては容喙(ようかい)することではない。大望のある身だし、深く関ることは、僭越ともいえる。
小用を足してきて、また夜具(よのもの)にくるまった。明日は早く出立しよう、と思った。宮本武蔵が、どこに泊っているか、それを突き止めなければならない。
それから、とろとろと眠ったようだ。どれくらい眠ったろう。突然、悲鳴が聞えた。女の悲鳴だった。清次郎は、はね起きざまに、枕元の刀を摑んでいる。
悲鳴はまた起った。清次郎は板戸を開けて出た。そこへ、女がよろめきながら走ってきた。
「あ、助けて!」たもだ。血の臭いがした。燭の仄明りにその半面が血にまみれているのが見えた。髪は乱れ半裸である。凄惨な感じであった。寝込みに襲われたのか。
「ぬッ、売女(ばいた)!」
血刀を下げて、追ってきたのは、あの三苦陣内。生きていたのか。やはり、浅傷(あさで)だったのだ。
「陣内! おれが相手になろう」清次郎は、刀を腰に落して言った。

「さっきの一太刀は、浅かったようだな」
「うぬか……」陣内は顔を振った。「その前に、その女を斬らせてくれ」
「女を？」
「そやつは、亭主と義母を殺してくれと、わしに頼んだのだ。さすれば、わしの女になるとな！……約束したのだ。島から脱（ぬ）けるなど、よくも瞞（だま）しおった」
「女に瞞されたか、馬鹿め。瞞された陣内が阿呆というだけよ」
「こやつ、吐（ほざ）くな！」
　斬りこんできた刹那、清次郎は抜きうちに、刃を走らせている。まるで立藁（たちわら）を斬るようなかたちだった。大きくあいた胴から胸へ、あざやかに斬り裂いている。陣内の両手は上にあった。激昂したかれの血刀は天井の梁へがっと切りこんでいたのである。
　一刀で充分だった。刀を放して、陣内は崩れ折れた。凄い呻きを洩らして四肢がもがいていた。
　もがきながら、なおも、たものほうへと、にじり寄ろうとしている。
　その執念というか、未練が、異様だった。
「お、女を……女を……」
　地獄へ道連れせねばやまぬ男のすさまじさだった。清次郎はふりかえってたもを見た。たもも、もはや虫の息だった。
「——死んだぞ」と、清次郎は陣内に言った。「女は、死んだぞ」

「おう、し、死んだか、ははは、ははは、は……、……」
笑い声が細く、とぎれて、小さくなっていったかと思うと、陣内は動かなくなっていた。
　清次郎は刀を拭うと、支度をはじめている。この忌わしく情痴に狂った家から、一刻も早く、出てゆきたかったのである。まだ外は暁には間があるように、濃い闇で塗りつぶされていた。

血闘清水寺

一

花の季節が去ると、京は初夏である。急に蒸し暑くなってくる。もともと盆地のせいであろうか、冬は寒く、夏は暑い。

吉岡清次郎重賢は、東山の清水寺から、目の下にひろがる京の街を眺めていた。

（――京だ……）

感慨が胸に湧いて来て、涙さえ、盛り上りそうであった。

生れ故郷であり、育ったところであり、吉岡家代々の墳墓がある。かれにとって、京はすべてであった。

おそらく、かれの家を襲った、あの血嵐がなかったら、一生、この土地を離れることはなかったかもしれないのだ。

（にくい！　宮本武蔵がにくい！）

宮本を追って回国すること、すでに十年――

十五歳だった清次郎は、もはや二十五歳になっていた。

少年時のどこか弱々しかった面影はなくなり、日焼けした逞しい牢人姿になっている。

喜ぶべきことかどうか。宿敵を討つことにのみ、いのちをかけて来た十年の歳月はこの男を、世俗のワクからはみ出させている。

髭は日焼けした半面を蔽い、目だけが凄まじい光を帯び、その着衣は汗と垢にまみれている。日除けの藁編笠は、すり切れて穴があいているし、刀の鞘の塗りは剝げ、袴の裾は裂けていた。

草鞋の食いこんだ素足はどす黒く汚れていたが、それは骨の太さを見せて、木の根も牛の糞も踏み超えてゆく逞しさがあった。普通武士は布緒の草鞋を穿き、足袋を穿く者が多いが、武芸者は、足袋は滑るとし、布緒は草鞋が切れたとき、いつまでも足にからんでいて、かえって邪魔だとしている。兵法家の心得であろう。

この男が歩くとき、威風あたりを払った。

かれ自身は、おのれの姿を客観的に見たことがない。ために、なぜ、人が警戒の眼をむけるのか、気がつかなかった。

（――京まで来ながら……）

と、清次郎は遠く、西洞院あたりに目をやった。

（帰れぬ……武蔵を討つまでは）

あと一歩のところで、わが家に踏みこめない哀しみが、この男の胸に突き上げた。

かれが、近江から、京へ入って来たのも、故郷忘じ難きあまりの女々しい気持からではなかった。

宮本武蔵が、叡山に入ったという噂を聞いたからである。

数々の悪行を清算するべく、法体になったという。

まことしやかな噂であった。

清次郎は入山し、そのことを聞いてまわった。

が、どの寺に聞いても、俗名宮本なる者の、新たな入山はなかった。

よく考えてみれば、わかることだった。

(あの武蔵めが、悟入するなど、あり得ない……)

全身、これ殺気のように、人触れれば人を斬り、馬触れれば馬を斬る！　さながら白刃そのものの漢だ。

出家するなどとは考えられないことだ。

(出家されてたまるか)

そう叫びたいところであった。

宿敵が出家して頭をまるめてしまっては、闘いがいどめなくなる。

いまの清次郎重賢にとっては、それがもっともおそろしいのであった。

(いる、武蔵はいる、この京に……)

噂はまるきり、嘘ではあるまい。叡山をさまよっているか、ともかく、このあたりにいたこ

とは事実であろう。そこから、憶測されたことと思われた。

清次郎は、踵をかえし舞台のほうへ歩みを進めた。

舞台から眺める鳥辺山の谷は、濃淡の緑の中に午睡を貪っているかのようであった。

嘗てここから、幾千幾万の病人や死人が投げこまれたかしれない谷である。

舞台は――今日見る、そのものではない。これはのちの寛永十年に、再築されたといわれるから、かなり古びたもので、ぎしぎし軋むほどであったかもしれない。

「――もし、お武家さま」

ふいに声をかけられて、何気なくふりかえった。

とたん、さっと、殺気とともに白刃が走った。

「何をする」

咄嗟に身をひねって、その刃を避けたが、そのとき、女の口から発された叫びが、清次郎を驚かせた。

「覚悟、宮本武蔵！」

あまりにも意外な言葉だった。

この時代である。たとえ女性であろうとも刃をむけて来たら、斬ってもかまわない。

理由は問うどころではなかった。

だが、宮本武蔵と間違われたことが、かれの抜刀を抑えたのである。

「なんと!?」

「かたき！　かたき！」
金属的な、かん高い声で叫びながら、なおも女は、短刀で突きかかってくる。
清次郎は軽くこれを躱しながら、
「まて、早まるな、間違いだ」
「お黙り！」
と、女は目尻を引き攣らして、
「卑怯な！　尋常の勝負を」
なおも、突きかけてくるのだ。
「たわけな、待てと申すに、おれは……」
宮本武蔵ではない、と弁解する間も与えないのだ。
とうとう、清次郎は女の刃を叩き落した。気迫といい、いささかの刀法も知っているようであり、並の女ではないが、しかし、女兵法者というほどの腕ではなかった。
「くやしい！　かたきを目の前にしながら、ああ、奈無ッ八幡！」
女は、尚も、しがみついてくると、清次郎の前半に差した脇差を抜きとろうとする。
「執こいな」
腕をつかんで、ねじりあげた。
「おれは宮本などではないと言っているのがわからぬのか」
かれが吉岡を名乗ることに躊躇したのは、ここが京だからであった。

十年の歳月の変貌は、親兄弟でも見過すにちがいなかった。少年から青年への移り変わりは激しいし、放浪漂泊による影響は尠くない。
「――だまされませぬ」
と、女はもがきながら叫んでいる。
「かたき、兄のかたき！　宮本武蔵」
「呆れたのう、その宮本武蔵こそは、おれにとっても仇なのだ」
「なにさ、左様な……」
「嘘ではない。ともかく鎮まれ。人目に立つではないか」
これが他の土地だったら、どんなに人目に立とうともかまわないのだが、吉岡清次郎とわかれば、見っともないのだ。
清次郎は、女の手くびをつかんでぐいぐい曳いていくと、物かげに入って、ほっとした。
「――事情があって、名を明すわけにはまいらぬ。が、宮本ではない、その宮本武蔵こそ実は、おれが十年も探しもとめている仇なのだ……」
「まあ、それは奇しき因縁でございます」
漸く、女は納得したようであった。
「お宥し下さいまし、あまりにうしろ姿が似ていましたゆえに」
「彼奴にか……」
清次郎は、憮然として呟いた。

「憎い仇敵に似ているとは……皮肉なものよのう」
女は、常盤（ときわ）と名乗った。
宮本武蔵に敗れた兄は、大賀久之進と称（い）い越後の牢人で、仕官の口を捜しているうちに、宮本武蔵があらわれたと聞き、試合を申し込んで、あえなく打ち倒されたというのである。
「――敗れたのか、しかし、試合とあれば勝つも負くるも、天命じゃ、あのように、仇として、不意打ちをなすのは、正しいとは申せぬぞ」
「いいえ、お聞き下さいまし、兄は瞞（だま）し討ちにおうたのでございます……」
「宮本武蔵が、瞞し討ちを？」
「はい……」
常盤の話はこうであった。
武蔵の宿所に、試合を申し込みにいったのは、兄妹ともどもだという。
その前に、実は、この試合は所司代役人によって止められている。
「所詮、勝ち目のない試合、やめるがよい」
役人はそう忠告してくれた。
が、久之進にしてみれば、京流の名門吉岡一族を嘗（かつ）て仆（たお）して以来、剣名とみにあがった武蔵を仆せば、一介の牢人たる大賀久之進の名は、世上の噂になる。
仕官の口も殺到するだろう、という思惑であった。
世上、ちかごろ囁かれている噂では、関東との手切れによる、大乱がふたたび起るのではな

いかという。つまり、戦の噂が、広がってきている。
大坂の豊臣方と、関東の徳川将軍家の間で、最後の決戦が行われるらしい。徳川家康は将軍職を秀忠に譲り、いまや大御所として陰で采配をふるっているが、おのれの老齢を思い、徳川幕府の基礎の固まったいま、大坂城を叩き潰そうと企んでいる。
徳川氏にとっては、豊臣秀吉の遺孤秀頼と母淀君を中心とした旧政権勢力を、叩き潰すのが、最後の仕事になっていた。
豊臣秀吉の恩顧をいまだに口にする大名は多い。このままでは、いずれ徳川家に禍根を残す。家康は、〝豊臣〟のすべてをこの地上から抹殺するために、軍を起そうとしている、というのであった。
そういう世上の不安は、清次郎には、不安としてでなく、逆に、宮本武蔵をとらえる機会が、増えるという意味で、歓迎すべきことだった。
大賀久之進にも、仕官の可能性として、大いに風雲の来るのを待つところはあったろう。
武蔵を仆した男、ということになれば、一方の侍大将に迎えられるかもしれない。
その狙いはよかったが大賀はいささか焦りすぎたようであった。
宮本武蔵は、その日、旅立つことになっているといい、試合の申込みには、迷惑げであったという。
そこへ、口きき役として、所司代役人があらわれたという。
かれは、自分にまかせるがよい、といって、大賀兄妹を帰し、武蔵と話をまとめたというこ

とであった。

翌朝、役人に示された通り、暁闇に真葛ヶ原へ出むいた久之進であった。

この試合は、一切、介添も助太刀もなしという約束だった。

半刻ほどして、戻らぬ久之進を案じた常盤が、真葛ヶ原へ行って発見したのは、久之進の死体であった。

かれを両断した刀は、背後からの袈裟掛けによるものであった——

「——卑怯です、きっと、隠れていて、兄のうしろから斬ったものにちがいありません」

身寄りのない常盤は、兄の傍で死のうとした。

それを止めたのは、所司代役人だという。

「——その方のおかげで、あたくし、こうやって生きております……」

親切な御方、と、何度も、常盤は言った。

話の様子では、はっきりとは言わなかったが常盤は、その役人の世話になっているようであった。

寄辺（よるべ）ない娘にとっては、そうやって生きてゆくしかなかったのであろう。

「——立ち入ったことを聞くようだが、その所司代の役人は、何という名だ？　あるいは、おれの存じ寄りかもしれぬ……もっとも、十年前のことだから、忘れている場合もあろうが」

「立派な人ですわ」

いきいきと、目を輝かして、常盤は言った。

「太田忠兵衛という方です」

その名は、記憶にあった。

清次郎が、鞍馬山で荒法師たちの血祭りになろうとしたとき、助けてくれた役人である。

「あの太田どのか……」

「え、御存知で」

「おお、知っているとも。恩人といってよい人だ」

「まあ、それは、奇遇ですわ」

常盤は自分の卒爾が、こういうことになったのを喜んだ。

是非、家へ来てくれ、と常盤は熱心にすすめたが、清次郎は固辞した。いま、太田忠兵衛と顔を合わせることはできなかったのだ。

二

大賀久之進が斬られたのは、ひと月ほど前のことである。

（まだ、武蔵は洛中にいるかもしれぬ）

そう思うと、清次郎は勇気が湧いた。

ところが、その夜、清次郎は、数人の男に襲われている。

かれが眠りをとったのは、三年坂の脇の巨木の陰であった。

三年坂は、産寧坂と書くのが正しいようだが、ここで転ぶと、三年後に死ぬという俗信があ

る。

木賃宿に泊る金もなくなっている清次郎だった。

かれは、ふと眠りからさめた。足音をころして近寄る音の気配を感じた。清次郎は刀をつかんだ。

(来た!?)

誰が? その疑いよりも先に、その怪しの影への対応策である。

(五人!)

すばやく、闇の影を読む。

相手は、何を目的とした者たちであろうか。物奪りにしては、木賃も持たぬ牢人を襲うということが、すでに不可解である。

もっとも近づいた男は、手槍を持っていた。寝息を窺うかに見えたが、突然、ものもいわずに、さっと、槍を突きだした。

一瞬、清次郎は千段巻をつかんで、はね起きている。

「何やつ!」

背後から斬りこんで来たのを、抜き討ちに胴を輪斬りにするや、摑みとった槍を第三の影へ投げ、第四の影を一跳して斬った。

その後へ、槍をとられた男が、抜刀を叩きつけてくる。清次郎は身をひねって、これを受けた。血刀である。がっと刃が咬みあった瞬間、血がはね飛んだ。

二人を斬った血汐が、血流しの溝から衝撃ではねたのである。

そのまま、清次郎はずいと、肘をあげて鍔がらみに持ちこみ、力押しにひねり倒すや、真向額唐竹割りに頭頂から斬り下げている。

血ぶるいしてほっとふりかえったとき、一人が逃げてゆく姿が見えた。

清次郎は、その姿へむかって、脇差を投げている。

どこかに当ったらしく、悲鳴をあげて、その影は、一転して倒れた。

刀が左腕に当ったのであろう。宙に一転した姿は、そのことを物語っていた。

だが、清次郎が、追いこむ前に、その影は闇の中へ消えてしまった。このあたりの地理に精通した者らしい。

「莫迦めが……」

疑惑は残ったが、それほどの人数に襲われながら、掠り傷も負わず、四人を仆し得たことに、清次郎は、満足に似たものを味わっていた。

(——誰だろう?)

遺恨に違いないのだ。これまでの清次郎の足跡からすれば、怨まれることも多い。

(まあよい、どやつであろうとも……)

挑まれたら、斬りかえすだけである。

清次郎は返り血を加茂の流れで洗い落した。

暁闇がうすれてきていた。その朝靄の中に、誰か近寄ってきたと思うと、これは墨染の衣をまとった僧侶だった。

「——旅の御仁」

静かな声で呼ばれた。

喜捨をもとめるのではなかった。

「そこの知恩院で施湯をなされている。馳走になってきては如何か」

「忝ない」

いまの清次郎にとっては、渡りに舟の有難い申し出だった。

平安末期から、大寺ではときどき施湯をした。当時、風呂というのは、馳走である。庶民の生活では、風呂になかなか入れなかった。

中世の風呂といえば蒸し風呂を思いだすが、大寺で施湯するには、一山の大衆（寺僧）が用いるすい風呂が多い。

そうでなければ、多勢を入れるわけにはいかない。

広い湯槽、広い洗い場の簀ノ子がある。

外に大きな竈があり、鉄の大釜に沸かした湯を、桶で送りこむようになっている。

貧民のための施しの湯だから、次から次と聞き伝えてやってくる。

この施湯は、室町時代が多かったので、豊臣政権のころから、次第に減少していた。

この慶長末期には、めったに聞かないのでたまにそんな催しを耳にすると、我も我もとやってくるのである。

清次郎も、このところ、ゆっくりと湯に入って、垢を掻くという余裕を失っていた。

川水でからだを拭くくらいだから、垢がこびりついている。湯でなければ、脂肪と垢は落ちない。

その広い浴室は湯気がこもり、夥しい人でうずまっていた。

いうまでもなく、男女混浴なのである。

全裸の男女が、顔と尻がぶつかるばかりに混みあって、施湯を楽しんでいる。湯槽の中も洗い場も赤裸の群れだった。

清次郎も裸になった。こういう場合、乱世の武士だからといって、下帯をしたまま入るのはやはり工合が悪い。

万一を考えると、武士たる者、下帯ははずせないのだが、群集の中で、一人だけそんな格好で入るのもおかしい。

清次郎は、髪に小柄を一本だけさして、入ることにした。

湯はかなり汚れている。何しろ人数が多いのだ。

それでも、外ではどんどん薪を燃やして、湯を送りこんでくる。

芋を洗うような混雑の中で、清次郎はおやっと思った。

灼きつくような視線を感じたのである。

湯気抜きの小窓から朝の光が入ってきて浴室の中を明るくしている。押しあいへしあいのなかではあったが、凝っとかれのほうを見つめている眼に気がついた。

（はてな……知っているやつか？）

よく見ようと思ったときは、数人の頭が間を遮（さえぎ）ってしまった。

男か女かもわからない。

清次郎は警戒した。この混雑の中では、かりに殺人が行われても、まぎれてしまうだろう。

さっき逃げていった男の影が思いだされた。

（彼奴が……）

執念深く、つけ狙っているのか。

逃げると見せて、ひきかえして来、隙を窺（うかが）って尾行して来たとも、考えられる。殺意を抱いた者にとっては、この施湯の混雑はまたとない好機であろう。

そう思ったとき、

「――お武家さま……」

女の囁きを耳もとに聞いた。

「わたくし……常盤でございます」

「おお、そなた……」

どうしてここへ？　と、いささかの疑惑と不審をこめて、女を見た。

むろん、彼女も全裸だった。

羞ずかしげに、身をくねらして、

「わたくし、ひょっとしてあなたさまが、ここへお出でではないかと……勘が当りましたわ」

「かようなところで逢おうとは思わなかったな」

清次郎は、常盤の裸身に視線を走らした。

少年のころとは違い、女の肌とむきあっても無遠慮な眼をむけるところまで成長している。

常盤の肌は群集の中にあっても、ひときわ色の白さが目立ち、着物の上からはさほどとは思わなかったが、意外に豊かな乳房だった。

「羞ずかしゅうございます……」

常盤は手拭いで胸を隠すようにして、

「お背（せ）なを、流さして下さいまし」

「いや、そのような」

「どうぞ……」

「旅人じゃ、垢がこびりついている」と、清次郎は笑いにまぎらした。「鉋（かんな）でこそがねば容易にはとれまい」

「――わたくし、上手でございますから」

思ったより、力があった。

男の背を流すのに馴れているのか。太田忠兵衛の背を毎日、こうやって流しているのであろうか。

清次郎は、ふと嫉妬をおぼえた。

「――そなた……」と、いわでものことを口にしていた。「所司代役人の太田忠兵衛の世話になっているといったな」

「はい……」
「ずいぶんと、太田どのには逢うていないがそなたの話では、お元気らしいな」
「はい、それはもう」
常盤は、何か思いだしたように、うつむいて、笑いをこらえている様子。
「――あの、あなたさまのこと、お話しいたしましょうか」
「なに、太田どのにか」清次郎は狼狽して、
「いや、それは困る」
「え？」
「困ると申しても、別に、悪い意味ではないが、かように零落した姿では、逢いたくないのだ」
「……」
「せめて、武蔵に一太刀なりと……」
問わず語りに、自分の素姓を語っていることに気がついて、清次郎は口を噤（つぐ）んだ。
（名前だけは、しかし、洩らせぬ……）
吉岡の名は出せない。
そのことに拘泥したせいか、隙があったらしい。突然、ひゅっと、何か飛んできた。
一瞬、反射的に首をふって避けた。その何か――小さな刃物は、湯けむりと混雑の中だけに、誰かに当ったらしく、悲鳴がほとばしった。

ぎゅっと、叫んで、のけぞった男をたしかめるよりも、清次郎の兵法者の眼は、その〝兇刃〟の飛来した方向をふりむいている。
（彼奴！）
さっきの、あの眼を、かれは見た。
さだかではなかったが、濃濁の湯気と、混乱の寸前に、ちらっと、見えた。闇中に殺気の一点を〝識る〟にひとしい直感に似たものである。
浴室の中は混雑というよりは、恐慌をきわめていた。
「誰か殺されよったえ」
「ほんまか」
「えらいこっちゃ」
「助けてえ」
「人殺しイ」
大騒ぎになった。何しろ男女とも裸なのだ。危険に対する防禦ができていないだけに、こういう場合の恐怖は大きい。濡れた簀ノ子の上で滑りながら、押しあいへしあい、人をかきわけ、突き飛ばし、我勝（われが）ちに脱け出そうとするのだ。
（彼奴は？）
常盤のことも気になったが、それよりも、〝敵〟に対応することだ。
清次郎は混乱の中で、探そうとした。が、弱い女や男が、倒れて悲鳴をあげ、その上に将棋

倒しになり、強いやつは、人のからだを踏み越えて逃げようとするし、思うように進めない。

騒ぎをききつけて、世話役の坊主たちが、飛んでくる。制止する声と、これに反撥する声、助けをもとめる声——

慈悲の施湯がとんだ修羅の場になってしまった。

清次郎も浴室から出ようとした。

その背後から、凄まじく湯気を巻いて、刀が落ちてきた。

「ぬッ」

ふりかえりざまに、咄嗟に、髪にさしておいた小柄をとって投げる。さらに一跳して、羽目板を背にするや、清次郎は、素早く、次の得物(えもの)にするべく、転った湯桶へ視線を走らせた。

相手は、はじめて、眼前に姿をあらわしている。

やはり裸身だったが、これは、下帯をしめ脇差をさしているほか、大刀を手にしていた。

この混乱の中に、下帯をしめたのであろうか。

おそらく、清次郎に手裡剣を飛ばす前に、人目もかまわず、下帯をしめて、浴室へ入って来たにちがいない。

混乱が起ってから、脱衣所にとってかえし両刀をつかんで来たのであろう。混乱は、その刀の光のせいもあったろう。

「何やつだ」

清次郎は徒手のまま、はっきりと、眼前の敵に向って吼(ほ)えた。

「名か」

相手は黄いろい歯を剝(む)きだして、せせら笑った。

「名など聞いて、何とする」

「名乗れ」

「地獄への土産にするか」

「おれを、吉岡と知ってのことか」

「さあ、どうかな」と、また笑った。勝利を確信した者の、嘲りをこめた笑いだった。

「どうせ死ぬのだ。どっちでも同じだろう」

こう言いざまに拝み討ちに斬りこんで来た。寸前、清次郎のからだは、腕の下をくぐり抜けて、別の手桶をつかんでいる。

刀は空を切った。愕然として立ち直る男の肘に、手桶が叩きつけられた。

「う、しまった」

刀が転る。つーっと滑った。男が身をかがめて拾おうとするのを、清次郎の足が蹴上げている。

胸を蹴られて、のけぞるとたん、刀は清次郎の手に移っていた。

男が、脇差を抜いて斬りかかる。その一瞬に隙はあった。が、清次郎がわざとはずしたのは、相手の素姓と、殺意の所以を知りたかったからである。

「あのときの一人だな」

三年坂で奇襲してきた連中の生残りにちがいなかった。からだつきに記憶があった。
「それほど、おれを憎む、何の理由がある」
「ははは、あるさ」
「言え、誰に頼まれた」
「……」
「……」
「うぬに狙われる覚えはない。誰かの差金であろう」
「武蔵か？」
これにも答えはなかった。
「死ね！」
それが答えだった。猛然と斬りこんできた刀をガッと払った。が、とたんに鈍い衝撃とともに、刀は折れ飛んでいる。
折れ飛んだ刀を男が避けた隙に、清次郎は脱衣所へ走りこもうとした。
その目の前へ、
「どうぞ……」
刀の柄が差し出された。
常盤が、かれの刀の鞘を抱くようにして、差し出していたのだった。
「おう！」

忝ないと礼をいう前に、かれの白刃は、骨と肉を断ち、浴室に血の霧を吹かせていた。
「――おい、話せ」
肩で一息ついて、清次郎は促した。
「ううむ……こ、ころせ」
「話したらどうだ、苦しみをとめてやる。いや、まだ助かるかもしれぬぞ。話のしだいでは、傷の手当てをしてやらぬでもない」
「く、くそ！」
「それとも、とどめを刺してやろうか。このまま、きさまが苦しみながら死んでいくのを見るのも楽しいかもしれぬ、どうだ、どっちにする」
男はもがいていた。そのからだの下から、血はあふれ、簀ノ子に流れ出ている。苦悶する手が、簀ノ子に爪のあとを残した。
「ろ、六道ノ辻……」
思ったより、傷は深かったらしい。
それが断末魔に洩れた言葉だった。
「六道ノ辻？……」
清次郎は眉をひそめた。
それは仏語ではあったが、またほど遠からぬ東山の地名でもある。

三

その六道ノ辻の近くに常盤の囲われた家があった。

このあたり、寺が多いが、公卿や大分限の別墅があり、その大きな屋敷の裏に長屋などが貼りつくようにして並んでいた。

常盤のその家はもと、さる寺の和尚が二条柳町の太夫を退かせて囲っていたという小屋敷で、建仁寺垣にとりまかれ、庭樹もふかく、大原女などが外を通っても、姿も見えない。

常盤は、清次郎を案内したあとで、そんな話をした。

「あたくし、外から、のぞかれるのは嫌なんです。それに、旦那さまも、御身分がら、人に見られては困りますから」

なるほど、所司代役人だったら、そうかもしれぬと、清次郎は思った。

しかし、偶然の符合だろうか。

（六道ノ辻……一体あいつは何を言おうとしたのか）

清次郎は、偶然の一致が、等閑に付せなかった。

「ゆっくりしていって下さいまし」

常盤は、嬉しげに、酒をだし、食事の支度などにいそいそと立つのであった。

まるで、それは、懐かしい恋人をわが家に迎えた、という風情だった。

他人の持物であることを、ふと忘れさせる常盤のふるまいに、清次郎はむしろ警戒した。

（罠であろうか？……いや、そんなことはない。彼女は、刀をとってくれた、あのおかげで勝ったのだから……）

もしも、かれに不利を齎そうとすれば、大小を隠してしまえばよかったのである。

常盤の態度には、一点も疑うところはなかった。

「——名も知れぬ男を、家へ入れてもいいのか」

あやしみながら、清次郎は、常盤を見た。

媚を含んだ微笑がこれに応えた。

「かめしまへん、あての好きな人なんどすえ」

急に京の柔らかい言葉になった。

女のからだが、しなやかに動き、すり寄って来た。

それは、男に飢えた女の姿に見えたが、多分、常盤は、その演技を楽しんでいるようであった。わざと、浮いた雰囲気をつくりだそうとしているようであった。

（——いま、あの男が来たら……）

太田忠兵衛が、もし、やって来たら、困った立場になる。

だが、今夜は来ないことになっているから、と言って、常盤は、かれを誘うのだ。

はじめは警戒していた清次郎も、とうとう酒に手をだした。

飲みはじめたら、とまらない。酒の魅力は兵法者もかなわない。毒が入っていることはない、と思うと、どこまでも、盃を手にするのだった。

そして、とうとう常盤を抱いた。
常盤はすでに、夜具を隣室に敷いていたほどだ。その女の心に応えねばならなかった。
ここまでくると、もう、若者の心は、かなりに、度胸がついてくる。
（来るなら来い、もはや武蔵を討ち損ねた清次郎だ、家の者に知れたとしても、もはやしかたがない、どうせ、恥のかきついでだ）
そんな自棄的な気持さえ起っていた。
女は、思いがけない積極性で、かれをもとめ、半裸になって、あえいだ。黒髪をふりみだし、ときどき、たまぎるような声をあげた。
それは、兄の仇討ちなどを考える女とは思えなかった。
兄を討たれたことの怨みはたしかにあっても、その仇討にすべてを賭けるという、吉岡清次郎とは、たしかに、男と女のちがいもあった。兵法者の家と、そうでない家との違いもある。
それが女というものかもしれない。
清次郎は、女というもののふしぎさに、いまさらのように気がついた思いだったが、かれは、そのまぐわいのさなかに、忍び寄った人の気配を感じた。
あるいは、錯覚だったかもしれない。その音は、一度きりだった。
が、覗かれたような気がしたのである。
果ての後に、かれは、
（あるいは!?）

妄想というべきだったろうか。
（大賀久之進を殺ったのは……）ほんとうに武蔵だろうか？　ということだった。
武蔵が、卑怯な手を用いるのは、吉岡一門の場合でもそうだった。
だから、その話をすぐに信じたのだが、そのことを利用する者がいたとしたら。
清次郎は、身を起した。
「あれ、どないしやはりまして？」
「——いや、どうもせぬ。ただ、ふと気になったことがある。そなたの兄者は、真葛ヶ原でうしろから斬られたといったな」
「へえ、あそこに古い一本松がおしてなあ、片腕松いうてます、あの下で……」
甘い声だった。常盤はまだ、快楽の余燼の中にいた。京言葉を口にするとき、情感の中に浸るという、使いわけをしているのかもしれなかった。
「一寸、そこに行ってみる」
「あれ、どないしやはったん、いまごろから急に……変どすえ」
「変だな。ははは、まあいい、おれは気になると、凝っとしておれないのだ」
かれは立ち上り、帯をしめた。
この六道ノ辻から、八坂神社の向う側にひろがっている真葛ヶ原までは、さしたる距離ではない。
かれは道を辿りながら、

（あそこに、潜んでいたろうか？）
と、人の気配を思いだしていた。
（すぐ背後に来ているようだと、最後までいたことになる。時間がかかるようなら、あとから来たか、常盤の口から、聞きだしたか、どっちかだ）
賭だ、と思った。
かれが想像した通りかどうか。
真葛ヶ原の一本松は、すぐにわかった。
亭々たる巨松が、雷にでも打たれて裂けたらしく、片腕のような太い梢が突き出して、一方が、ざっくりと天斧で切り裂かれているのだ。
（さて、この博奕、目はどう出るか）
清次郎は、数十の蛸の足のようにうねり出た根方に腰をおろし、近づく人の気配に、神経を尖がらしていた。
すでに日は暮れている。長い一日も、漸く暮れたばかりであったが、夏草の生い茂った広い原っぱには、人影は見えない。遠くをときどき、提灯が横切った。松明も幾つか、闇の底を流れていった。
（——武蔵のしわざに見せて、太田忠兵衛が斬った……あり得ることだ。常盤を手に入れるために、忠兵衛が……）
そのとき、闇が動いた。かれは、気のせいかと思った。闇はまた、ひっそりとなった。

（おれの想像が当っているとすると、あの刺客らも、忠兵衛の差金だ。常盤と親しくしていたのを、憎んだのだろう。清水寺での出逢いを見たか、人が告げたか、どっちかだ。そして、憎しみのあまり、刺客をさしむけてきた……）
それが的中していたとしたら、当然、忠兵衛の魔手は、この真葛ヶ原に忍び寄って来るはずであった。
そして、その行為の中に、久之進の死の秘密を解く鍵がある！
そう思ったとき、草が騒いだ。凄まじい矢声とともに、刃風が頭上に風を巻いて落ちて来たのである。
「忠兵衛か」
清次郎は、手にしていた草の束を顔に投げ身を転じていた。かれの敏捷さとともに、その一声が、刺客をたじろがせたのである。まさか清次郎が、そこまで見抜いていたとは思わなかったのであろう。清次郎は、はっきりと見た。十年前とさして変らぬ太田忠兵衛の顔を。そのときはかれの刀は忠兵衛の肩に入っていた。
太田忠兵衛は刀を投げつけて、逃げだした。左の肩を圧えて、丈なす草の中を逃げてゆく。追いこもうとする眼前に、ばらばらっと矢が飛んできた。弓の用意があったのである。
清次郎は追走を断念して、一本松を小楯にとった。
酒の酔いもすでにさめていた。
「所司代役人が相手とは面白い、どこからでも来い！」

清次郎の大音声に応えるように、八坂の森から、数多の五位鷺が、するどく哭きながら飛び立つのがわかった。それは、敗走の馬蹄の音と、弓を持った数人の者が一せいに、逃げだしたせいであった。

剣鬼仆る

一

吉岡清次郎は四条西洞院に近い小路を歩いていた。

（大して変っていない……）

街並を見ながら思った。

藁編笠を深くかぶって、顔を見られないように気をつかっていた。

京にはいつも他国者が多い。平安以来の王城の地である。殊に武士の生地ではなかった。東国をはじめとし、多くの武士が京へは、さながら美女に懸想するに似た憧れを抱いているのは、天皇を擁して将軍宣下しようという野望だけではない。もっとも武辺的なもの、雅びなもの、伝統的なもの、文化と呼べるものへの憧れもひそめていたであろう。

その京の地で、唯一といえる剣法に、〈京流〉があった。

その宗家が吉岡憲法であった。

清次郎重賢はその憲法の弟直元の子であった。かれは京生れらしい、繊細な感受性と、京流

宗家の縁に連なる誇りを持っていた。

源左衛門直綱やその弟伝七郎や又市郎など、よい従兄を持っていて剣の進歩も少年のうちから目ざましいものがあった。

かれが京を離れたのは、その従兄たちを仆した作州牢人宮本武蔵なるものへ、試合を挑むためであった。

むろん、報復することで、吉岡の名声を甦らせるのである。

吉岡憲法の家は、代々、足利家に仕えて、「剣法指南所」であった。その栄誉と名声は、無名の、一牢人によって、泥にまみれさせられたのだ。

源左衛門は片腕を喪い、伝七郎も又市郎も仆れて、あとは若輩の清次郎しかいなかった。

僅か満で十五歳の少年清次郎の双肩に、この大任がのしかかってきたのである。

かれは武蔵の後を追って諸国を放浪した。

慶長九年といえば、徳川家康が将軍宣下した翌年である。まだ乱世の余燼が熾っている。

太閤秀吉が薨じたのが慶長三年だから、六年しか経っていないし、徳川の政権に拮抗しようとして淀君と秀頼を擁する豊臣勢力は、大坂を中心に巻き返しを狙っていた。

そのため、将軍の政治は専ら大名間の勢力扶殖や戦備の充実に意を注いでいて民衆のための政治というものは、全く行われていないにひとしい。

したがって、治安もおろそかにされていた。弱肉強食の時代である。盗賊は山にも野にも海にもいたし、兵法者なるもの、飢えれば、すぐにでも、賊と化す時代であった。

この中で清次郎が武蔵を捜しもとめて旅するのは容易ではなかったのである。

十年ぶりに京へ戻って来たのは、故郷忘じ難かったわけではない、家族恋しかったわけではない。

宮本武蔵が、京へ向ったと近江で耳にしたせいにすぎない。

いまの清次郎は、家族や知人の前に、大手を振って帰れる身ではない。

(武蔵に傷も負わせで、なんとして戻れよう、なんとして、この面がさらせよう)

武士として、兵法者として、恥を知る以上は、むしろ死をもって見えるしかない。

その清次郎が、深編笠に面を隠して、四条西洞院を歩いていたのは、なぜであろうか。

(おれは、ただ……京の街がどう変ったか、それを知りたいだけだ……)

そう弁解するにちがいなかった。

(それだけで、他意はない……)

清次郎は、自分の心に、そう言い聞かせた。

かれは、辻で足をとめた。片側は寺の築地で、片側は屋敷と商い店、反対側は職人の店らしい。

店先に大きな甕が幾つもあり、一目で染物屋としれた。

(染物屋など、ここにあったろうか?)

装いが新しい。そこは、清次郎には忘れ難い家だったはずである。

(――るんはどうしているのか)

年上の女であった。従兄の伝七郎のおんなであった。

あのころ、清次郎の眼には、大輪の花を見るような艶やかさに見え、かれは憧れた。少年にとって、女性の美しさは、近寄り難く、崇高なものに見えたものだ。

(るんはどこへいってしまったのか……)

清次郎は、注意しながら近寄った。

るんが引っ越してしまったのだと思った。そう思った第一の理由は、伝七郎が武蔵に殺されたからだ。

この地にいるのは耐え難かったにちがいない、と思った。

その染物屋で聞けばわかるだろうと思った。

だが近づきかけては、はっとなったのである。

店から女が一人出て来た。その女は、ちらっと、清次郎を見たようだったが、それきり小走りに、歩いていった。

清次郎は凝然として、佇んでいた。

その女こそ、

(るんではないか!?)

十年、という歳月を感じさせなかった。

せいぜい、四、五年くらいしか経っていないような美しさだった。痩せがただったのが、豊かに肉がつき、冴えた美貌に、はっとさせられたのである。

十年の歳月は、清次郎を別人のように変えている。美少年、といわれた昔日の面影は、清次郎のどこにもない。

年月の垢がしみついてしまったような日焼けして黒ずんだ皮膚、凛々しい一文字眉だったのが、幅厚く太い眉になり、涼やかであった眼は、赤い血のすじを走らせた炯々たる眼となり、女に見まほしかった紅唇は、強い意志を秘め、桃の実を思わせた紅頬は、荒々しく削げた凄まじい顔になっている。

そこには十年ではなく、二十年の歳月の経過を感じさせるものがあった。

深編笠をかぶっていて、下半面しか見えなかったせいもあるが、やはり、その変りようのはげしさが、るんには、清次郎と思えなかったのであろう。

そこに思い至ると、清次郎は憤るよりも、ほっとした思いの方が強かった。

(よかった、おれだとわからないほうが……これでよかったのだ)

武蔵を討たずには、戻って来れない身なのだ。

殊に、るんには、恥かしい顔を見られたくなかった。

かれはそのまま、踵をかえした。

だが、夜になると、また、やってきた。

何かかれを惹きつけたのだろうか。

武蔵と決闘の前夜、かれは死を覚悟した。

(死ぬ前に一度、女を……)

その希いで、憧れていたるんのもとにひそかに忍んで来たのである。
「清次郎を男にして下され」
と、すがりついた。
「男になって死にたい……」
その希いを、るんは素直に聞いた。
そのときは、るんが、ただ少年の恥じらいの、しかし強い欲求に、やむなく応じたのだと思ったが、あとから考えてみると、女の気持にはかなり、淫らなものがあったようだ。
清次郎を惹きつけたのは、あの夜の、狂ったような痴態だった。
女は、清次郎のためだといいながら、自分から、不倫の喜びにのめりこんでいったのだ。
女が口実さえつけば、どこまでも淫奔になれる存在であることを、清次郎はこの十年の間に知った。
（るんは、一体どんな生活をしているのか）
知りたいと思った。
かれは染物屋に近づくと、建物について裏へまわった。
裏は、ずらりと甕が並び、物干が並んでいた。
あの女が一人でいるとは思えなかった。亭主はどんな男か、どんな生活をしているのか、一目見てみたいと思った。
かれは裏口に近寄ったとき、話し声を聞いた。

男と女の声だった。

二

「――大坂の城には、浪人者が集っているそうだ」
「まあ、また戦さでございますか」
「長曾我部盛親が逃げだして大坂へ入ったという」
「お大名でしたわね、たしか土佐の」
「そうだ。関ヶ原の戦さで敗れての、ずっと寺小屋の師匠を生業にしていたが、大坂に誘われたのであろう」
「まあ……」
「いまひとたびの、大名に返り咲こうとしてのう。心情はわかる。察するに余りあるが……しかし、過ぎた昔はかえらぬにの」
「どうぞ、あなたさまだけは、そのようなことに」
「ははは、いまさら、わしを誘う者など、ありはせぬ」
「でも、戦さとなれば、兵法者を集めるのが」
「ははは、置けい、いまの私は、兵法者どころか」
「……」
「染物屋の亭主だ」

「……」

「もはや、刀の抜きかたも知らぬよ」

絶望的な、かわいた笑い声だった。

清次郎は戸口に目をあてた。隙間から内部が見える。るんの顔が見えた。行燈（あんどん）の明りが、柔らかく照らしている。

その前に坐った男の顔を見て、清次郎は思わず声をあげるところだった。

その男は、片腕がなかった。すでに初老の、半白の髪で、痩軀であった。横顔に記憶がある。

従兄の源左衛門直綱ではないか。

宮本武蔵の激烈な一撃を受けて、右腕を打ち折られたのだ。所司代立ち合いのもとに行なわれた凄絶な試合の様子をいまでも覚えている。宮本武蔵は無雑作な一撃で、源左衛門の腕を打ち折ると、

「これが京流か」

と、嘲笑ったのである。

その憎体（にくてい）な声は、いまだに、清次郎の耳朶（じだ）にこびりついている。その声をもとめての十年の放浪であったといってよい。その声に、

「京流に負けた」

と、いわせるための追跡だったのだ。

源左衛門直綱とるんの仲は一体……と何かにすがるような気持で思った。それは無理なこと

であった。あり得ないことではなかったのだ。

（兵法を捨てた……）

と、源左衛門は言った。

兵法者から染物屋になっていた。それはるんの亭主以外の何ものでもなかったのだ。

「——いっそ、嬉しゅうございます」

と、るんは言い、にじり寄るのが見えた。

「あなたさまが、京流吉岡の兵法者であったなら、大坂方ではおそらく、黙っては見過しはしなかったでしょうから」

「——それもそうだ」

「必ずや、大坂へと、誘われたでございましょう。あなたさまだけではなく、多勢の御門弟とともに」

「であろうな。大坂では一人でも、武者がほしいところだ」

「余の人はどうなってもかまいませぬ。が、あなたさまにだけは……いってほしくない」

るんは、源左衛門の膝に両手を置き、はげしく顔を振って、

「あなたさまが、もしも戦さの中で討死なさるようなことがあったら、るんは、生きておれませぬ」

「ははは、つまらぬ心配をするな。この腕で……」

と、かれは肩を振った。中味のない袖が揺れた。

「誰が一丁前の兵法者として、召し抱えてくれようぞ、常の者より劣る不具じゃ……」
「いいえ、いいえ、たとえ片腕がないとて」
「不具じゃ」
「それは……でも、名誉のおけがでございますもの」
「名誉の」
かれは、泣くような顔になった。
「名誉か……そうかな」
「はい」
「否（いな）とよ、これは恥のしるしよ」
自嘲的な声であった。
「いいえ、そのようなことはありませぬ。立派に試合をなさいましての、名誉の……」
「試合に敗れるとは、戦さで負けたも同じことよ。生き恥をさらしているだけじゃ」
「どうぞ、そのようなことは仰せなさいますな。あなたさまは、わたくしのいのちでございますもの」
「片腕がなくてもか」
「ええ、たとえ……どのようになられましょうとも、ひとたび、夫（つま）と思い定めた以上は」
すがりつくるんを、源左衛門は、片腕で抱きしめた。
（なんということだ）

清次郎は、足音をぬすんで、その場を離れた。
路次を出ようとしたときである。ふいに提灯がずいと、突きだされた。
（しまった！）
咄嗟に身を翻（ひるがえ）そうとしたが、場所が場所だ。ここで騒ぎを起しては、源左衛門に気がつかれる。その思いが先に立った。
かれは度胸をきめて、明りの中でにやっと笑った。
この時代、まだ提灯は一般に普及していない、行燈が文字通り夜間往来の行く灯であった。
提灯も挑灯と書いたようである。
「町奉行所のものだ」
と一人が言った。
五人ばかりの同勢である。治安の悪い時代だから、一人や二人では、盗賊団などに出食わしたら、取締る力がない。
「其方は何者だ」
と、別の男が怒鳴った。
「わしか……」
清次郎は、ゆっくりと歩きだしている。少しでも、この家から遠去かりたかった。話し声も聞かれるとまずい。
「わしは……怪しいものではない」

「なに！　怪しいか怪しくないかは、当方で判断する。申せ、何者だ」
「ははは、何と申すほどの者ではないさ、見らるる通りの牢人者よ」
「ろ、牢人者はわかっている」
　嘲弄されていると気がついて、提灯を持つ手が、ぶるぶると顫えた。
「な、名前だ、名はないのか」
「名前か、あるさ」
　言いながらどんどん歩いてゆく。
「うぬ、待たぬか、逃げるのか」
「逃げる？」
　と、けげんそうに、はじめて足をとめた。
「逃げることがあるか、わしは何も悪いことをしてはいない」
　ここまでくれば、もう大丈夫だった。少々怒鳴っても、染物屋まではとどかない。
「では、名乗れ」
「名前か、うむ……吉（よし）、吉野、吉野だ」
「吉野？」
「そうだ、吉野源次郎。ははは、これが、わしの名だ」
「吉野源次郎、ふむ」
　小頭（こがしら）らしい男が、目くばせした。すぐに一人が腰にぶら下げていた帳面に、筆を走らした。

といっても、まず大きな帳面をひらき、矢立を腰からぬきとって、筆を出し、墨壺に穂先を浸して、それから書く。
　いまから思うと悠暢な動作だが、当時は特にのろいという感じではない。
「年齢は？」
「さあ、そいつは、忘れた」
「なに！」
「尖（とが）るなよ。浪々の歳月が長いと、年齢など忘れるさ、用がないからな」
「だが、自分の年（とし）くらいは」
「左様さ、二十から三十の間だろう。もうよいか」
　と、去ろうとするのへ、待て、と追いすがって、
「まだだ。生国はどこだ、行先は？　いま何をしている」
「おいおい、そうたてつづけに聞かれても、うまくは答えられん。ゆっくり聞いてくれ」
「生国だ」
「ここさ」
「なに!?」
「京さ。ははは、そこらの小路に捨てられていたらしいな。ははは、それでわかったろう。行先も、何もない。死ぬまで、こうやって生きているだけだわさ」
　そう突っ放されると、それ以上は、町奉行所の役人らも容喙（ようかい）できなかった。

ともかくも両刀さしている以上は武士であり、町民を威(おど)すようなわけにはいかない。
解放されて、清次郎が歩きだそうとすると、
「おい、待て」
と、また呼び止められた。
「なんだ、まだ用があるのか、執(しつ)こいな」
「どうも、あいまいだ。第一、牢人たるそのほうが、なぜ、憲法染めのまわりで、うろうろしていたのだ」
「けんぽう染め？」
はじめて耳にする言葉だった。
「そうだ、知らんのか、あの染物屋を」
「いや、大体、見当はつくが、憲法染めとは一体(いったい)……」
吉岡憲法は、吉岡一門の宗家たる当主が代々の世襲名である。
「室町御所剣法所」たる家系が、剣法を数代前に憲法と改めたらしい。その憲法の名がしかし、染物の名になっているとは、あまりにも、思いがけなかったのだ。
「あの家は、吉岡憲法どのが、染物屋になられたのじゃ、いや、だからそう申すのではない、憲法染め、という染め方がある、かの家だけのものじゃ、それゆえ繁昌しておる」
「ほう、左様か……憲法染め、となあ」
「おぬし……」

と、提灯がぐっと眉毛を灼(や)かんばかりに近づけられて、
「かの家にゆかりでもあるのではないか」
「い、いや、滅相な」
あわてて、顔を隠すように、手をふって、
「左様なことはないさ、ただ、なんとなく……」
「面妖(めんよう)だぞ、こやつ。では、あの路次で何をしていた」
「……」
「通りならば、別段のことはないが、あの路次は行き詰りじゃ、さては、物奪りに侵入しようとして」
「いや、違うよ。それア、誤解だ」
洒脱に清次郎は笑って、手を前にあてた。
「これさ。それ、申すではないか、出もの腫(は)れもの、ところきらわず、とな」
「なんだ、小便か」
それで納得したらしい。
漸く、こんどはほんとうに解放された。かれはほっとした。が、帳面に記入された咄嗟の思いつきの出鱈目の姓名が、ヒントになって、吉岡清次郎であることを思い出させるようすがになろうとまでは、気がつかなかったのである。

三

清次郎が、宮本武蔵の挑戦状ともいうべき高札を目にしたのは、その翌日の夕方のことであった。

それは三条大橋の西詰に立てられていた。往来のはげしい場所であり、情報伝達のできなかった時代としては、こうした高札が唯一の手段といってよかった。

　明日寅の下刻、洛北本妙寺跡に
　て吉岡一門との試合を行ふもの
　也

　　　　作州牢人　宮本武蔵

と、あった。

夕陽の中にこれを見たかれは、愕然とした。

（やはり、武蔵はいたのだ。この京に……）

京のどこかに隠れている武蔵が、〝吉岡一門〟にふたたび試合を挑んできたのだ。

吉岡一門、と大雑把な表現であった。

これは今日の感覚では、いぶかしいにちがいない。

が、武士が、〝恥を知る者〟であった時代はこれで通告は充分であった。

この通告は、そのまま、天下へ知らせたことになり、この挑戦を受けなければ、武士として、

敗北以上の恥辱を認めたことになる。

武士として勝敗は、時の運である。が、逃げた、となると、これはもう、表を公然と歩けない。

うしろを見せる、ということは、うしろから斬る、ということよりも、卑怯とされる時代だったのである。

武士の風上にもおかれなくなる。つまり、武士をやめなければならないのだ。

況や、剣を以て立つ〝兵法者〟にとっては致命的であった。

武蔵が、当初から狙っていたのはそれである。

京に於て、京流とて聞えた吉岡一門の総帥憲法に試合を挑み、これに勝つ。そのことによって、剣名を天下に馳せた。

無名の作州牢人が、一躍、凄剣をつかう兵法者として〝宮本武蔵〟なるものの名を記憶させたのである。

以来、十年経っている。

武蔵が、さらに挑んで来たのは、吉岡と京流の残滓を払底しようというのか。

あれだけ勝ちを占めながら、さらに、根まで断とうとする執念に、兵法者としての欲望以外の、残忍な嗜虐性まで感じさせたのである。

だが、すでに、高札は、多くの人の目にふれている。

（吉岡一門……と言ってきているのだ）

と、清次郎は歩きながら考えた。
(どれだけ残っているのであろうか……)
弟子たちは多勢いた。
憲法の弟子たち、先代の弟子たち、長年の間の弟子の数など、とても数えきれない。
京流華やかなりしころの吉岡道場は、一丁の半ばを占める広大な屋敷を有し、道場からは終日、木剣を打ち合う音が聞え、出入りする者の影が絶えることがなかった。いつも、二十人や三十人の内弟子はごろごろしていたし、近国の大名から、兵法者召し抱えの使者が往来して、その馬や駕や供などで、門前は殷賑をきわめたものだ。
その弟子たちが、あるいは、道場をひらきあるいは、本家を支えて、頑張っているのであろうか。
武蔵の挑戦は、吉岡家とその一門の存在を十年もの間、留守をした清次郎に伝えるものといえた。
(だが……)
そうだとすると、あの源左衛門直綱の姿は異様である。
如何に落ちぶれたとはいえ、次代の吉岡憲法ともあろうものが、染め物で生計を立てるようになるとは。
職業に貴賤はない。そのことは清次郎も十年の放浪の間に、つくづく感じて来ている。
だが、あまりにも変りすぎる。武士であり兵法者であったなら、たとえ片腕がなくなっても、

口で教えるだけでも、後進の指導はできるはずだと思った。
それが清次郎の甘さだったかもしれない。名声の落ちた吉岡京流の剣法を、そのようなかたちで、誰が習いに来よう。
(どこに一門の者がいるのだろう)
武蔵が公然と挑むからには、どこかにいるのであろう。
清次郎はその人々と逢いたいと思った。
が、いまのかれの立場は、それが出来ないのだ。
(試合の場にいけば……そして、武蔵と闘えばよい。誰より先に)
それが賢明だと思われた。
翌朝、まだ暗いうちに、かれは泊ったところを出た。木賃宿ともいえない、民家であった。
乏しい懐中では、宿泊する金にさえ不足した。かれは、編笠から、狭扇から、換金できるものはすべて手放した。
よれよれの着物と、裾のすり切れた袴と大小だけである。牢人というより、乞食に近い姿だった。これが故郷の人々に見せられるだろうか。
だが、
(討てばいいのだ、武蔵を討ちとりさえすれば……)
どんなにそぼろな姿であっても、兵法者は強ければよい。勝ちさえすれば、すべてが許されるのだ。

洛北本妙寺のことは、すでに聞いていた。五年ほど前にそのあたり一帯が火事で焼失したが、何かの祟りがあるとかで、再建もされず、そのまま放置され、狐狸の棲家となっているということであった。

武蔵は、いつもダマシの手を用いる。闇の中に潜んでいたり、樹上から突然、怪鳥のように飛びおりたり、背後から声をかけたり——そうした手を使うことも、兵法の試合としては咎められない。

兵法は白昼だけのものではない。公然のものとは限られていないからだ。闇夜の礫は避け難しというが、避けるほどでなければ名人達人とはいわれないのだ。そこに兵法のきびしさ恐ろしさがある。

清次郎が本妙寺にいったのは、かなり早い時刻だった。

途中で鶏鳴を聞いた。寅の下刻まではまだ、半刻ほどある。

清次郎は本妙寺の焼あとに来た。武蔵はきっと、どこかに隠れているにちがいないと思った。かれは鐘楼あとの石垣の方に近よった。さながら、その狙い目があたったように、突然、闇を裂いて火が吹いた。

轟然たる銃声は、ひゅっと火の玉が顔を掠めたあとであった。

(伏せていたのか)

卑劣な。武蔵とは思えなかった。が、とにかく闇鉄砲だったのである。次の弾丸をこめようとする前に、清次郎はとびこんでいっている。

〝敵〟は、鉄砲をあげて、かれの一刀を受けとめようとした。鉄砲を斬るのは愚かであった。かれは拝み討ちとみせて、刀をひくや、突いた。手槍のように突いた。

手ごたえがあった、と思ったが、素早く、身を翻している。その背後に追いすがって斬り下げた。

鋭利な刀は一寸でも肉体を斬り裂けば、その攻撃力を奪うことができるのである。

鉄砲を持ったまま、その男は、前へのめりたたらを踏んで、堂ッと倒れた。

駈けよって、髷をつかみ、引き起して顔を見たが、おぼえはなかった。

(誰が……何のために?)

いやしくも兵法者の試合に、闇鉄砲とは、宮本武蔵とも思えぬ。刀で迫ってこそ、意表をつく手も許されるが、闇鉄砲などは、試合の場に用いるものではない。第一、鉄砲という飛道具を使うということ自体が、もはや剣の闘いから、外れている。

白々と明けて来たなかで、清次郎は、次の敵にそなえた。

だが、ひっそりとした寺の焼あとには、動く影とてなかったのである。

四

(誰がおれを狙ったのか?)

鉄砲は明らかに待ち伏せだった。かれらが本妙寺に行ったのは、あの高札を見たからである。

(武蔵の廻し者か?)

あのあと、暫く清次郎は様子を見ていたが武蔵はもとより、吉岡ゆかりの者も、一人も現われなかった。

（くそ！　あの高札は罠だったのか……おれを嵌めるための！）

嵌められたおのれの愚かさを嗤いたい気持だった。

武蔵が、しかし、そこまで卑怯だとは思いたくなかった。そこまでしなければならぬ理由はない。

かれはこの京へ着いた日のことを思いだした。

清水寺の舞台で一人の女性と知りあった。常盤という名だった。

兄が宮本武蔵に討たれたという。武蔵との試合をするべく真葛ヶ原へゆき、斬られた。卑怯な瞞し討ちだった。

だが、それは、武蔵ではなく、所司代役人の太田忠兵衛だったのである。清次郎がそれを突き止めたのは、かれもまた忠兵衛の罠にかかりかけて判然としたのだ。

忠兵衛は、十年前に、かれの立場に同情を示してくれた男である。その恩義もあり信じていた。

それが裏切られたのだ。常盤が清次郎に想いを寄せたことが、かれの憎悪を煽り、殺意を抱いたのであろう。忠兵衛は、清次郎が事の真相を突きとめに真葛ヶ原へいったあとを跟けて、不意打ちを喰わした。

だが、清次郎はこれを斬りかえして、かえって傷を負わせている。

相手が所司代役人では、しかし、一介の浮浪人たる清次郎では、出るところへ出ても分がなかった。

（今度も、彼奴か？）

執拗な忠兵衛である。清次郎はそれ以来、常盤に逢わなかった。宿も定めなかった。

京には仕官をもとめる牢人者の数も多い。清次郎は姿を晦ませたと思った。

なのに、向うの罠に嵌まってしまったのだ。

清次郎は所司代に斬りこむことを考えた。だが、所詮、多勢の役人たちに狂気と見られて乱刃を浴びるのは目に見えていた。

（——京を離れよう）

清次郎は決心した。

（武蔵がこの京にいないのなら、おれがとどまる理由はないのだ）

武蔵が生きているかぎり、追わねばならぬ。

いまの清次郎には、それしか人生の目的はなかった。

京流吉岡の剣名を再興することも大きな意義があったが、それも宮本武蔵を討ったのちのことだ。絶対といえた。武蔵を討たずに京流を復活させようと思っても、それは木に拠って魚をもとめるようなものだった。

（京を離れる前に、もう一度……）

常盤に逢いたいと思った。

東山の六道ノ辻の近くの常盤の家にいった清次郎は、しかし、そこにむざんな女の姿を見なければならなかったのである。

常盤は夥しい血の中でのたうっていた。

傷はいずれも浅く、急所をはずれていた。が、出血は夥しい。かれは忠兵衛の顔を思いだした。

わざとしたことであろう。ひと思いに殺さずに、小さな傷をつけて、じわじわと殺してゆく。苦悶にのたうつ常盤を見て、忠兵衛は残忍な笑みを洩らしたのであろう。

「しっかりしろ、常盤」

「あ……あなた……」

「誰がやった。彼奴だな。太田忠兵衛だな。そうであろう、忠兵衛めが……」

清次郎は抱え起した。

もう、駄目だとわかった。かれは、常盤の断末魔の姿に、おのれの絶望感につながるものを見たのである。

「常盤、死ぬな！」

断末魔の苦悶の果てに、ぐたりと重くなった女を抱えて、清次郎は、心からそう叫んだ。

「常盤、死ぬな、死ぬな……」

血まみれのからだをかれはいつまでもいつまでも抱いていた。

次の夜、もう夜明けに近い時刻だったが、清次郎は太田忠兵衛の屋敷に乗りこんでいっている。

だが、忠兵衛はいなかった。家人をとらえて聞くと、払暁から、御所にいっているという。この日、御所で猿楽の催しがあり、特に門を開けて庶人の見物を許すということで、その準備と警備の指揮のために、昨夜から参内しているという。

嘘ではなかった。猿楽のことは、清次郎も耳にしていた。

かれはただちにとってかえした。身分の上下男女の差別なしに猿楽参観が出来るとあれば、牢人であろうともかまわぬはずである。

だが、群集にまじって御所に入ろうとした清次郎を、役人の一人が見咎めた。

「あいや、お待ちなさい」

「――それがしのことか」

「左様……」

すでに太田忠兵衛の家人から注進があったのか、と思った。が、そうではなかった。

「両刀を預る」

と、役人は顎をしゃくった。

見れば御門わきに仮小屋が出来ていて、ずらりと刀が架かっている。名札をそれぞれにつけてある。

庶人の参観を許すといっても、やはり刃物を持ち込むのは許されない。

清次郎は素直に両刀を預けた。いざとなれば、役人の刀を奪って忠兵衛を斬ればいい、と思

った。

　無腰になって、御所に入った清次郎は、舞台を見るどころではない。なるべく目立たないようにしながら、忠兵衛を探した。

　はじめて入った御所である。全く勝手がわからなかった。群衆は猿楽を見るよりも、御所に入れるという昂奮と喜びを率直にあらわして、さんざめきながらぞろぞろと歩いていた。

　清次郎はかれらに押されて、いつか舞台の前の土間へ入っていた。

　舞台では、高砂をやっていた。かれには興味はない。

（彼奴はどこだ？）

　群集はみんなきちんと坐って見物しているのである。その中で、きょろきょろとあたりを見まわしている清次郎の姿は、妙に目立ったらしい。警固の役人が、近くに来ていて、かれの挙動を見まもっていたのか、ひょいと頭を上げて、あたりを見たとき、

「こりゃ、頭が高い」

　六尺棒が、落ちて来た。こつと、頭頂を打たれた。

「何をする！」

「頭が高い！　坐れ」

　低い声で、だが厳しく役人は叱咤した。

　場所が場所だ。しかたはなかった。清次郎は、坐った。武士が頭を棒で打たれたのだ。口惜しい思いが、胸にこみあげた。

　だが、いまは、そんなことに拘泥してはいられない。忠兵衛を探さねばならないのだ。かれはこの場を出ようとした。そして身を起した。

　とたんに、また、

「頭が高い！」

　と、六尺棒が落ちて来た。

　二度目である。さすがに、清次郎はムザと打たれはしない。さっと、身を躱すや、ぐいと摑んだ。

「無礼な！」

「や、何じゃこやつ、放せ！」

　狼狽して引こうとするのを、その力を利用して、さっと飛びかかった。数人の見物客の上を飛んだ。武者ぶりつくようにして素早く、刀を抜きとった。

「武士の面上を打つなど、許せぬ」

　言いざまに、斬り下げた。

　血が噴き、断末魔の叫びがつんざき、人々は騒然となった。悲鳴をあげて逃げ出そうとする女たち、怒号を発して駈けよる役人たち、静めようとする公卿や白丁や――凄まじい混乱に陥った。

　清次郎は、飛びかかってくる役人たちと斬り結んだ。何人斬ったか、どこを斬られたかわからない。髪は乱れ全身、血まみれになってかれは狂ったように、土間から舞台へ飛びあがり、

そこら中、血まみれにさせて、闘った。
太田忠兵衛が、薙刀を手にして立ち向ってきたとき、もう清次郎は精根尽きていた。かれの眼には、その忠兵衛の嘲りを含んだ顔が、武蔵のそれに見えた。
「牢人の分際で、御所をけがす不届者、所司代役所の太田忠兵衛が討取ってくれる」
かれは高々とこう叫んだ。それは清次郎に聞かせるよりも、遠きの堂上衆や、大名がたへの宣伝であった。
薙刀が相手である。清次郎は内懐へ躍り込もうとして足をすべらした。血糊ですべったのだ。
「やった！」
人々はどよめいた。倒れたところを薙刀が斬る、と見たのである。が、忠兵衛は刃を退いて、立て、と言った。
「倒れた者を斬る刃は持たぬ」
それは立派な言葉に聞えた。ぶざまなのは清次郎であった。かれは血の中から立ち上った。瞬間、ひゅっと、偃月(えんげつ)なりの刃が走って来た。それが、清次郎の二十五年の辛苦の人生の終りだった。清次郎の首は、血尾を曳いて、三尺飛んでいた。
その一瞬に、かれは何を見たろうか。兵法者の運命の儚(はかな)さか、片腕は失っても、るんとの静かな倖せを送る源左衛門の諦めきった表情か。夥しい血のうみの中で、首を失った清次郎の四肢は、無念を遺して、ひくひく動いていた。

実業之日本社　一九八一年二月刊

解　説
——早乙女作品群の今日性——

石井冨士弥(いしいふじや)
（文芸評論家）

本編『武蔵を斬る』は、これからお読みになる方も、すでに読了された方にも、もう特にいらざる解説の要はなかろう。——吉岡憲法の嫡男直綱の従弟吉岡清次郎重賢(しげかた)が宿敵宮本武蔵を討つべく各国遍歴するシリーズ12話で、開巻から凄まじいテンポで展開する筆力に、ただ従っているだけで、一気に最後のページが現われるというハードボイルド型剣豪の作品だ。
これは、現役一線の〔時代小説〕作家がエンターテインメントを愛する読者に、その幅広い才質技量の一方で、余裕を持って応えてみせた作品ともいえよう。——そこで、ぼくは、作家の全体的な作風を眺めながらエンターテイナーとしての部分と、本質的な部分から〔現役〕作家としての位置を探り出す案内役を、ここでつとめたい。
少々先を急いだ進め方だが、大きく分けるとこの多彩な作家のおびただしい作歴は、例外や随筆、史談を除いてまず〔歴史〕、それから〔時代〕、〔伝奇〕の三傾向に分類されよう。で——それらの読者が歓迎する、いわばメニューを大摑(おおづか)みに分析して眺めてみると、こうなるようだ。

まず最初の〔歴史〕だが、これはつい先頃からようやく上梓され始めた昭和46年から雑誌「歴史読本」に連載開始以来未だ続稿中の『会津士魂』や、同じ会津出身で幕末から明治に渡米した桶屋の娘の変転を描いた『おけい』などが代表するこの作家得意の領分の博学な歴史知識を正攻法から生かした系列である。——そして、心師山本周五郎への傾倒からでは、『糸瓜ざむらい』以下の武家物や、『四万六千日』他系列の市川庶民物、『剣鬼仆る』以下の剣豪物があり、これらを包含すると、いわゆるマゲをつけていながらきわめてリアルな生活感覚で過去の世界を小説的再構築する〔時代〕物のジャンルとなり、幕末挫折武士を扱った『残映』他の短・長編群に発展する。——そして、最後が剣豪や忍者たちの『風魔忍法帖』『猫魔岳伝奇』『忍法かげろう斬り』と題名からもその豊かなロマン性の想像がおつきになるに違いない正史に対置したフィクション設定の面白さで魅了する〔伝奇〕長編群であるわけだ。

しかしこれは、最初におことわりしたようにあくまでもはなはだ大雑把な系列わけで、仔細に眺めたとき、かなり微妙に各系列が入り組んで作用し、この作家の華やかな作柄を富ませ成立させていることに気づく。

早乙女貢は、その作家的出発において、ロマン性の可能な大衆文学を、そして史実に学識ある資質を生かして、過去を題材とする時代物作家の道を選んだ。この場合、小説は面白くなくてはならない、という鉄則がある。

まだ〔純文学〕と〔大衆文学〕が高級・低級の差別に分かれていた時代のことだが、その時点で、資質的に単なる身辺雑記ふうの日本的私小説が主流を占める純文学の送り手に徹すること

とは、ありあまる小説形式への夢には、むしろ苦痛を覚えるほどだったのかもしれない。現実に——あるいは史実のうえに、実社会、実人生に満たされざる虚構を架して、自らが、いわば過去の小説的世界に、凡俗の市井人、あるいは史上著名人に実感情をもって〔再生〕することのできる文学的手段のほうが、もっとも身近な体質的な道であったようだ。

——これらの要素が、一人の作家の内部に複雑に醱酵すると、歴史系列の作柄でも、ある時は、純粋歴史をベースに据えながら、その掣肘に納まり切れない構想力が豊富なひろがりをもち出し、たとえば『独眼竜政宗』『北条早雲』『由井正雪』『血槍三代』というような、やや伝奇系列に入り込む快長編群をうみ、その構想力のロマン性は武家・市井物にもストーリーに奥行きのある『赤い渦潮』『泰平の底』『城之介非情剣』他の長編群にもさらにひろがってゆく。

——と、こうみてゆけば、その伝奇的傾向が、文字どおりロマンを変幻自在に可能にする忍法物に辿りつくのは、まさに水の流れが低きにつくの理のとおりといえよう。これらを結びつけたのち、早乙女貢の作風がもうひとつ貪欲な読者をひきつける愉しみは、エロティシズムの饗応で、これがたとえば『おれが天一坊』他のように、歴史・時代・伝奇を問わず渾然と按配されるところに他の作家と、画然とする特異な現代性があろう。もっともこれは、後段に述べるように、むしろ作者のニヒリスティックな底重い人間観に関わりがあって、単なるポルノサービスでなく、人間の業として捉える結果であろう。

※　※

早乙女貢の作家的スタートは、昭和20年代後半からだが、同43年『僑人の檻』で第60回直木

賞の受賞以後が、本格的活動期ということができる。――ところで、これがじつは、この作家のその後の作歴に大きな影響を与えているようだ。当時は読物が、劇画やテレビに取って代わられる同40年代前後のいわば娯楽小説最後の黄金期で、戦前からの大家が目白押しだから、新しく若手がこの戦列に加わるにはナミ大抵のことではなかった。

そしてこの期の特徴は大衆文学も、低級な読物から脱皮する文学性志向の気運が澎湃(ほうはい)と興り、早乙女貢の敬慕する山本周五郎が、その意味で時代小説を文学的に向上させ一変させている。一方には剣豪ジャンルとして五味康祐・柴田錬三郎、娯楽読物に山手樹一郎、それに吉川英治・大佛次郎などの巨豪作家が君臨していた。いってみれば早乙女貢の作家的出発は、あらゆるジャンルが先輩たちに占められ八方塞(ふさ)がりの状態で、いわば遅れて来た新人といっていい時期に遭遇したわけだ。

だが、そこにこそ、この作家の非凡な才質が見いだせるのだが、その当時の、どちらかといえば旧来の保守的安全モラルを基調とする〔大衆文学〕の中に、独自の視点を探り当てた。作者自身の――政権交替劇でしかなかった明治維新史上逆賊視された会津藩を曾祖父の地とする出生から、いわゆるヒーローや権力に対する強い嫌悪と反発と怨念とを自らの視座に据えたのである。だから、当然ながら先にあげた作品群の主人公は、本編の主人公吉岡清次郎重賢を含めて、本質的には非情な人生観で生きる。

ときに政宗や、早雲、太閤記の秀吉のような英雄を扱っても心情は冷徹だ。その眼からでは男女の営みもまたそらさず冷視される。それが、類作とは異なったポルノグラフィの魅力となって現われるときもあろう。これらの特色は、作者自身愛しているようにみえる自虐的にさえ自らを抑制し、鍛え抜いた多くの忍者や剣豪たちを素材にする場合が多いことで、象徴的だ。

そしてこの非情な視点こそが、弱肉強食に生きざるをえない現代では最も今日性(アクチュアリティ)があり早乙女貢の作品が、不振といわれる時代小説界で、いつも読者に歓迎される威力を発揮する基調となっているといえよう。

光文社文庫

長編剣豪小説
武蔵を斬る
著者　早乙女貢（さおとめみつぐ）

昭和60年12月20日　初版1刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　慶昌堂印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社　光文社
〒112　東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03 (942) 2241 (代表)
振替　東京 6-115347

ISBN4-334-70268-6 Printed in Japan

お願い　光文社文庫をお読みになって、どんな感想をもたれましたか。「読後の感想」を編集部あてにお送りください。
また、このほか光文社文庫では、どんな本を読まれましたか。今後、どんな本をお読みになりたいですか。
どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。

光文社文庫編集部

光文社文庫 好評発売中!
ベストセラー独占の推理小説群!!

公開株殺人事件	清水一行
頭取室	清水一行
大物（第一部・第二部）	清水一行
埋められた手紙	佐野洋
尾（びこう）行	佐野洋
盗難車	佐野洋
女高生俳句殺人事件	斎藤栄
謎の人命電話	斎藤栄
嫌煙権殺人事件	斎藤栄
北陸トンネル殺人事件	斎藤栄
金糸雀の唄殺人事件	斎藤栄
鎌倉薪能殺人事件	斎藤栄
鬼畜の宴	勝目梓
処刑のライセンス	勝目梓
暗黒の狩人	勝目梓
もう一人の乗客	草野唯雄
解明旅行	草野唯雄
喝（かっさい）采	草野唯雄
死霊鉱山	草野唯雄
火刑の女	草野唯雄
戦場の狩人	大藪春彦
謀略の滑走路	大藪春彦
処刑軍団	大藪春彦
真説忠臣蔵	森村誠一
青春の神話	森村誠一
密室航路	夏樹静子
Wの悲劇	夏樹静子
その子は目撃者	夏樹静子
確率2/2の死	島田荘司
妖魔陣	菊地秀行
CF愚連隊	喜多嶋隆
CFガール	喜多嶋隆
多摩湖畔殺人事件	内田康夫
天城峠殺人事件	内田康夫
アマゾン・チェイス	田中光二
わが名はヘリック	田中光二
魔海のヘリック	田中光二
怒りのヘリック	田中光二

光文社文庫 好評発売中!
ベストセラー独占の推理小説群!!

白い密室	門田泰明
癌病棟のメス	門田泰明
帝王コブラ	門田泰明
妖獣の村	西村寿行
ふたたび渚に	西村寿行
蘭菊の狐	西村寿行
顕（あきこ）子	加堂秀三
大韓航空007便	福本和也
成田空港殺人事件	福本和也
「鋼鉄の鮫」作戦	檜山良昭
円卓の七人	檜山良昭
コンピュータの身代金	三好徹
モナ・リザの身代金	三好徹
それぞれの門	三好徹
会社喰い	邦光史郎
武器商社	邦光史郎
俺は秘密諜報員	胡桃沢耕史
犬墓島	辻真先
はるひワンダー愛 迷犬ルパン・スペシャル	辻真先
背後の殺人者	菊村到
誰が引金をひいた	菊村到
洞窟の生存者	菊村到
ベンチャー・ビジネスの神話	広瀬仁紀
悪の決算	広瀬仁紀
女の牙	川上宗薫
六人目の女	川上宗薫
ダブル・フェイス	大谷羊太郎
殺人変奏曲	大谷羊太郎
殺人契約 —殺し屋・貴志—	山田正紀
逃げ出した死体	山村正夫
盲目の鴉	土屋隆夫
九十九点の犯罪	土屋隆夫
贅沢な被葬者	黒岩重吾
石に咲く花	黒岩重吾